

---

# IS 《インフィニット・ストラトス》 駆け抜ける光

きつねorとら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 駆け抜ける光

### 【Nコード】

N8475S

### 【作者名】

きつねorとら

### 【あらすじ】

少年は人の暖かみを知った。

世界から見捨てられていた少年が成長し、ISを動かせるまでになった。

少年は戦う、母の為、この暖かみを伝えるために……

純粹にIS、ガンダム好きの人は嫌悪感を感じてしまうかもしれません。もし感じたならすぐに、戻られることをオススメします。

なお、作者はあまり上手く書けてないので考慮していただけだと。

アンケートを実施中ですので詳しくは「アンケートについて」を見てくださいませ。

## プロローグ（前書き）

なんか自分で何を書いてるんだ？って状態ですwww  
もう一つの小説と一緒に頑張っていこうと思います。

よろしくおねがいします！

## プロローグ

少年は不思議な能力を持ってこの世に生を受けた。しかし、両親は気持ち悪がつて少年を研究所に渡した。

研究所内での生活は残酷なものだった。少年の他にも同い年の子がいたのだが、全員実験材料にされ、幼き命を散らす者もいた。拷問にも近いそれを耐えるのに疲れた少年は研究所から逃げた。

逃げたのはいいが食料も無し、体力の限界も迎え、少年は倒れた。

「ああ、僕はここで死ぬのか……せつかく逃げたのに、みんなと同じように……」

少年は死を覚悟した。誰も助けしてくれない、こんな奇怪な能力があるからこんなことになったと、彼は自分を始めて呪った。

「……！ 大丈夫か！？」

その声の方向へ向こうとも力が入らない。だが、声からして女性なのは分かった。

「誰がこんな酷いことを……！ 頑張つて耐えてくれ！」

女性は少年を抱き抱えると、走っていく。

「目が覚めたか？」

少年はいつの間にか寝ていたようだった。目が覚め、周りを見渡す。

この女性の部屋なのか、生活に最低限の物しかなく、いたってシンプルだ。

「全く、こんな小さな子を捨てるなんて……親失格だな！」

女性は怒りをあらわにしている。少年にはなんで怒っているのか正直分からなかった。

「あの……なんで怒ってるんですか……？」

「当たり前だ！ 君は捨てられたんだぞ！？ 君はどうも思わないのか？」

「……だって、ぼ……僕は、普通じゃないから……」

そう。こうなったのも全部、この奇怪な能力のせい。普通に両親と暮らして、友達遊んだりしたかった。でもそんなことは許されな  
いんだ……。

「……何を」

「え？」

「何を馬鹿なことを言っている！ 普通じゃない？ だから何だ！  
？ だからって人を捨てるのか？ 君はそれでいいのか！？」

少年は迷わず答える。その声は小さいが意志のこもった声で、

「い、嫌だ……僕だって、お父さんやお母さんと一緒に居たかった  
！ でも……う、うああああん」

少年は泣いた。今までの辛かったことを思い出したのだろう。少年にとって世界は残酷なものだった。

泣いていると、女性が少年を抱きしめた。

「大丈夫だ。私が君の母親になるよ。私じゃ、役不足かもしれないが、それでも……」

女性の慈愛に満ちた声とその暖かみを感じて、少年は

「お母さん……お母さん！」

少年はこの時、人の暖かみを知った。そして少年は誓った。

もう僕は逃げない……この能力も正面から向き合っんだ。そしてお母さんに恩返しするんだ！

## プロローグ（後書き）

さて、次は主人公の設定です。



## 主人公の設定（11月8日更新、ネタバレ注意）

名前 織斑 光輝 おりむらじうき

年齢 15歳

性別 男

### 経歴

ある能力を持ってこの世に生まれたが、ある日両親がそれを嫌って、研究所に。そこで実験台にされ毎日、そこで出来た友達の死、両親に裏切られたこと、日々の苦痛によって心を閉ざす。脱走を成功させ、逃げる日々が続くがついに力尽きる。

そこで織斑千冬に助けられる。始めは自分のことなど、どうでも良くなっていたが、千冬の暖かみ 人の光を知り、能力と向きあうと共に、自分の母親になってくれた千冬に恩返し、そして人の暖かみを伝えることを決意。

だがそれでも他人への警戒は激しく、ときどき会って話す千冬の弟、一夏と馴染むものにもかなりの時間がかかった。

千冬と過ごしていく中で、ISの開発者、篠々乃束しののたばねと出会い、IS「ガンダム」を起動させる。束が言うには「こーくんの特別な脳波に反応したんだね」とのこと。

女にしか機動できないISを起動させた光輝は千冬の提案でIS学院に入学することに。

### 容姿と性格

黒の腰まであるロングヘアーに整った顔立ち。

身長148?の男の娘。

モデルは「処女はお姉さまに恋してる 2人のエルダー」の御門千歳をもうちよつと成長させた感じ？

（元が10歳だから成長させたほうがちょうどいいと思う）

研究所の出来事で人に対する警戒心が強かったが今はかなり和らいでいる。恥ずかしがりやだが、言うときはしっかり言う子でもある。

恋愛に関しては他の人のことならけっこう敏感なのだが、自分のことになったら鈍感になる。矛盾だ……。

容姿が明らかな女性なのでよく間違えられる。こればかりは仕方ない気がする。

#### 名前の由来

「この暖かみを……伝えられるようになる」という決意を込めて、千冬と考えた名前。

元々に名前は研究所でのストレスで忘れてしまっていた。

#### 能力について

通常の人間に比べて、ずば抜けた直感力、洞察力を持ち空間認識能力をもつ人間として生まれた。

両親はこの能力を恐れ、光輝を捨てた。

IS「ガンダム」は光輝の脳波を感知して、光輝のISとなった。

また、相手にプレッシャーを与え、相手を鈍らせることもできるが光輝はコントロール出来ていない。

主人公の設定（11月8日更新、ネタバレ注意）（後書き）

ISの詳しい設定は後々書こうと思います。

第一話、僕達以外は全員女！？（前書き）

一体、何を書いたんだろう？と思うぐらいな文章です……  
文才がねえよ！

## 第一話　僕達以外は全員女！？

「ふう……やつと着いた」

今日はIS学園の入学式だ。IS　インフィニット・ストラトス　は今までの兵器を超えたものだが、女性にしか装備できないというものだ。

そのせいで、今の世の中は『女尊男卑』。女性が優位に立っていて、男性が女性に対して戦争を起こしても、三日も持たないと言われている。ISは今までの兵器を超えている　故に意味をなさない。ISを装備した女性に男性が勝つのは不可能である。

「来たのはいいけど……ここって女の子しかないんだよな。でも夏兄なつにいもここに入学してるって言うてたし、同じクラスになるといいなあ」

ISは女性しか動かせないんだけど、夏兄と僕はひょんなことからISを起動させたんだ。僕のISは待機状態で、首に掛けてある白い十字架のアクセサリーになってる。

と、遠くから女性が走って来ている。黒髪にスーツ、タイトスカートを履いていて、走りにくそうだったがそんな素振りとは全く見えない。

「すまない、遅れたか」

「ううん、大丈夫だよ。さっき来たばかりだから」

この女性は織斑千冬さんおりむらちふゆ。僕に暖かみを教えてくれた人でもあり、僕の母親なんだ。血は繋がっていないけど、本当の家族のように接してくれた恩人だよ。

「さて、ちょっと急いで行かないと間に合わないから、早歩きでいくぞ」

そう言つとお母さんは歩き始めて僕も後を追う。

「そつえばさ、学園内じゃそう呼んだらいいの？」

「織斑先生だ……」

やっぱりそうか、結構抵抗があるけど困らせたくないし……

「分かりました。織斑先生」

……違和感あり過ぎだよ……。でも我慢だ。

「光輝も高校生か。あの時からずいぶん経ったが、私は母親になれたか？」

「もちろんだよ！ そのおかげで僕はこうして生きているんだから……そんなこと言わないでよ……」

「す、すまん。にしても女みたいな容姿はずっと変わらないな」

つゝゝゝ！ 恥ずかしいなあ！ 声に出したいけどなぜか出ない

……

「可愛い奴め。すぐに赤くなるな、相変わらず」

ううゝ……気にしてることを……

ともまあ、そんなことを話しながら僕達は会場に向かった。

恥ずかしいなあ／＼ 隣が夏兄で良かったけど、どうして2人とも真ん中なんだよ……後ろの視線が辛い……

入学式も終わり、クラスでショートホームルームSHR中。女性副担任こと山田真耶やまだまや先生によって行われている。

身長はやや低め（僕と変わらないかな）で、服のサイズが合っていないのか、だぼつとして本人が小さく見えてしまう。かけてる黒縁の眼鏡も大きめなのか、若干ずれてる。こんな先生で大丈夫なのかな……。

「おりむらいちか織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

夏兄も同じことを考えてたのか呼ばれて、驚いている。仕方ないと思うよ。だって僕達以外全員女子なんだもん……。

「あつ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってる? 怒ってるかな? ゴメンね、ゴメンね! でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。あ、二人いるけど『い』と『こ』じゃ、君の方が早いんだよね。自己紹介してくれるかな? だ、ダメかな?」

気がつくとも山田先生は夏兄にぺこぺこ頭を下げていた。あんまり頭を何度も下げるので、サイズの合っていない眼鏡がずり落ちそうになっている。こう見ていると、この先生が本当に年上か疑ってしまうよ……

夏兄は山田先生にうわずった返事をして、勢いよく立ち上がった。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願いします」

さすがだよ夏兄！ ふと周りの女子の様子を見る。『もつと色々喋つてよ』的な視線と『これで終わりじゃないよね？』的な空気は何なんだ……。こんな女子だらけの場所で紹介しろって言われても夏兄の反応が正しいよ。

「以上です」

がたたつ。思わずずっとこける女子が数名いた。夏兄、頑張ったね……この空気の中、よく自己紹介したね。

パアンツ！ 夏兄がいきなり叩かれた！ 誰だよ！？ ってお母さん……。

「げえつ、関羽！？」

パアンツまた叩かれてる。お母さん、それぐらいにしないと夏兄が……。ああ、若干引いてる女子が数名いるよ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーンの低めの声。でもその声も聞きなれている。さっきの入学式前の時とは覇気が違うし、これがお母さんの教師モードか。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。良ければ返事をしろ！ 良くなくても返事をしろ！」

「はいっ！」

クラス全員の女子が返事したらこんなにも響くのか……軽く耳



が痛い。

「よし、次！ 織斑光輝！」

「はっはい！」

いきなり呼ばれ立ち上がる僕。うう、人前なのはやっぱり恥ずかしいなあ／＼で、でも、夏兄だって頑張ったんだから僕だって……！

「お、織斑光輝です。えっと、よ、よきゅ、言われるんですが、こんな容姿でも、一応、お、男なんです……ま、まちがわにやいで下さい。よろしくお願いしましゅ……」

うわああああ！ 噛みまくりだあああ！ よきゅってなんだよ……はあ。

こうして恥ずかしい自己紹介を終え、僕のIS学園での生活が始まったんだ。

第一話、僕達以外は全員女！？（後書き）

次は、第とセシリアを出しますWWW

## 第二話　英国の代表候補生（前書き）

駄文ですが読んでいただければ幸いです。

## 第二話 英国の代表候補生

「なあ光輝、お前ISの勉強したのか？」

「まあ一応。夏兄はまさかの捨てちゃったパターンだからね。先生が怒るのも仕方ないよ」

二時間目の休み時間、僕は女子達の熱い視線を感じながら夏兄と話していた。夏兄ったら入学前に貰った必読の参考書を捨てたんだから、相変わらずおつちよこちよいというか何というか。

夏兄はお母さんの弟で、血の繋がってる家族はお母さんと夏兄の二人だけらしい。僕と同じように親に捨てられたって言うてた。でもお母さんは「これからは三人家族だな。家族は多い方がいい」って笑ってたんだ。僕はお母さんと住んでたから夏兄とは会える時間が少なかったけど、夏兄もお母さんと同じように優しい、暖かさを持った人なんだよ。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「はい？」

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳がややつり上がった状態で僕達を見ている。

わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴な生まれですよ、と主張しているようであり好きじゃない。敵意は無いようだけど、明らかに見下してる。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

夏兄が答えてくれた。この人はあんまり好きじゃないのもあるけど、初対面人と話すのは苦手なんだよ……。

すると、目の前の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！ なんですよ、そのお返事？。わたくしに話しかけられただけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

ISを使える。国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い。そしてIS操縦者は原則、女子しかない。

だからってその力を振りかざすのは違う！ 力を持った時から誰かを傷つけることを知らない奴だな。物理的なものや、こういう精神的な攻撃もある……。

「悪いな。俺達、君が誰か知らないし」

そうだよ。自己紹介でいろいろ言ってたけど、所詮はむやみに立場だけを主張している人なんかどうでもいいよ。

でもその反応が相手にとって不可解なものだったらしく、吊り目を細めて、人を見下す口調で喋る。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

いちいち感到に触る子だ。

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。そりゃそうだよな……。夏兄さすがにそれは分かるうよ。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

すごい剣幕だった。血管マークが三つぐらいついてそうな……。

「おう、知らん。光輝は知ってるか？」

「う、うん。夏兄、さすがに知っておこうよ……」

オルコットさんは怒りが一周して逆に冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながら、ぶつぶつ言いだした。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識」

「で代表候補生って？」

「僕が言うよ。国家代表IS操縦者の、その候補生として選出される人のことだよ」

「もう一人の方の言う通りですわ。いわゆるエリートなのですわ！」

結局はそう言いたいんだね。下らないよ。

「そう、わたくしは優秀ですから、あなた達のようなような初心者にも優しくしてあげますわよ。ISで分からないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を強調してたけどさ、僕達も……

「それなら倒したぞ。光輝もだよな？」

「そ、そうだね。そんなに強くなかったよ」

一部の女子が「可愛くて強いなんて……同じクラスになって良かった」なんて言ってるよ。うう可愛いだなんて……

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。何か……氷が割れるような音が。

「あなた達も教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「そ、そうだよ。たまたまかもしれないし」

「それでもこれが」

キンコンカンコン。

ちょうどチャイムが鳴ってよかった。やっとお嬢様の見下しタイムも終わったよ。

「またあとで来ますわ！ 逃げないことね！」

はあゝまだ続くのか……。

「はいっ。織斑くん兄を推薦します！」

「私は可愛い弟くんをつ！」

二時間目。クラス代表者　クラス対抗戦や生徒会の会議の出席とか、要はクラス委員長な感じ　を決めようってことになったんだけど、どうにも僕か、夏兄になってしまっそうだった。

「代表候補生は織斑一夏、光輝……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「ちよつと待ったっ」

「そうだよ！　こんなこと」

とつさに立ち上がる夏兄と僕。そして視線の一斉射撃。僕には感じる、『この二人ならどうにかなる』という無責任な期待が……。

「織斑兄弟。席に着け、邪魔だ。他にはいないか？　いないなら無投票当選だぞ」

「納得いきませんわ！」

パンツ机をと叩き、そしてこの声は間違えない。お嬢様が降臨してきたよ。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

黙っているのをいいのに言いたいこと言いやがって……

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければならぬこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で　」



もついい。夏兄も同じなのか相当な怒りを感じる。

「イギリスだって大したお国自慢じゃないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

夏兄、すごい！

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」  
「侮辱？ オルコットさんも侮辱したよね？」

僕はいつの間にか口を開いていた。

「僕は君のその感覚が嫌いだ。そうやって力を無理やり振りかざして、他人を傷つける。その考えが一番嫌いなんだよ！」

静かに「怒った弟くんもいいなあ」とか聞こえるけど、気にしている場合じゃない。こいつだけは。

「決闘ですわっ！」

オルコットさんは一番の敵意を僕達に向けてきた。つかいちいち机を叩くのはやめなよ。

「おう。いいぜ。その方が分かりやすいしな」

「そうだね。男だからってハンデなんかいらなからな」

その言葉を言った途端、クラスがざわめく。変なこと言ったかな？

「二人とも、本気なの？」

「男が女より強かったのは大昔だよ？」

「ISが使えるかもしれないけど、言い過ぎだつて」

みんな本気で笑ってる。でも、やってみないと分からないでしょ？  
オルコットさんも明らかな嘲笑をその顔に浮かべていた。

「じゃあ負けたら二人ともわたくしの奴隷として学園を過ごすのよ」

「ああいいぜ。やってやるよ」

「構わないよ。負ける気はないから」

許せないんだ。こんな考えを持つてる奴がいるから分かりあえない……。そうやって他人を見下して傷つけてる。それを気付かせるだけでも。

「さて、話はまとまったな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。兄弟とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

お母さんがパンツと手を叩いて話を締める。僕は敵意を感じながら席に着いた。

この一週間出来ることをしていこう。絶対に勝たなきゃ！  
その前に授業を受けないと、それからだね。

「ふう、なんか疲れたな」

今日の授業も終わり、放課後。山田先生から寮の鍵を貰い、部屋で休憩中。

部屋には大きめのベットが二つとシャワー室。ベットはけっこうな高級品でなんというか、もふもふ感が違う。さすが世界のIS学

園だね。

僕と夏兄の二人の部屋になった。夏兄だから良かったけど、知らない女子だったら緊張して動けないところだったよ。ありがとう夏兄。

「あゝさっぱりした。待たせたな、夕飯行くか？」

「うんっ。そうしよう」

部屋をでて食堂に向かうのはよかった。でもそこら中に、

「なんでこうも僕達、監視みたいなことになってるんだよ」

「確かに、極端に男子との交流が少ないからテンションが上がってるんだよ。捕まらない内にさっさと行こうぜ」

僕達はダッシュで駆け抜けた。そこに一人の女子が出てきた。

「なんだ、箒か。どうかしたか？」

彼女なら安心だ。

篠々之箒さん。夏兄の幼馴染なんだけど、僕自身はあんまり話したことはないからどんな人かは知らない。でも他の女子のように襲ってくることはなさそうだ。

黒のポニーテールで、肩下まである黒い髪を結ったりボンが白なのも変わってない。確か剣道でかなりの実力者だったかな？

「ちょうどよかった。二人とも一緒に食堂に行かないか？」

「いいぜ。多い方がいいしな。光輝は大丈夫か？」

「い、いいよ。僕は大丈夫……」

やっぱり緊張する。失礼なのは分かってるけど、うっ……

僕は隠れている女子を避けながら食堂に向かった。

「明日から私が二人を鍛える。いいな？」

夕食中、特訓をどうするか箒さんに尋ねてみるとそれに付き合ってくれするというんだ。良かった、心強い味方だよ。

「本当か？ 助かるよ。明日から頼むぜ箒」

僕の勘違いか箒さんの顔が赤くなった……そうか夏兄の事が好きなのか。雰囲気で分かるよ。そう考えたら僕はいない方がいいかも

……

「僕は、止めとくよ……」

「どうしたんだよ、光輝？ そうか！ 箒が怖いのか？ 大丈夫だって、な？ 箒……ってどうしたんだよ？」

ああ、好きな人に怖いって言われたらそりゃ怒るよね。夏兄が悪い。

「なんでもない！ 一夏の馬鹿！」

そう言っただけ箒さんは何処かに行ってしまった。夏兄ってこういうのはすごい鈍感なんだよね。

「どうしたんだ箒の奴？ まあいいや、さっさと食べようぜ」

「う、うん。あのさ夏兄？ 箒さんに後で謝ってきた方がいいよ？」

「ん？ どうしたんだよ光輝も。俺なんか悪いことしたか？」

「……はあ。もういいよ」

夏兄が最後までその理由を分かることがなかった。

その夜、僕は寮の屋上で夜空を眺めていた。入学式なのに何日もたった感覚だよ。それほど騒がしい一日だったってことなのかな。

「いきなり大変なことになったな」

その声に振り返ると、お母さんがいた。学校にいた時と変わらない姿で僕の隣に来た。

「オルコットが許せなかったのか？」

「力を振りかざして他人を見下すなんて、僕は許せないよ」

「そうか……、でも恨みに取り込まれるなよ。そしたら戻ってくるのは難しいからな」

確かにそう。恨みだけの為に戦えば自分もそうなる。分かっているよ。

「大丈夫。僕はオルコットさんに分かってほしいだけなんだ。その考え方は間違ってるって」

「そうだな。でも無理はするなよ。サイコバーストはできることなら使っな。いいな？」

「分かったよ。お母さんに心配かけたくないから」

そついうとお母さんは屋上から静かに出ていった。

「さて、明日から本格的な特訓！ 頑張ろう！」

屋上を後にした千冬は安心していた。

成長したな二人とも。

もう二人の家族がちゃんと無事に過ごしてくれるならそれでいい！  
教師として、家族として見守っていいこう。

## 第二話　英国の代表候補生（後書き）

第だすとか言いながらあんまりだしてないというWWW

二人の特訓は書かずに決闘当日を書きます。

一夏の戦闘はカットするかも……

### 第三話前編／白と可能性（前書き）

光輝の試合前のことを書きます。



### 第三話前編／白と可能性

翌週の月曜日の放課後。オルコットさんとの決闘の日。なんだけど……

「なあ、箒？」

「なんだ一夏」

この一週間、僕と夏兄は箒さんと剣道の稽古けいこを付けてくれた。僕は自身は初めてで、どっちかというと実践3割、精神統一7割だった。夏兄と箒さんはずっと実践だったけど、それが問題で……

「結局、ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

そう稽古ばかりだったということだ。

「し、仕方がないだろう。お前のISもなかったのだから」

「でも、基本的なこととか、あっただろ！」

夏兄と僕には専用機があるようで　僕は待機状態になってる

夏兄専用ISはごたついてるらしく、来ていない状況なのです。

現に今も……

「お、織斑くん、織斑くん、織斑くんっ！」

第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきたのは、おなじみ副担任の山田先生だ。あの、一回呼んでもらえるだけで大丈夫ですよ。

「先生、落ち着いてください。ゆっくり深呼吸してください」  
「はいっ。す〜〜〜〜は〜〜〜〜……ふう、助かりました」

何よりです。もつと落ち着かないと、危ないですよ。てか、この先生は本当に年上なんだろうか。今度聞いてみよう。

「山田先生はお前達より年上だぞ」

振り向けば、お母さんがそこにいた。読心術ってかなり難しいよね。

「えつとですねっ！ 来ました！ 織斑くん専用のISが！」

さっきから『織斑くん』って言うてるけど、僕も織斑ですからね。血は繋がってませんけど。

「織斑兄、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られるからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの、乗り越えてみせろ」

実の姉と幼馴染からの容赦ないお言葉だよ。まあ仕方がないのかなあ。

「ごんつと鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は重い駆動音を響かせながら向こう側を晒していく。

「これが織斑くん専用IS『白式』ですっ！」

これが夏兄のIS……可能性を感じる。ガンダムに匹敵するほどの可能性が。

飾り気のない無の色。眩しいほどの白と夏兄が『繋がる』。

「ISのハイパーセンサーは正常に作動しているようだな。一夏、気分は悪くないか？」

お母さんが微妙にだけど、声を震えさせている。心配なのは分かるけど、夏兄なら大丈夫だよ。信じてあげてお母さん。

「大丈夫、千冬姉。いける」  
「そうか」

夏兄のいつもの声。お母さんのほっとした声。この二人の絆がどれほどのものかが分かる。

「箒、光輝」

「な、なんだ？」

「夏兄……」

「行ってくる」

「ああ、勝ってこい」

「大丈夫だよ。夏兄なら、大丈夫だから！」

僕達の応援を聞いて、安心した夏兄は決闘へ……

一夏VSセシリアは割愛させていただきます。

「惜しかったね夏兄」

「自分のISの特性を把握することをしないからだ」

「篠々乃の言う通りだな。全く、大馬鹿者め」

結果的に夏兄は負けてしまった。ファースト・シフト一次移行が終わって、追い込んだのは良かった。切りつける前にエネルギーゼロという結果だ。

「大丈夫だよ夏兄。もっと頑張れば強くなれるよ」

「ありがとう光輝。次は光輝だよな？」

そうだった……。夏兄の仇を絶対に。

「よし、織斑弟、ISを展開しろ」

「はいっ！」

返事をして僕は集中する。

『行くよ、ガンダム』

待ってました、言わんばかりに多量の光が僕を包んで、消える。同時にISのハイパーセンサーが作動する。

白と黒を基調とした機体で、左肩には『』の文字、左腕に装備してあるシールドにはユニコーンのマークがある。一番の特徴は、左の背中半分に装備してある、放熱板　フィンファンネルだろう。

「これが光輝のIS……すごいな」

「なんというか、威厳を感じるな」

「こういうタイプのISは始めてですねっ！」

それぞれ感想を漏らすがお母さんは違った。一度見てるしね。

『光輝、無理はするんじゃないぞ』

『大丈夫だよ、お母さん。勝ち負けじゃないから』

プライベート・チャンネル

個人間秘匿通信で話すお母さんと僕。表情に変わりはないが、心配してくれてるのが伝わる。ありがとう。

「負けるとしても精一杯頑張ってこい光輝。それがいいのだ」

「光輝は光輝なりに頑張れ！」

「篤さん、夏兄……ありがとう。それじゃ、行ってきます」

僕はそう言うと、フィールドへ出撃した。

### 第三話前編／白と可能性（後書き）

次は光輝VSセシリアです。

明日か、明後日には更新します！

第三話後編　ガンダム之力（前書き）

ちょっとあやふやな点もありますが……

### 第三話後編　ガンダム之力

「あら、逃げずに来ましたのね。さっきの方が負けたから、怖く  
なつて逃げたかと思いましたわ」

オルコットさんがふふんつと鼻を鳴らす。また腰に手を当てたポ  
ーズが様になっている。

「……逃げないよ。夏兄の仇は僕がとる！」

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴  
的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気  
高さを感じさせる。

「その勇氣に應えてチャンスをおげますわ」

腰を当てた手を俺の方に、びしつと人差し指を突き出した状態で  
向けてくる。オルコットさんの身長を超えるレーザーライフル『ス  
ターライトmk?』の砲口が下に向いている。

チャンスと言われ少し動揺してしまふ。争わずに済むならそれで  
もいい。

「ど、どんな？」

「先ほどの方はわたくしに負けましたので奴隷扱いです。しかし、  
このセシリア・オルコット。それはさすがに酷いと思いました。そ  
こで！ もし、あなたがわたくしに勝つたら！ その条件を破棄し  
ても構わなくてよ？ それかあなたが、わたくしに土下座して謝る  
のもいいですね」



……少しでも期待した僕が馬鹿だった。こんな奴に期待する僕もまだまだだな。

「そこまでして……人を見下したいかつ！ 土下座はしないけど、その条件乗った！ もし僕が負けたら、夏兄じゃなくて僕を一生奴隷にしてもらっても構わないぞ！」

相手も条件をつけてきたんだ、このぐらいは戦いの礼節だよ。  
とオルコットさんが冷めた笑い声を放つ。

「あはははははっ、おもしろいですわね！ いいでしょう！ その条件いいですわ！」

キュインツ！ スターライトmk？から青のレーザーが放たれるが難なく避ける。同時にブルー・ティアーズから4基のビットが放たれそれがレーザーを放つ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>で！」

ふん、その程度の砲撃で押してるつもりなのかい？ こっちも使おうか。

「行つて！ フィンファンネル！」

その声に反応して、装備してある放熱板の6基の内、4基が離れて、コの字になる。フィンファンネルはガンダムの独特の武装だ。光輝自身の脳波で操作でき、ブルー・ティアーズに比べると少し大きい、放たれるビームの威力、移動スピードはIS最高峰だ。

「そんな、ブルー・ティアーズ以外にオールレンジ武装があるなんて……！」

「ほらほら、集中しないと落とされるよ」

その驚きでブルー・ティアーズの速度が落ち、フィンファンネルで一気に4基全てを落とす。ビームライフルを使うまでもなかったね。

「そんなっ！ ブルー・ティアーズが全滅！？」

「オルコットさん、一つ良いことを教えてあげるよ。僕がフィンファンネルを操作している時でも普通に他の攻撃ができるんだよっ！」

「光輝すげえ……あつという間に全部落とした……」

「ああ。いつもの弱気な光輝とは大違いだな」

ピット内で戦いを見ていた一夏と箒は、光輝の戦いを見て驚きを隠せなかった。あの弱気な光輝がセシリアを追い詰めているのだ。

「織斑先生、一夏くんといい、光輝くんといい、すごいセンスですね。初めてなのにここまでやるなんて……」

「……そうだな」

「先生ったら照れてますねっ？ 照れていますよねっ？」

バシッ！ 真耶の頭に出席簿が直撃した。威力は一夏にやっっているものより数倍の威力だ。

「い、痛い……」

「私は身内のことからかわれるのは嫌いなんだ。覚えておくように」

怒りまじりの一言であつたが、その声はどこか心配な雰囲気をもちだしている。

のびのびと戦つてるな。それでいいぞ。サイコバーストだけは使つなよ……

「オルコットさん、もうやめないかい？」

ブルー・ティアーズも全基落として、オルコットさんは《スターライトmk?》と他の武装で攻めるが、僕には当たらない。だって、レーザーの弾道とか予測ができるんだ。

また、オルコットさんの動きも予測できるし、容易にビームライフルやフィンファンネルが当たるのなんのつて。

「な、なんですって!？」

「もうオルコットさんのシールドエネルギーも少ないでしょ？」

「や、止めませんわ！ 絶対に勝つてみせます！」

オルコットさんが凄まじい敵意を向けてきた。その敵意をまともに受けてしまった僕は反応が遅れてしまい、相手の攻撃に当たってしまった。

「どうしました!？ さっきの威勢は嘘だったのですか!？」

どうにも身体が動かない……オルコットさんのプレッシャーなのか？

オルコットさんの一斉発射を直撃してしまい、エネルギーが一気に減ってしまった。

「はあ、はあ、これがセシリア・オルコットの實力ですわ……」

これが彼女の實力か……まさかプレッシャーにやられるなんて、思ってなかったよ……。でもオルコットさんの気持ちを感じれた。どこか悲しそうだった……。

「す、ごいね。あんまり使いたくなかったけど、使うよ」

お母さん、ごめんなさい！でもオルコットさんも全力で戦ってるんだ。

「サイコバースト！」

叫んだ途端、僕を緑の光が包む。これがガンダムの本当の力！

「な、なんですの！？その光は！？」

「これがガンダムの最高状態だよ。でも負担も多いから、早く決着をつけるよ！」

「あの綺麗な光は一体なんだ……織斑先生！」

筈が慌てて千冬に尋ねる。

「あれは『サイコバースト』。光輝の意志で発動する単一仕様能力だ。発動すれば全般的な能力は著しくアップする。ただし、使えば光輝の精神は少しずつ蝕まれる。無闇に使えば、精神崩壊してしまう」

「そんなことが……」

ここにいる誰しもが口を閉ざした。単一仕様能力を発動するのに、代償があるISなんて聞いたことないからだ。

光輝の大馬鹿者め！ あれほど言ったのに……！ 私の甘さが光輝に使わせてしまったのか？

千冬は自分の甘さに酷く責めた。だが今は光輝に祈るしかない。

「行くよっ！」

その瞬間、光輝が消え　いや、セシリアの頭上に高速移動しビームサーベルで切りつけるが、セシリアはそれを、ギリギリで避ける。

光輝は6基全てのフィンファンネルを射出し、セシリア目掛けて高速移動しながら追い込んでいく。

「オルコットさん、ごめん。終わりにするよ……」

光輝は避けるのに必死なセシリアに接近し、ビームサーベルで切りつける。セシリアのエネルギーがゼロになり

『試合終了。勝者　織斑光輝』

負けたショックを感じるセシリアだが、勝利した光輝の様子がおかしかった。

光輝の目は虚ろで焦点が合っていないし、呼吸も激しいものになっている。同時に　ガンダムも光を纏う前に状態に戻る。

「勝った……勝ったよ。夏兄……お母さん」

「あ、あなた？　大丈夫ですよ！？」

セシリアの声が聞こえてないのか、突然ISが解除され、光輝は落下していく。現在の位置は地上から、約30メートルの高さだ。そんなところから落ちれば即死である。観客から多大の悲鳴が上がる。

「光輝さんっ！」

『オルコット！　織斑弟を回収しろ！』

「間に合って……！」

千冬の声に反応してセシリアが急加速で落下し続ける光輝を追いかける。

「光輝！」

「お願いだ！　光輝！」

落下し、意識が遠のいていく中で家族の悲痛な叫びを聞き、光輝が意識を失った……

### 第三話後編　ガンダム之力（後書き）

バトルシーンは難しい……でも書いてて楽しい！

## ガンダムの性能（前書き）

ISの説明です。



## ガンダムの性能

専用IS名

ガンダム

待機状態

首にかける白いI字型（サイコフレームを想像していただければ）  
世代

不明

製作者

しののたばね  
篠々乃束

束が昔に作りだした古いISだが、その力は第三世代をも軽く超える。しかし使用者に悪影響を及ぼす兵器もあるため、女でも使用不可にしていた。しかし、光輝が千冬と共に束の元に尋ねた時、光輝がたまたまガンダムに触れ、それ以来、光輝専用として動かすことになった。

束曰く、「サイコフレームがこーくんの特別な脳波を感知して起動したんだね」のこと。

額にあるVアンテナが一番の印象か。

サイコフレーム

使用者の感覚の受信、直感力、身体能力の向上を促す。まさに光輝専用のISだというのが分かる。感覚の受信が向上してしまうことで相手のプレッシャーを受けやすくなっているが、気を抜かなければあんまり影響はでないらしい。

ワンオフ・アビリティー

## 単一仕様能力

### サイコバースト

サイコフレームの機能を最大限まで上げることによって、ガンダム機能を最大まで上昇させる能力である。スピード、武装の威力、防御力の各能力を上げるサイコバーストだが、扱うには「使用者の精神」を削らなければならない。使い過ぎれば精神崩壊してしまう恐れがある。

能力上昇の他に他人との意識共有が可能で、これは使用者の意志で発動出来る。光輝の目標である「暖かみを伝える」ことも出来る。発動時には、鮮やかな緑の光がガンダムを包む。この光が意識共有を可能とする。

この状態のガンダムは、ハイパーセンサーで追いこかるは難しく、攻撃面ではどの武装もかなりのダメージを与えることができる。

## 武装

### ビームライフル

IS自体のエネルギーは使わず、専用のエネルギーパックを使用する。威力自体は高くないが連射性能とエネルギーに優れ、試合中にエネルギー切れになることは無い。

### ハイパーバズーカ

背面のバックパックに装備してある。手に持って使えるが、背面に装備したまま撃つこともできる。威力はガンダムの武装内でトップクラスだが、弾道が他に比べて遅い。

### フィンファンネル

板状の収納形態で左背面に6基装備されており、攻撃時には折れ曲がってコの字に変形する。オールレンジ攻撃のできる『ブルー・

ティアーズ』に比べると大きい、活動時間が長く、ビームの出力も高い。また ガンダムを中心に5基のフィンファンネルを使い、ピラミッド型のビームバリアも展開することが出来る。

これを動かすには高い空間認識能力が必要で、光輝はそんなに意識せずとも操作が可能である。

### ビームサーベル

バックパック右側に装備されたサーベルがある。比較的大型で、鐔を持った形状をしており、ビーム刃の形状も曲刀状となっている。光輝の意志で形状を変更することもできる。エネルギーの無駄を省くために斬りかかる際のみビームが出る構造になっている。

### 頭部バルカン砲

ミサイルを撃ち落とすなど、牽制用の武装である。威力はほとんどなく、ダメージを与えるのは難しい。

### シールド

左腕に装備しており、内部にはビームキャノン1門とミサイル6基が内蔵してある。シールドの表面には一角獣が描かれており、勇敢を表す。

ビームキャノンは独自の小型ジェネレーターを装備し、エネルギー切れを起こしてもチャージされるので、使い回しができる。

ミサイルは、ハイパーバスターカより威力は劣るが、ホーミング力、弾道のスピードに優れる。

攻撃兼防御を果たしており、この内蔵してある武装だけでも十分戦える。

### 打撃攻撃

要はパンチやキックである。リーチは短く、そこまでの距離に持ち込むの困難だが威力は高い。絶対防御を貫通して、直接、殴れる。

## ガンダムの性能（後書き）

ところどころwikipediaから取り寄せてる部分もあります

.....

当然ながら、原作とは違う部分もありますので。

#### 第四話　暖かさと変化（前書き）

光輝×セシリアフラグかな？　こついつのを書くのはなかなか難しいです。

#### 第四話　暖かさと変化

その暗闇の中に僕はいた。何も見えない、聞こえない。でも感じるんだ、何かが近付いてくるのが……。

それから逃げて、逃げて追いかけてくる。力尽きて、その場に倒れる。

得体の知らない何かに飲み込まれていく……いくら抵抗してもダメみたい。

声が聞こえる……夏兄とお母さんの声が、僕を呼んでる。

その声の方に向かいたいんだ。でも動けない……離してっ！僕はみんなの所に行くんだ！

そんな僕の抵抗も、弱弱しくなり動けなくなる。

「なんでっ、嫌だ！　家族と離れたくない……もう寂しいのは嫌なのに……」

そうして僕は、何かに飲み込まれ　僕がまた一つ死んだ……

「うああああっ！」

悪い夢を見て勢いよく状態をあげた。でも夢にしてはかなり鮮明なんだよなあ。というかここはどこ？

ベットで寝ていたみたいだ。周りにはカーテンが閉めているけど、この独特の薬品の匂い……保健室っぽいな。でもなんで寝てたんだ？

「えっと……オルコットさんとの決闘に勝って、それから……うう、

思い出せないよ」

ガチャン

誰かが部屋に入ってきたけど、この感じは……お母さん？ でもいつもみたいに強気な感じじゃないよ。何かあったんだろうか？ カーテンを開けた人物は、思った通り、お母さんだった。なんでそんな悲しい顔をするの？

「……光輝、約束したよな？ サイコバーストは使わないと」

そうだった。オルコットさんも全力で戦ってたのだから、僕も全力を出そうとして使ったんだ……。

「あの、え……つと、ごめん、なさい……」

パシンッ！ 僕はお母さんに平手打ちをされた。でも、約束を破ったんだ。罪は重い……。僕は何も言えずにただ俯いていた。お母さんを見るのが怖いから……。

「一夏や篠々乃、ましてや敵だったオルコットも心配したんだっ！ しかもオルコットが助けなかったら、死んでたんだぞっ！」  
「……！」

驚きだった。あの見下すことしかなかったオルコットさんが助けてくれたのだ。そうか……試合が終わった後、意識を失ったんだ。力を手にした時から誰かを傷つけることがある。光輝、まさに今のお前のことだな。かなり衰弱して命すら危なかったんだぞ……」

次の瞬間、僕はお母さんに抱きしめられていた。ああ、伝わって

くる……。お母さんの悲しみが、僕はとんでもないことをしてしまった。いろんな人を心配させて、困らせて……  
僕は抱きしめられながら聞いた。

「僕は、僕は……こんな僕でもまだ家族ですか？　こんな心配ばかりかけてばかりの僕は……」

「当たり前だ。ずっと家族さ。私と一夏、光輝、三人で家族だ。どんなことがあってもな、血が繋がってる繋がってないは関係ない」

「あ……あああつ！　グスツ、あり、ありが、とう」

僕は泣いた。やっぱりお母さんには敵わない。実力がどうこうじゃなくて、心が強い。それは兵器を使っても敵わない。改めて、お母さんの強さを感じた。僕もそうなりたいと、心から思った。

「じゃあ、明日からまた授業再開だからな。今はゆっくり休むんだぞ？」

「うんつ。ありがとう！　お母さん！」

お母さんはカーテンを閉め、扉に向かい

「学校では織斑先生だ。まあ、さっきまでののはよしとするがな」

そう言っただけで部屋を出たのを感じた。

と同時に勢いよく扉がバタンツ！　と開き、こっちに迫ってくる。い、一体なんなんだ！？

カーテンを思いっきり開けてやって来たのは

「光輝！（さん！）」



なんと、夏兄、箒さん、そしてオルコットさんの三人だった。

「光輝！ 大丈夫なのか！？」

「そうだぞ！ 試合が終わってホッとしてたらいきなり落ちていったんだからな！ ひやひやしたぞ！」

「……………」

ふ、二人とも、落ち着いてよ。一気に言われても困るからさ。と  
いうかオルコットさん大丈夫なんだろうか？ 元気なさそうだけど。

「そ、そうだな……。いやでも、良かったぜ。また明日から一緒に  
授業が受けれるしな」

「光輝、とにかく大丈夫それで何よりだ。調子が戻ったら、一夏の  
特訓に付き合ってくれ」

「もちろんだよ！ 早く取り戻して、練習していかないとね」

やっぱり友達たちといるのは楽しいな。勇気が湧いてくるからね。

「じゃあ光輝、俺達はもう行くぜ？ 今日はいっかり休んで明日か  
らまた頑張ろうな！」

「そういうことだ。また明日な」

そう言つと、夏兄と箒さんは部屋を出ていった。問題はこの人が

……

「……………」

「……………」

話が出来ない。あんまり慣れてない人と話すのは苦手なんだよな。

ど、どうしよう……

この暗い空気最初に変えたのはオルコットさんだった。

「聞きましたわよ。あなたのISの単一仕様能力を。自分の精神を蝕むのに、なんで使ったのですか？」

「えつと……その、ね？」

「何が「ね？」ですかっ！ 正直に答えなさい！」

そ、そんなに怒らないでよ……ただでさえ女子と話したことなんか、あんまりないのに。

「えつとね、オルコットさんは自分の力を全部出してたんだよね？」

「ええ、まあそうですね」

「それなんだよ。相手が全力なら、僕も全力で戦う。何かを通じて仲良くなりたいていうのもあったしね」

オルコットさん？ 顔がさらに怖くなってるよ？ なんかオーラが見えるよ？

「あなたはもう少し自分のことを考えになりなさいっ！」

「えっ？ オルコットさん？」

驚いた。まさかここでオルコットさんに説教されるなんて思わなかった……

「仲良くなるのはけっこうです。でもその相手がいなかったら意味がないでしょう！？ 分かってますか？」

そういうことか……。確かにそれはそうだ。分かりあっても、片方がいなくなれば不安になるよね。

「ごめん……。気を付けるよ」

「分かればいいのです。仲間なのですから、心配するのは当然です」

オルコットさんは顔を赤くして腕を組んで頷く。変わったね。決闘前みたいに嫌な感じがしない。見下す感じじゃなくて、優しい感じがする。

おっと、これは言うておかなきゃ。

「そうだ。言うの遅れたけど、助けてくれてありがとう。オルコットさんのおかげで僕は此处にいれてるから」

そう言つとオルコットさんの顔はますます赤くなる。ん？ 照れてるのかな？

「さ、さっきもいったでしょう！？ 仲間なのだから当然と！」

やっぱり照れてるなあ。完全に丸くなったよ。決闘前と比べるとギャップが激しいね。少し可愛い……。

「そ、そうですね。昨日もお見舞いに来たのですが、光輝さんは誰かと話していらしたの？」

はい？ 僕は今日、目を覚ましたわけで……

「ううん。決闘が終わって初めて目が覚めたのが今日だから、誰とも話してないよ？」

オルコットさんが人差し指を額に当てて、真剣に悩んでいる。こ、

怖いと言わないでよ……

「そうですか。気になったものですからつい……」  
「気にしな」

あれ？ 昨日もお見舞い？ 僕は一体何日寝てたんだ？

「オルコットさん、僕は何日寝てたの？」

「そうですわね……今日で四日目でしょうか？」

「よ、四日も！ どうしよう、授業かなり遅れちゃうな……」

IS学園はISの授業の他に普通の五教科の授業だってある。ISの勉強はいいけど、五教科はまずい……どうしよう、夏兄に頼もうかな、大丈夫かな？

「そ、それなら大丈夫ですわ！ わたくしがお教えしましょう！」

「本当に！？ ありがとう、オルコットさん！」

まさかのオルコットさんからの助け船！ この厚意を無駄にはしないよ！ またオルコットさんの顔が赤くなる。この人は一体どうしたんだ？ 熱でもあるのかな？

「オルコットさん？ さつきから顔が赤いようだけど大丈夫？」

当然、オルコットさんは慌てて後ろを向いた。本当に大丈夫かな

……

「お、女の子にそ、そんなこと聞くなんて……失礼にも程がありますわ！」

始めの方が声が小さくて聞き取れなかったけど、聞くのはやめておこう。聞いたら殺される。そんな感じがする……

「で、ではわたくしはこれで失礼しますわ。早く元気になってくださいね。それと」

「な、なんでしょう？」

それと、の部分を強調気味に言っただので、思わず敬語になってしまった。

「今度からはセシリアと呼んでください。よろしいですね！？」

女子の名前なんて呼ばないから緊張するなあもう……こんなことを思う僕って変なのかな……？ でも呼んで欲しいって言ってるんだから断るわけにもいかないよね。

「わ、分かったから……落ち着こうよ、せ、し……セシリアさん？」

「それでいいですね。それではごきげんよう」

オル もとい、セシリアさんは部屋を出ていった。なんか落ち着かなかったよ。でも

「少しだけでも分かりあえた気がする。セシリアさんは変わったんだね。それが一番嬉しいなっ」

保健室を出て教室へ向かうセシリアだが、様子がおかしい。ずっと

と顔が赤いままなのだ。

織斑兄弟はどうしてここまで、わたくしの中に入ろうとするのかしら。特に光輝さんは……

要するに光輝のことが好きになったのだ。だって自分を変えてくれた人なのだから。

仲良くなるために自分を犠牲にするなんて、相当の覚悟がないと出来るものではない。しかし、光輝は真向から来たのだ。セシリアと分かりあう為に、自分の精神を削って。

それだけではない。セシリアは光輝の強い意志を持った瞳に見惚れてしまった。その瞳は強みと暖かい優しさを感じた。それが一番の理由か。

光輝さん、無理だけはしないでください……そして早く元気になるってください。

今は願いが届くの信じるだけだった。

#### 第四話、暖かさと変化（後書き）

今回は多めになりました。

さて、いろいろとオリジナルを考えなくてはっ！

## 第五話〜忍び寄る影?と就任パーティー（前書き）

第五話です。

GW中の更新はこれが最後となりました。



## 第五話　忍び寄る影？と就任パーティー

翌日、授業再開の許可を得た僕は、夏兄と一緒に寮から教室へ向かった。ちなみにここの寮は学校から歩いて約200m前後。山田先生は「寄り道はいけませんよ」とか言ってるけど、正直ここまで近いとするのが馬鹿馬鹿しいたつらありやしない。

「それにしても昨日は大変だったな……全く、ここの女子は極端に男子の交流を求め過ぎなんだよ」

「そうだね。あれは一種のトラウマになりかねないよ」

昨日、夏兄がまた来てくれて話し相手になってくれたんだ。一人なのは寂しいからさ嬉しかったよ。でもクラス的女子ほぼ全員が狭い保健室に入ってくるんだから……怖かったよ。押しつぶされて死ぬかと思った……。

これは前からだけど僕達と一緒に歩いていると必ず聞こえる言葉がこれだ。ほら、現に今も。

「光輝くんが男なんて信じれないなあ。完全に女の子じゃない」

「やっぱり、兄弟で付き合ってるってのもありよね」

「はあ、はあ、光輝きゅんっ。お持ち帰りしたいなあ」

「一？光がいいかな、それとも光？一がいいかな？」

うわー、一部の人が僕達を見る目が危ない方向にいつてるよ。夏兄は兄みtainな存在だけどさ、そこまでの関係じゃないから！でも夏兄となら……って！

「僕は何を考えてるんだあああ！」

「うおう！　どうした光輝！？」

はっ！ 僕は何を言ってるんだ……。しかも夏兄の前で……。あう、恥ずかしい。

その声は学校全体に聞こえたらしく、騒ぎに発展しかねたとか。気をつけます……

「ってことで一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。一繋がりです。いいですね！」

朝のSHRにて。夏兄がまさかのクラス代表就任。山田先生が嬉々と喋り、クラスの女子も大いに盛り上がっている。そして肝心の夏兄というと、暗い。よほど嫌だったんだね。でも僕も嫌だからね。

「頑張って夏兄！ 何か力になれるなら手伝うからっ！」

「おおー！ 助かるぜ光輝！ サンキュー！」

「あつ、弟さんは副代表ですから。それにしても兄弟で代表ですかあ。なかなかありませんねっ」

……え？ ちょっと待って！

「山田先生！ なんでも、僕が副代表に！？」

「わたくしを始めとするクラスのみんなが賛成したからですわ！」

この声は間違いない。振り向けばセシリアさんが腰に手を当て、立っている。一体どうなってるんだよ！？

「一夏さんはわたくしに負けました。ですがあえてクラス代表にな

って貰うことで、クラスの力になって頂くと共に実力を付けていた  
だきたいと思ったからです。光輝さんはその実力で一夏さんのサポ  
ートをしてもらいたいと思い、推薦しました。お分かりかしら？」

なんか無理やりな気が……ど、どうしよう。

「いやあ、セシリアも分かってるよね！」

「そうだよね！ せっかくESを動かせる男子が同じクラスになっ  
た以上持ち上げないとねー」

「私達は貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。織  
斑兄弟はすばらしいわね」

商売になってるよ……。てか僕達は売られるの！？

「仕方ねえ。光輝、やってやろうじゃないか」

「えっ？ 本当に言ってるの？」

心の整理が早いなあ。相変わらず堂々としてカッコいいんだから。  
そこはお母さんと似てるなあ。

「夏兄がやるなら僕も頑張ってみるよ……」

目立つのは嫌いだけど、二人なら大丈夫。恥ずかしがり屋なのを  
直すチャンスかもしれないし。とにかく頑張ってみよう。

「なら決まりだな。クラス代表「織斑一夏」副代表を「織斑光輝」  
とする。異存はないな？」

お母さんの声に、はいと、クラス全員的女子が返事をする。し  
かし、軽く頭に響く……。女子はいろんな意味で恐ろしい。まあ決

まったら仕方がない。頑張ろう！

「夏兄は真っ直ぐ突っ込み過ぎなんだよ。上手く相手の攻撃を避けながら接近しないと」

その日の放課後、僕と夏兄は第三アリーナで特訓をしていた。今は終わって、アリーナの中の更衣室で着替え中。

白式の単一仕様能力『零落白夜』は相手のシールドエネルギーを切り裂いて絶対防御を発動させたり、相手のエネルギー兵器の無力化とができる。でもそれを発動している間は、自分のシールドエネルギーが減り続けるから使い勝手が悪い。でもダメージは半端じゃない。

「そつだよなあ。武器が雪片式型以外にも、遠距離の武器が装備できればいいんだけど」

「白式は、<sup>イコライザ</sup>後付装備ができないんだよね……」

一般のISは後付装備で武器を装備を変えたりできるんだけど、白式はそれができない。拡張領域<sup>バスロット</sup>を全部使っているからだ。ちなみに僕のISのガンダムも装備を変えることができない。まあ、種類が豊富だし今は困ってないけどね。

<sup>イグニッション・ブースト</sup>「瞬間加速もいいけど、一回使ったらそれ以降は見破られる可能性だってあるよね。篝さんのところで剣術をまた鍛え直して、動体視力を養うのもありだと思うよ」

相手の一瞬の隙を見極めて接近する。元々夏兄は剣道やってて、接近だったら僕も負けそうになる（でも剣筋がゆつくりに見えるから回避は容易）。箒さんに鍛えてもらったら昔の感も取り戻せるし、動体視力も鍛えられるからISの戦闘では有利になるんじゃないかな？

「そうだな。明日、箒に稽古をつけてもらえるか聞いてみるよ。いろいろアドバイスをありがとな光輝」

夏兄が僕の頭を撫でてくれる。暖かい手だね、姉弟そろってだなんて反則だよ……。

「ぼ、僕にできることがあったら、なんでも言ってね。夏兄には昔いろいろわがまま言ってたし……」

「え？ ああ、気にすんなよ。今はこうやって仲良くしてるじゃないか。光輝は自慢の家族だぜ」

「あ、ありがとう夏兄」

やっぱり夏兄は夏兄だよ。分け隔てない優しさ、そして自分の信念を貫く、これらが夏兄の強さだと僕は思う。夏兄のおかげで僕もちょっとずつ自信はついてるよ。まだまだ、けどね。でも変わるうときっかけをつくってくれたのは、お母さんと夏兄のおかげ。いつかちゃんと、お礼をしないと。

「よし、寮に戻ろうぜ光輝！」

「うんっ！」

夏兄の元気な声に僕も元気いっぱい返事をして、更衣室を後にした。

「ふうん。ここがそうなんだ……」

光輝と一夏が更衣室で着替えている同時刻。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバックを持った少女が立っていた。

四月の暖かい風になびく髪は、ツインテールにしている。肩にかからないギリギリくらいの髪は、金の留め金がよく似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこだっけ？」

上着のポケットから一切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになった紙は、少女の大雑把な性格と活発さをよく表していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからどこにあるのよ」

ファン・リンイン

愚痴を言いながらも少女 鳳鈴音の足は動いている。とにかく実践、そういう少女だ。

歩きながら、とある男子の事を思い出す。

元気かな、アイツ。

彼はこの『女尊男卑』という今の世の中でも、自分の意志を強く持っている。とにかく元気で、暗いところを見たことないくらいだ。

「でね……ああいうときは……」

ふと、声が聞こえる。その方向に視線をやると、女子がアリーナから出てくるようだった。

ちょうどいいや。場所を聞こつと。

「なるほど……なかなか難しいなあ」

アリーナに小走りで向かう鈴音は不意を突かれ、身体はびくと震えて足と止める。

男の声　それも知っている声によく似ている。おそらくは同一人物。

あたしだって分かるかな、分かるよね？　一年ちょっと会わなかっただけだし。

鼓動が緊張と予期せぬ再開でペースが上がる。

「いち」

「夏兄、ちよつとずつやっていこうよ。一つ一つさ」

「おう！　いやー光輝の説明は分かりやすいよ。それに比べ簾ときたら……」

すたすたと歩いて行く二人の女子と男子。

誰なのよ、あの女の子？　なんで親しそうなの？

先ほどまでの鼓動の高鳴りは嘘のように消え、ひどく冷たい感情と苛立ちになる。

それから無事に総合事務室は見つかった。アリーナの後ろにあるのが、本校舎だからだ。灯りがついていたので分かった。

「手続きは以上です。IS学園へようこそ。凰鈴音さん」

「あの、織斑一夏って何組ですか？」

鈴音は不機嫌ですとばかりな声で聞いた。それでも愛想よく答えてくれる事務員はよくできている。

「ああ、噂の子？ 一組よ。凰さんは二組だからお隣ね。確かクラス代表になったんですって。織斑先生の弟さんだけはあるわね」

噂好きは女性の性。その体現な事務員を冷ややかに見ながら、鈴音は質問を続ける。

「二組の代表って決まっていますか？」

「ええ。決まってるわ」

「名前、分かりますか？」

「分かるけど、どうするの？」

鈴音のおかしな態度に気付いたのか事務員が戸惑う。

「お願いしようと思って。代表をあたしに譲ってって」

その笑顔には、血管マークがついていた。

「というわけです！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

夏兄は大変だね、とか思いつつ、クラスのみんなとは少し離れた場所で、オレンジジュースを飲みながら夏兄を見守っていた。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のみんなが全員集



まって盛り上がっている。

壁を見ると、目立つように『織斑兄弟クラス代表、副代表就任パーティー』と書いた紙がかけてある。就任って……そんな大袈裟なものじゃないでしょ。

「光輝さん？ そんなに一夏さんが恋しいですか？」

「えっ！？ そ、そうのじゃなくて、なんか落ち着かないって……」

そうからかってきたのは隣に座っているセシリアさんだ。あの決闘が終わってからよく話してくるんだよね。自分から女子に話すのは慣れてないし、助かってます。

「はい、そこのお二人さん？ 新聞部のインタビューに答えてもらいます」

オーと一同が盛り上がる。そんなに盛り上がるとこなの？

「私は二年のまゆずみ薫子かおるこ。よろしくね。新聞部副部長やってます。これ名刺ね」

差し出された名刺を受取って見る。けっこう本格的な名刺で……。なかなかですね。

「では早速、織斑光輝くんっ！ 副代表になった感想を！」

ボイスレコーダーをずっと僕に向け、好奇心丸出しの顔で見てくる。

「いきなり言われても……」

感想って言っても困るな。そんな期待丸出しの表情で見ても、期待に込められるような感想は言えませんよ！

「えっと、代表を補佐できるように頑張ります」

「えゝ。もつといいコメントちょうだいよ。僕を止めることはできやしない！ とか」

えええええ！？ そ、そんなの言えやしないよ……恥ずかしいじゃないですか！

「女子と間違えないでね？」

「うゝん、可愛いんだけどさ。なんかこう迫力がないと言うか……。まあ適当にねつ造しとくね」

こらこら。それは新聞部としてどうなんですか！？ こつやつて間違った情報が伝わっていくのか……恐ろしいよ。

「セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「いいですわよ。なぜわたくしが」

「長そうだからねつ造しとくね。光輝くんに惚れたってことにしよう！」

「な、な、ななっ……！？」

いきなり顔が赤くなったセシリアさん。そりゃねつ造されるって聞いて怒ってるんだね。分かります。ってことで援護を。

「何を馬鹿なことを言ってますか」

「え、そうかなー」

「そ、そうですね！ なんで馬鹿にされなきゃならないのですか！？」

なんで僕は怒られてるの？ 言い方がおかしかったかな？

「まあ、とりあえず二人とも並んでね。注目の専用機持ちなんだからさ、写真撮りたいのよ」

「えっ！？」

意外そうなセシリアさんの声。取材と言えば写真だよね。でも写るのは好きじゃないなあ。どうしょ……

「あの僕は結構ですからー夏くとセシリアさんで撮ってもらえませんか？」

「えー、ノリが悪いなあ。いいじゃない」

先輩の説得を断る僕だったが、

「光輝さんっ！一緒に写りましょう！」

セシリアさん！ 声が大きいし、顔が近いよ！ なんでそんなに顔が赤いのさ？ やっぱりセシリアさんも恥ずかしいから？ でもそれなら断ると思うし、分からないなあ。

僕は少々了解して写真を撮るようになった。

「撮った写真は当然、いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて」

「時間がかかるからダメ。さっさと並んで」

先輩は強引に僕とセシリアさんの手を引いて、握手まで持っていく。女子握手なんて初めてだから緊張しちゃうなあ。

ふと、セシリアさんを見ると、こっちをじろじろ見ている。どうかしたのかな？

「どうかしたの？」

「な、なんでもありませんわ！」

変なセシリアさん。緊張かな？

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「なんですかそれ！ とりあえず2？」

「ぶっ、74・375でした」

ここは普通2でしょ！？ この先輩はよく分からないなあ。  
パシャッとシャッターが切られる。やっぱり慣れないよ。

「はい！ ありがとうございます」。じゃあまたね

そういつと今度は夏兄の方へ行かれた。せわしない先輩でした。

「やった！ 光輝さんとツーショット！」

セシリアさんがガッツポーズしながら小声で何か言ってる。なんか嬉しいことでもあったみたい。よく分からないけど、良かったね。  
このパーティーは遅くまで開催して、疲れた僕は部屋のベットで爆睡しました。

## 第五話　忍び寄る影？と就任パーティー（後書き）

なにかアドバイスなどがあればよろしくお願いします！

## 第六話　転入生（前書き）

小説を書くのはなかなか難しいけど楽しいwww

## 第六話　転入生

織斑ちゃんと織斑ちゃん聞いた？　転入生のこと？」

パーティーの翌日。僕と夏兄は席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。結構打ち解けてきたし、女子にも少しずつ慣れてきたよ。

しかし夏兄には「織斑くん」、僕には「織斑ちゃん」。一人のクラスメイトが言うには「だって男の娘でしょ？」といまいち分からないことを言ってきたのだ。確かに僕は男だよ？　なのになんで「ちゃん」付けになるんだよ！？」

「転入生？　今の時期に？」

「微妙な時期に転入してくるんだね」

まだ4月の今日。そんな時期に入学じゃなくて転入。しかもIS学園は転入には厳しい条件だったはずなんだよ。試験はもちろんだけど、国の推薦がないと無理なはず。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

それなら納得。って代表候補生といえば……

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

一組の代表候補生、セシリア・オルコットさん。僕からしたら対したことないけど、他と比べたらそれなりの実力はある。それは認めます。

「このクラスに来るわけではないのだろう？ 騒ぐほどでもない」

自分の席にいた箒さんがいつの間にか夏兄の傍にいた。確かに箒さんの言う通り、騒ぐほどでもない気がする。さすが箒さん。

「どんな奴なんだろうな」

「む……気になるのか？」

「ん？ ああ、少しは」

「ふん……」

夏兄は相変わらず鈍感だなあ。好きな人に他の女子が気になるって言われたら、嫌になるよね。

「それよりも夏兄。来月にはクラス対抗戦があるんだからさ、女子を気にしてる暇なんてないはずだよ？」

「光輝の言う通りだな」

「まあ、やれるだけやってみるか」

夏兄「どんだけ意識が低いんだよ」。このクラス対抗戦で一位のクラスは学食デザート半年フリーパスが貰えるんだ！ 学食のデザートは結構美味しいんだよ。でも僕も副代表だから各クラスの副代表と戦わないといけないんだけど、みんな量産IS「打鉄<sup>うちがね</sup>」だし、なんとかなる。

「専用機持ちは一組と四組だけだから、余裕だよ」

後は夏兄がやる気を出してくれればいいんだけど。

「その情報、古いよ」



教室の入り口からそんな声が聞こえた。一体誰ですか？

「二組の代表も専用機持ちになったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝をたて、ツインテールが目立つ女子。だから誰ですか！？

「お前、鈴<sup>りん</sup>か？」

そう言ったのは以外にも夏兄だった。夏兄の古い知り合いかな？にしても夏兄は女子友達が多いよね。箒さん、頑張ってる！

「そうよ。中国代表候補生、<sup>ファン・リンイン</sup>鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たわけ」

まさかこの子が転入生？ うーん。なんか迫力がないなあ。

「何格好つけてんだよ？ すごい似合わないぞ」  
「んなつ！ なんてこと言うのよ、アンタは！」

会話からすると二人は結構な仲のようで……。箒さん、落ち着いて！ 殺気をだしちゃダメだって！

ふと、鳳さんは僕の方へ向き睨みつけてきた。うう、気の強い女子は苦手だよ……

「あんた、なんでズボン穿いてるの？」  
「へ？」

思わず変な声が出てしまった。一体何を聞いてるんだ？ だって制服だから。

「女の子の制服ってスカートよね？」

……はあ。そういうことか。

「僕は……男だから……」

「へ？」

今度は凰さんが変な声を出した。こんなに女子に勘違いされる僕って一体……。

「鈴、光輝は男子だぞ？ でも初見なら間違えるよな」

そんな……！？ 夏兄まで……

「夏兄のばかぁ！」

僕は立ちあがって夏兄のお腹に一発殴ってやった。

「ぐお！ どうしたんだよ……光輝？」

「夏兄は間違えないって信じてたのに！」

その様子を啞然とした感じで見ていた凰さんは、やって来たお母さんに出席簿で頭を叩かれ、しぶしぶ自分の教室に戻っていった。夏兄はなんで僕が怒ってるか理解してくれて謝ってくれた。僕こそ怒り過ぎたよ。箒さんは「よくやった光輝」とか言っていました。よくはないでしょ……。

「へえ、じゃあ鳳さんは夏兄の幼馴染なんだ」

昼の食堂にて。セシリアさん、僕、鳳さん、夏兄、箒さん、の順で座ってそれぞれ食べている。

鳳さんは夏兄が小五の時に転校してきた人で、中二の時に中国に戻ったという。僕はずっとお母さんといたから小学校に行ってなかったけど、時々夏兄に会ってはいろいろ話したなあ。その時に鳳さんのことを話したって夏兄は言ってるけど思い出せない……。

箒さんとは小三のころに何回か会ってる。小四の最後らへんに転校してしまったのは残念だった。三人で遊べなくなると思うと、それを聞いた時は思いっきり泣いたのをはつきり覚えてるよ。でもこうやってまた再会したからいいけどね。

「鈴、こつちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの、幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

鳳さんはまじまじと箒さんを見る。箒さんも負けじと鳳さんを見返す。

「初めまして、これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

ダメだ……この二人を会わせてはいけなかった。どうやら鳳さんも夏兄のことが好きそうだ。要するに箒さんにライバル出現！？ ってことだね。がんばれ夏兄。

「ンンンッ！ わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？ まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国に興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

セシリアさんの顔が怒りで真っ赤に染まっていく。感情の起伏が激しいひとだなあ、と言ったら怒られそうだから言わないでおう。

「い、い、言っておきますけど、わたくし、あなたのような方に負けませんわ！」

「そ。戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

一見、ただの自信過剰に思えるが鳳さんは違う。この自信に溢れてるし、嫌味でもなさそうだ。どうなんだろうか？

「で一夏。その女子っぽい男子はいつたい誰なのよ？」

「ああ、光輝ね。俺の弟なんだ」

そう言ってもらえると嬉しいよ。こんな僕でも夏兄とは兄弟なんです。

「へえ。……光輝よね？ あんた、ホントに男子なの？」

なっ！？ 教室で言っただでしょ！

「男子だよ！ そんなにぼ、僕は女子に見えますか！？」

「うん。絶対女子じゃん」

「うう……酷い……」

どうしたら信じて貰えるんだろ……

「落ちつけよ光輝。ったく鈴も光輝を苛めるのは止めてくれ」

「……分かったわよ。悪かったわね」

凰さんは顔を赤くしながらも謝ってくれた。夏兄に言われたからって感じたよね、どう見ても！

「でも私も初めて光輝を見た時は女子かと思ったぞ」

「篠々乃さんの言う通りですわ。光輝さん、本当に男子ですか？」

くうう……二人とも言いたいこと言いやがって……絶対に仕返ししてやるからな！

## 第六話ゝ転入生（後書き）

光輝がおかしくなってますが気にしないで欲しいと思いますwww

## 第七話、強さとは？（前書き）

ふう、何を書いてるんだろうwww  
少しは文才が欲しい……

## 第七話　強さとは？

翌日、クラス対抗戦日程表についての知らせが掲示板にあった。

一回戦目の相手は二組、鳳さんのクラスだ。しかも二組のクラス代表は鳳さんだった。

僕や篤さん、セシリアさんの特訓のおかげで夏兄の実力もついてきたけど、相手は代表候補生。実力は分らないが上なのは確か。デザートの　もとい、クラスの命運がかかってるんだから頑張っていかない！

ってことでその日の放課後、僕、夏兄、篤さん、セシリアさんで第三アリーナに来ていた。

「夏兄、今日はとことん回避の練習にしよう」

「回避だけか？　接近戦の練習とかはいいのか？」

「確かに必要だけど、避けるのも大切だよ。今日は零落白夜」は使わなくていいからね」

燃費の悪い白式は通常は回避に徹する。一回命中してしまうだけで白式の稼働時間は減ってしまう。今までは回避しながらの接近を練習してたけど、今日は徹底的に避けてね。

「でどうするんだよ？」

「夏兄にはフィンファンネルとブルーティアーズのオールレンジ攻撃を避けてもらうよ。ってことでセシリアさん、お願いしてもいいかな？」

「は、はい！　だ、大丈夫ですわ！」

いきなり慌てるセシリアさん。僕は何か悪いことでもしたのかな？　うーん、分からない。とにかく続けよう。



「箒さんは打鉄<sup>うちがね</sup>で待機してくるかな？」  
「む……分かった」

納得がいかないって顔してるけど、ちゃんと参加してもらうからさ。

「で各人準備してね。箒さんとセシリアさんちよつと話が……」

みんなISも展開させる。ここにいるのは四機だけど、それぞれの個性が出ている。

「用意はいいね、みんな？」

「おう！ いつでも大丈夫だぜ！」

「大丈夫ですわ」

「ああ。こつちも大丈夫だ」

ならさつそく始めようか。

「どんどん避けてね夏兄！ フィンファンネル！」

「一夏さん、特訓だからって容赦はしませんわよ！」

ガンダムの六基のフィンファンネル、ブルーティアーズの四基のビット（このビットがブルーティアーズっていうんだってさ。なんかややこしいよね……）を展開させ夏兄に向かわせ攻撃する。

四方八方からの攻撃を行えるのは今のところ、フィンファンネルとビット（武装のブルーティアーズはビットと呼ぼう。紛らわしいね）だけなんだって。セシリアさんのビットはなかなかいい動きだね。今回は操作だけだから集中もしやすいからかな。

夏兄もなかなかいい動きになってきたなあ。全身を使って避けるよ。さすがに頭上と後ろは避け切れてないけどね。

「夏兄、そろそろ行くからね。」

夏兄に個人間秘匿通信で話す。そして女子二人組に合図を出す。  
ブライベート・チャネル  
箒さんがオールレンジ攻撃を避け続ける夏兄に向かう。

「一夏！ 覚悟しろ！」

その声にビックリしたのか、夏兄は接近していた箒さんの近接ブレードの攻撃を反応しきれず直撃してしまい、壁に吹っ飛ぶ。ちょっと中断しようか。

「二人ともちよつと中断。夏兄、大丈夫？」

一旦、中断して僕達は夏兄の方へ向かった。ISを起動してるから壁に思いつきり当たったってどうってことはないと思うけど……それとも箒さんの攻撃が重かったかな？

「大丈夫だけどさ、なんでいきなり箒が突っ込んでくるんだよ!？」  
「そういう特訓だからだよ。一つの攻撃に集中して回避に徹するのでもいいけど、周りを見ないとさ。いつ相手が向かってくるか分からないよ?」

「それを始めから言ってくれよ……」

「それじゃ特訓にならないでしょ?」

「あんなビームの雨を完全に避けるのは無理があるぞ!」

まあ、確かにそうかも。見切れることは出来ても回避は難しいか。

「でも動きが……良くなってますわね」

セシリアさんの息遣いが激しい。ビットの操作に集中し過ぎてダメージが来てるのか。動きがフィンファンネルにも劣らない動きだったし、ここまで集中したのは初めてだったっぽいね。

「セシリアさんは寮に戻ってて。操作に集中し過ぎて負担がかかっているんだよ。あんまり無理されても困るしさ」

「……大丈夫ですわこのくらいなら……！」

バシユンツ！

「なっ！？ 光輝さん、一体何を！？」

僕はビームライフルをセシリアさんに向けて放った。案の定、セシリアさんは避けることも出来ずに直撃。

「いつものセシリアさんならこのくらい避けれた。でも避けられなかった。しかも僕がライフルを構えたのすら分かってなかった。それほど負担がでてるんだよ。今日は休もう、ね？」

セシリアさんの顔がどんどん赤くなっていく。熱でもあるんじゃない？ 早く部屋に行かせようか。

「わ、わかりましたわ……その、こ、光輝さん、部屋に連れてってもらえ、ませんか？」

にしても息が荒いよ。ちょっと恥ずかしいけど、そんなこと言ってる場合じゃない！

「わかったよ。ごめん、夏兄に箒さん。セシリアさん連れていくから特訓やってて」

「おう、わかったぜ」

「気をつけてな……」

僕とセシリアさんはアリーナを後にした。夏兄と箒さんを方を見ると、箒さんの顔がほんのり赤くなってる。頑張れ、箒さん！

や、やりましたわ！ 光輝さんと二人きり！ しかも光輝さんのベッドだなんて！

寮の光輝と一夏の部屋にて。本来ならセシリア自身の部屋まで送るべきなんだろうが、光輝の心配性なのもあり、ここで看病すること。光輝自身、自分の部屋の方が看病しやすいのこと。

集中し過ぎて負担が重なり、体調不良なのは確かだ。だが中身はどうですか？ と言われたとしたら病人とは思えない程のテンションの高さだ。

「ビットの操作に集中し過ぎてちよつとした体調不良だなんて。無理だけはしないでねセシリアさん」

「は、はい……でもそれを言うなら光輝さんですわ……！」

自分の精神を蝕むというのにサイコバーストを使った光輝は無謀としか考えられなかった。だがあの時の光輝の瞳に惹かれた。

信念を貫くという瞳。例え、自分の身に何があっても果たすという強い意志が。

「あゝ、それを言われたら返す言葉がないよ。でも仕方のないことなのかもしれない」

「なぜですか……？」

「僕は人の暖かみを伝えたい。それにこんな考えを教えてくれたあ  
る二人に恩返ししたいから」

やっぱり光輝さんは強いですね。心が強いです。でも……

「一人で背負い過ぎやしませんか？」

自分一人が犠牲になって伝えればいい。本当にそれでいいかセシ  
リアは主張する。

「僕がある人と決めたことだからね。あんまり友達とか巻き込みた  
くないんだ」

「わたくしは構いません！」

セシリアは光輝のおかげで変わることが出来た。その恩返しが  
したい。そんな想いがセシリアによぎる。光輝が好きなものもあるけ  
ど。

「わたくしは……光輝さんのように強くなりたいですから……」

「セシリアさん……ありがとう」

光輝はそう言ってセシリアの手を握って言った。男子とは思えな  
い程の可愛い笑顔になり、それを見たセシリアは緊張が極度に  
増し、満足な顔を見せ気絶した。

「えっ！？ セシリアさん！ ど、どうしたの！？」

いきなりベッドに倒れたセシリアにビックリして光輝は慌ててしまふ。

その後、一夏が部屋に帰ってくるまでセシリアは起きなかったという。

寝る前に光輝は思う。

僕のように強くなりたい……か。僕は弱いよ。お母さんや夏兄、セシリアさんや篤さんのような友達がいるから僕は僕であるんだよ。

「感謝するのは僕だよ。ありがとう、セシリアさん」

誰にも聞こえない小さな声で光輝は言い、眠りについた。

## 第七話、強さとは？（後書き）

そろそろ一巻が終わりますかな。頑張って書いていきます！

## 第八話前編／赤き乱入者（前書き）

光輝のニュータイプについてですが、ISの世界にニュータイプは存在しないだろうというご指摘がございました。ですので、光輝は「そういう能力があるだけでニュータイプではない」ということにしたいと思います。

また ガンダムについてのご指摘もありましたが、ガンダムについては後々の物語で誕生の秘密を書くので、ご了承ください。

またこの作品を見て嫌悪感を感じた方、申し訳ありません。



## 第八話前編　赤き乱入者

五月になり数日。今日がクラス対抗戦だ。場所は第二アリーナのピット。

夏兄も特訓のおかげでだいぶ伸びてきた。だけど一回戦目は二組つまり凰さん、油断は禁物なのです。

「夏兄、絶対に勝ってきてね！」

「まかせろ光輝！ 絶対勝ってくるぜ！」

オープンチャネルで夏兄と話し、白を纏った夏兄は戦場に飛び立った。あの調子なら大丈夫そうだね。

「せっかく私達が特訓にしたんだ。一夏ならやってくれよう。心配しなくとも大丈夫さ」

「そうですわ。これで負けてしまったては情けないですわね」

そんなこと言っても心配なんだねセシリアさん。手が震えてるよ？ でも心配なのはみんな同じか。

「夏兄、諦めたらダメだよ」

ピットから試合を見ていた僕らは驚きを隠せなかった。

凰さんのIS「甲龍<sup>シエンロン</sup>」は肩アーマーに衝撃砲を装備していた。

衝撃砲は、空間自体に圧力をかけて砲身を生成したのち、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して打ち出す、というもの。やっかいなのは砲弾はもちろん、砲身も見えないんだ。しかも全方位に攻撃

つまり、フィンファンネルやビットのようなオールレンジ攻撃が可能という、なかなかの武装です。

それでも夏兄は上手く回避できてる。ハイパーセンサーの恩恵があつて、やっと反応できてる感じだけだね。

「一夏さん、少しずつ押されてますわね……。このままでは」

確かにセシリアさんの言う通りだ。徐々に夏兄が追い込まれてるのが分かる。衝撃砲を掻い潜<sup>かいくぐって</sup>って接近するのは難しい。、『零落白夜』状態で攻撃が命中すればなんとかかなりそうだけど、どうするか……。

ふと、箒さんの方を見る。夏兄のことが心配で身体が小刻みに震えている。

「箒さん、夏兄なら大丈夫だよ。こんな状況でも夏兄の目は諦めてない。だから大丈夫」

そう、夏兄はどんな劣勢でも諦めたりしないんだ。今この状況でもチャンスを伺ってるのが分かる。たぶん、瞬間加速<sup>イグニッション・ブースト</sup>で接近して一気に決着をつける気なんだと思う。

「ああ……そうだな。ありがとう光輝」

「いえいえ、僕達も最後まで夏兄を応援し……っ!」

何かがアリーナに近付いてくる! 正確にはわからないけど、このままだと夏兄達が危ない!

僕はすぐにISを起動させ、アリーナに向かおうとするが箒さんとセシリアさんに止められた。

「光輝! ISなんか起動させてどこに行く気だ!?!」

「そうですわよ！　いくら一夏さんが押されてるからといって試合に割り込むのはダメですわっ！」

「行かなきゃ二人が危ないんだよ！　だから行かせてっ」

「篠々乃、オルコット、行かせてやれ」

そう言ったのはお母さんだった。さつきから山田先生と一緒にピットにはいたけど、話さなかったな。

「早く行け。こんなことをしている間にも、お前の感じる奴が向かって来ているのだろう？」

「うん……。絶対に二人を助けるよ！」

そう言っただけは、ピットを後にしアリーナへ向かった。夏兄が瞬間加速で接近している最中だった。

ズドオオオオンッ！！

僕がアリーナに着いたと同時に大きな衝撃と轟音がアリーナに響いた。どうやらアリーナの遮断シールドを突破してきたようだ。それは同時に『何か』の攻撃力を測ることが出来る。しかし、その『何か』はアリーナの中央の砂煙で見えない。

アリーナ中央に所属不明機を感知。白式と甲龍がロックされています。

アリーナの遮断シールドはISと同じ原理でできている。ということとはそれを貫通する程の攻撃力を持った『何か』がやってきたということだ。

早く二人を助けないと……！

「夏兄、鳳さん早く逃げて！　今来た奴は危険だ！」

僕はオープン・チャネルで二人に呼び掛ける。ってこんな時に喧嘩しないですよっ！

「こ、光輝？　なんで此処にいるんだ！？」

「てか危険ってどういうことよ！？」

「話は後で話すから、二人ともピットに戻って！」

試合をしていた二人のシールドエネルギーはかなり減っているはず。もし戦ってゼロにでもなったら命の保証はない。

突然、砂煙から二人に向かって熱源が連続で放たれる。二人は避けるが、あの熱源は……

「セシリアのISよりも出力が上だ。シールドを貫通させるだけはあるってことか……」

夏兄の言う通り。今放たれた熱源　　ビーム兵器はセシリアさんの武装より出力が高い。

「夏兄、すぐにそっちに行くから！　待ってて！」

二人の方へ向うがビームがそれを遮る。こう体験してみると正確な射撃だ！　ギリギリで避けながらも二人の元へ辿りつけた。

「大丈夫か光輝！？」

「うん、それよりも今は……」

ビームを連射してくれたおかげで砂煙が消え、相手の姿を見ることが出来た。

まず目につくのは全身装甲であること。しかも真っ赤に染まって

いる。左腕には不明機と同じ高さのシールドが装備してあるが、その中央付近と左右の腰から伸びている短いスカートには奇妙な紋章が描かれている。全体的に重そうな雰囲気だ。

突然、ISのハイパーセンサーが反応する。

MSN 04 サザビーと断定。見た目によらず、機動性、運動性は高い。どの武装も火力が高く、特に腹部拡散メガ粒子砲はジェネレーターから直接エネルギーを供給しており、危険度は最大です。

ん！？ この不明機のことなんだろうけど、こんな番号は聞いたことないよ。夏兄達のハイパーセンサーは反応したのだろうか？

「二人とも、あの機体について何か情報が出てきた？」

「何も分かんねえぜ……。一体なんだってんだ！」

「あたしも分からないわ。アンタはどうなのよ？」

「あれはサザビーっていうらしいんだ。機動性も運動性も高いし、火力も高いって出たんだけど……」

ガンダムのハイパーセンサーだけが解析したってことだけど、一体どうなってるんだよ……。というかさっきからサザビーから感じるこの感覚はなんだろう。人の意志？ なのかもしれないけど、感じたこともない深い負の感覚。今分かるのはこの機体は危険だってことだ！

「お前、何者だよ」

「……………」

夏兄の声にも反応しない。当然と言えば当然かな。サザビーは動こうともせず、ずっとこちらを向いている。

「二人とも……早くアリーナから脱出して。あれの相手は僕一人でする」

「な、何言ってるのよアンタ！ 三人でやれば……」

「鈴、光輝にまかせよう。あそこまで怒ってる光輝をみたのは久しぶりだ」

「っ！ 分かったわよ……。でも遮断シールドがレベル4になってるし、全ての扉はロック中。これじゃ、脱出なんて出来ないわよ？」

鳳さんの言う通りだ。このままでは二人が危ないし、どうしよう？

警告！ サザビーに完全ロックされました。

ISのハイパーセンサーがサザビーのロックを伝えてくれた。ちょうどいいや、これなら何とかなりそうだね。

「二人とも！ 僕だけをロックしてきたから、邪魔にならないようにしてくれる？」

「分かったぜ光輝。負けるなよ光輝！」

「うん……。ありがと夏兄」

負けないよ。絶対に負けない。今度こそ約束を守ってみせる！

僕はビームサーベルを抜き、サザビーへ接近する。サザビーも反応して接近してくる。

黄色とピンクの光の剣が交錯し、互いに押し合う。

「負けるもんかああ……！」

死闘は始まったばかりだ。

## 第八話前編／赤き乱入者（後書き）

作者の能力ではこの文章が限界です。

でもこんな駄文でも閲覧してくださる方には感謝しています。

どうかこれからもよろしくお願いします！

## 第八話後編／疑問と声（前書き）

バトルシーンは書くのが難しいです……。どうしてうまく書けません。



## 第八話後編／疑問と声

「三人とも聞こえますか！？ 返事してください！」

アリーナに残っている三人を呼び戻そうとオープン・チャネルで話す真耶だが、返事はない。ピット内の通信機器が壊れたかそれとも……。外の様子も見れなくなった以上、最悪の事態にもなっているかもしれないのだ。

「落ち着け山田先生。三人なら大丈夫だろう。甘いコーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「えっと……織斑先生？ それ塩なんですけど……」  
「……なんで塩があるんだ」

そう言いながら白い粉を容器に戻す。千冬もなんだかんだで家族の事が心配で慌てているのだ。まあ、当然だと思うが。

「さ、さあ……？ でも大きく『塩』って書いてますけど……」

「……………」  
「やっぱりご家族のことが心配なんですネっ！？ だからそんなミスを」

「……山田先生、コーヒーをどうぞ」

重い沈黙の中、調子に乗っている真耶に千冬の容赦ない罰を受ける。

「でもそれって、塩が入ってるやつじゃ……………」  
「どうぞ」

抵抗を試みるが失敗に終わった。真耶は涙目になりながら送られてきたコーヒーを飲む。

「熱いから一気に飲むといい」

悪魔が降臨した。

「先生！ わたくしにISの使用許可を！ いつでも出撃できますわ！」

「そうしたいが、遮断シールドレベル4。扉は全てロックされている」

「まさかあのISの仕業ですよ！？」

「そうだろうな。今のところ、救援に行くのは無理だ」

落ち着いた口調で話す千冬だがその手は苛立ちを抑えることが出来ずに画面を叩いている。

「でしたら！ 緊急事態として政府に助勢を！」

「やっている。今も、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除した後、ただちに部隊を突入させる」

そう続ける千冬は益々募る苛立ちを少しずつ表していく。それを危険信号と見たセシリアは頭を押さえながらベンチに座った。

あのISは束の言っていた『赤い彗星』なのか？ まさかガンダムに魅かれて来たというのか？ だとすれば光輝は……

昔、束に言われたことを思い出す。聞いた時は信じなかったがでも今まさに起こっているのだ。

苛立ちと不安に駆られる千冬はただ家族の安全を祈るばかりだっ

た。

「つ、強い！ 一体何者なんだよっ」

未だサザビーにダメージを与えられない僕は苛立ちを感じ始めていた。

接近したまま追い詰めればよかったんだけど、ビームサーベルの押し合い時に腹部拡散メガ粒子砲を放ってくるんだから離れないといけなかった。

直撃は免れたけど、右足を少しかすったよ。でも驚くのは、かすただけで絶対防御が発動してしまったことだ。もし直撃を受けてたら……僕は生きてただろうか。

「ファンネル！」

突然そんな声が頭に響いてきた。同時にサザビーのバックパックから何かが射出された。

かなり小さいけどビットやフィンファンネルと同系の武装か。円筒形から+の形にスラスタカバーが展開され、6基がこっちに向かってくる。

「それなら僕だって……行って！ フィンファンネル！」

僕も6基全てのフィンファンネルを射出した。赤と白のファンネルが移動音を出しながら銃撃戦を行う。操作中、頭に映像が流れ込んでくる。

仮面の人、僕達と同じくらいの人が、ロボットに乗って戦っている。周りは黒一色で時折キラキラしたものが写っている。

「なんだ……これっ。頭にどんどん流れ込んでくるっ！」

二人はロボットに乗って戦っている。同い年の人が止めを刺そうとした時、緑の大きいとんがり帽子のようなロボットが割り込んできて、仮面の人を助けた。青年にとって相手の二人は敵なんだろう。でも青年は緑のロボットを撃墜したのに泣いている。仮面の人も同様に。そこで映像は途切れた。

「今の一体？　　っ！」

集中が相手に戻った途端、急接近したサザビーに思いっきり蹴られ勢いよく壁にぶつかった。

映像に見惚れて反応が遅れちゃった。にしてもあれは何だったんだろうか？　サザビーと何かしらの関係があるのだろうか……。

そんなことを考えている内にサザビーがビームサーベルを持って接近してくる。避けたいんだけど、身体が動かない。なんで動かないんだよ！　このままじゃやられてしまるのに……！　僕は死を覚悟して目を瞑った。

「みんな、ごめんなさい。僕は先に逝きます……」

ガキイイン！！！！

何かが交錯した音に気付いて僕は目を開ける。なんと夏兄がサザビーと押し合っていた。

「光輝！　大丈夫か！？」

「なんとかね……夏兄こそもうエネルギーが！」

「なんとかなるさ！　三人でこいつを倒すぞ！」

「で、でも……」

「いいから言うことを聞く！ アンタの方がボロボロよ！」

横から衝撃砲を撃ちながら援護する凰さん。それに気付いたサザビーは一旦距離を取り、待機している。

「光輝、一気に接近してあいつを倒す方法を思いついたんだけど、やってみないか？」

「そんなことが出来るの？」

「ああ！ やってみる価値はあると思うぜ？」

ただ向かっていくだけじゃこっちが不利になる。作戦があるならそっちを試してみよう。

「分かった。夏兄の作戦でいこう！」

「なるほど……それならいけるかも」

「へえ、アンタにしたら考えたじゃない」

僕と凰さんは夏兄の作戦を聞いて納得した。成功するかは運だけで決まればいける。

サザビーは襲ってくる気配はない。どうもこっちの様子を伺っているようだけど、すごく助かります。

サザビーのファンネルは6基とも落とすことが出来たけど僕もファンネルを全部落とされてしまったから上手い援護が出来ないけど、やれるだけ頑張る！

「いくぞっ！」

夏兄の声に僕達は作戦を実行する。同時にサザビーも反応してライフルを撃ってくる。僕達は一度、散開する。サザビーは僕を集中攻撃してくる。予想通りだ。

僕はサザビーの攻撃を全力で回避して、ライフルとビームキャノンで少しずつ攻撃して注意をこちらに向ける。

「オオオツ!!」

夏兄が衝撃砲のエネルギーで更に速くなった瞬間加速でサザビーに接近する。その速度は

サザビーは後ろから接近する夏兄に反応しきれず、零落白夜によってライフルを持っている右腕を切られる。

瞬間加速の原理を上手く活かしたね夏兄。

瞬間加速はその過程で慣性エネルギーが発生する。それを使って爆発的に加速する。

このエネルギーは外部からのエネルギーでもいいのだ。速度は使用するエネルギーに比例する。最大出力の衝撃砲を外部エネルギーとして夏兄は一気に加速したんだ。結果、サザビーにダメージを負わせることが出来た。そして僕の番

「これでッ!」

サザビーが戸惑っている間に僕も瞬間加速をして接近する。そして何回もサザビーを殴り続ける。

「うおおおおっ!!」

殴る度に凄まじい音がするが気にする暇はない! そして回し蹴りを食らわしてサザビーは壁にぶっ飛んだ。僕はその軌跡を追い、

止めを刺す。

「これで 終わりだよ！」

サザビーの方に向かいながら、宙返りをしてバックパックに装備してある ハイパーバズーカを発射する。なずけて『背面バズー！  
なんてね！

「ふう、なんとか終わったのかな？」

砂煙に隠れてサザビーの様子が見れないけど、かなりのダメージは与えたはずだ。これ以上の戦闘は望ましくないし、三人ともシールドエネルギーがほとんど残ってないしね。

「やっと終わったみたいね。一時はどうなるかと思ったけど、なんとかなったわ」

「そうだな。光輝、鈴、早く帰ろうぜ！」

「そうだね！ 帰ろう……」

「まだだ……まだ終わらんよー！」

この響く声はまさか！？

砂煙から音が聞こえて僕達はその方を見た。なんとサザビーが動いているのだ。

装甲全体には僕が殴りまくったおかげでボコボコになっており、各部からは紫電を放っている。今にも壊れそうな感じだが、それでもゆっくり歩いて近づいてくる。

立ち止り、最後の足掻きといわんばかりに拡散メガ粒子砲をチャージしている。なら一か八かだ！

「二人は離れてて！」

僕はそう言うとサザビーに向かって瞬間加速をする。この接近する途中で発射されたら直撃は免れないだろう。

こんなボロボロならこの攻撃を避けたら勝手に停止しそうな感じもあると思う。でも僕はそう感じる事が出来なかった。

今のサザビーを動かしているのは絶望だと思う。対峙した時から感じるプレッシャーは凄まじいものだったけど、絶望もすごいものだ。何に対してかは分からないけど、それを断ちきるなら直接僕が停止させる！ その絶望を断ちきる！

僕はビームサーベルを抜刀し突き刺そうとするが、同時にメガ粒子砲も発射され周りが光に包まれる。

「守る為に戦うのはいいが、戦いに引きずり込まれるなよ」

そんな声が聞こえたのが最後で、僕は気絶した。



## 第八話後編／疑問と声（後書き）

終わりが重なっているけど、気にしないwww  
さて、原作一巻はここで終わって次からは二巻です。

## 第九話　決意と転校生！？（前書き）

途中から二巻に入ります。

それとタイトル変更いたしました。前のタイトルだと勘違いされま  
すので……。

## 第九話　決意と転校生！？

「よくサザビーを倒したね。でも無理し過ぎだよ」

暖かい緑の光に包まれながら僕はその声のする方へ向いた。しかし、誰もいない……。

「やっぱり君は僕より良い才能を持つてる。それを生かすも殺すも君自身だけだね」

「才能？　というか、あなたは誰ですか？」

僕は声に質問した。いきなり才能とか言われても困りますよ……。

「今は言えない。でもいつか必ず僕から言うよ。さあ、もう目覚めよう。君を待つてる人たちがいるからさ」

喋っている内に徐々に声が遠ざかっていく。最後にこう言い残した。

「僕は君の秘めたる可能性が開花することを祈っているよ」

謎の声はそういつと完全に消えた。同時に僕も現実引き戻されていく……。

「うーん、よく寝たなあ」

身体を伸ばしながら起き上る。どうも寮の僕と夏兄の部屋みたいだ。

保健室じゃないってことは怪我はなし？ でもけっこうギリギリだったけど、どうにかなるもんだね。

立ちあがって外を見る。日はすっかり暮れて真っ暗な夜。それを知った途端、急にお腹が鳴ってしまった。

「あゝお腹すいたな。今何時だろ」

時計を見ると7時15分だ。まだ食堂は開いてるし、まずは食べよう。それからいろいろ考えようかな。

「おゝ光輝、目が覚めたのか」

振り向くとドアの前に夏兄がいた。両手にはお盆にのせた定食が置いてある。

「ほら、まだ何も食べてないだろ？ 疲労だからこそ食べないと身体に悪いしな」

「あ、ありがと夏兄。って疲労がなんだって？」

夏兄の話はこうだ。

あの光に包まれた後、サザビーは完全に停止して崩れたらしい。

でもその残骸からはISのコアは発見できなかったという。理由は分からないがコアがなのは大変なことだ。

ISにはそれ専用のコアがいる。そのコアを作ったのが、篠々乃束さんしののた 篝さんの実の姉だ。

ISのコアは束さんしか作れない。現在は束さんがコアの製造を止めてしまった為に世界で、467個のコアがある。これによって

ISの絶対数は467機になってしまふ。各国では新しいISを作る度に存外のISを解体、初期化しなければならない。

ちなみにISの産みの親、束さんは現在逃亡中である。ISを開発したことから政府の監視下にあつたが行方をくらましている。コアの製造方法は束さんしか知らないので、各国から追われる身になっている。

と話が逸れたから戻そう。現在のISでコア無しで起動するものはない。しかもサザビーは無人大ったはず。無人のISも今の世界には開発されていない。

「なんで光輝はあのIS　サザビーだったのか？　なんで無人大つて分かつたんだよ？」

「うゝん、何か違和感があつたんだよね。よく分からないんだけどさ。ごめんね……」

「謝らなくていいって。いやゝでも光輝が倒れた時はひやひやしたぞ」

サザビーが停止した後、僕も倒れたらしい。何か致命傷でも受けたのかって思つてたらしいけど、どうも寝てたらしい……。外見は傷の一つもなくても異常なし。結果は極度の疲労による睡眠だつてさ。しかし、今日の内に目が覚めて良かったよ。また五日間も寝てたら授業に追いつかない……。

「無事で良かったぜ。そうそう、千冬姉が光輝のこと呼んでたぜ？　大丈夫なら来てくれって言つてたぞ」

お母さんが？　一体何だろうか。

「食べ終わってから行つてみるよ。ありがとう、夏兄」

「気にすんなよ。家族なんだからさ」

「来たか。入ってもいいぞ」

「し、失礼します……」

光輝は千冬の部屋に入る。学校内だからその姿は緊張しているように見える。

「そんなに緊張しなくていいさ。家族として話したい。いいな？」

「え、うん。それなら気が楽だよ」

光輝はそう言われ気を楽しむ。二人きりで話すことは慣れているのだが、この日はなぜか空気が重い。だが光輝はあえて気にしないようにする。

「光輝、どんな苦難も乗り越える勇氣はあるか？」

「い、いきなりどうしたの？ 何かあったの？」

「……どうかと聞いているんだ」

千冬が一方的に話を無視する。光輝からしてみれば珍しいだろう。今までちゃんと話を聞いてくれていた母が一方的なのだ。光輝は戸惑いながらも答える。

「もちろんだよ。僕は出来ることを頑張る」

「……それでこそ光輝だ。今日のあのISのことだが、あれはガンダムに魅かれて現れたISだ」

いきなり何を言ってるんだ？ 千冬がそんな冗談を言う人ではな

いのは分かつてるが、光輝は混乱している。

「いきなりそんなこと言われても分からないよな。まあ束の言っていたことだから嘘ではないとは思うが……」

束は光輝に ガンダムを与えた張本人だ。それとも ガンダム自体が光輝に反応したと言うべきか。ともかく束は光輝の人生を変えたといっても過言ではない。

「光輝が ガンダムを受け取った日に束が言っていたんだ。いつか必ず ガンダムに魅かれて『赤い彗星』が来ると」

「今日現れたISがその『赤い彗星』なんだね。でもハイパーセクターの情報だとサザビーってISだったけど？」

「そうなのか？　じゃあ赤い彗星はサザビーってことになるのか？

……」

「でもさ、もう倒したんだから大丈夫でしょ？」

千冬はゆっくりと首を横に振る。

「サザビーのコアが無かったんだ。考えられるのはコアが自分の意志で装甲から抜け出したとしか考えられない」

光輝は驚きを隠せなかった。まさかコア自身が意志を持って逃げたとも言っのか。

「コアは自己進化していく。それを考えたら不思議ではないだろう？」

確かにコアは自己進化することが確認されている。しかしコア自身が意志を持つというのはまだ例がない。

「もしまたあれが来るとしたら……大変なことになるよ」

サザビーの性能は光輝が一番分かっている。圧倒的な火力と見た目からは想像できない機動力。あれは今までのISの常識を超えているだろう。もしパワーアップしてまた現れたとしたら、今度はただじゃ済まないのは確実だ。

「一夏から奴のことを聞いただけでもかなりの性能なのは分かる。ISの常識を覆しているだろうな」

「……でもやるしかないんだね。サザビーはガンダムが狙いなら、僕自身が決着をつけないといけない日がいつか来るなら、僕も絶対に強くなつてやる！ みんなも守る！」

「それでこそ、光輝だ」

千冬は微笑みながら光輝の頭を撫でた。最初はびつくりした光輝だが素直に受け止めた。千冬や一夏、人から感じる心の暖かみがあるからこそ光輝は強くなる。力だけがすべてではないのだから。

翌日の朝、僕は普段通りに通学することが出来た。

別に体調不良ってわけでもないけど辛いことが一つ。昨日は寝れませんでした……。

どうも僕が気絶(?)してから、7時間超は経っていたんだよ。そのせいで昨日の夜は寝ることが出来なかった。寝たのがいつも起きる時間の30分前。これは辛いよ、うん……。

「今日から本格的な実践訓練を始める。訓練機ではあるが」



HR前のお母さんの話なんだけど、眠くてそれどころではないんだ。くうく、寝て楽になりたいよ……。

「くくえええええっ！？」「くく」

そんなクラス中のざわつきに僕は目が覚める。それほどこのクラスの子の声は大きいってことか。で一体何の話？

そんな中、教室の扉が開き、二人の生徒が入ってくる。また転入か何かなの？ 最近被るなあ。

「失礼します」

「……………」

その二人を見てざわめきがなくなると共に、僕は目を疑った。いや、ぼくだけじゃないだろう。

だって二人の内一人が 男子だったのだから。

## 第九話　決意と転校生！？（後書き）

次からは本格的な二巻です。小説とアニメを取り入れようかなと思っています。

## 第十話　こんな一日（前書き）

更新遅くなりました。仕事の忙しさが増してきて大変な日々が続いております……。でも出来るだけ頑張りますのでお願いします。

## 第十話　こんな一日

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、デュノアくんはにこやかな顔でそう告げ、一礼する。

それにあっけを取られたのは僕を含めたクラス全員だった。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国より転校を」

人懐っこそうな顔。礼儀正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金で、それを首の後ろで丁寧に束ねている。身体はスマートで制服がよく似合っている。

貴公子のような印象で、嫌味のない笑顔が眩しい。

でも何かしらの違和感を感じるのは気のせい？　何か隠しているような、ないような……。

「きゃああああああ

っ！」

耳が、耳がああ！　クラスの中から発せられた声は衝撃波に変わった。それ程、恐ろしいものなんだよ。

「三人目の男子！」

「しかも守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~~！」

うああ……耳が痛い！ ここの女子は男子に飢え過ぎだよ！

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

その一言でクラスが鎮まった……お母さんすごいよ。でもめんどそう言い方だったなあ。こういう反応が嫌なのかな。

「まだ自己紹介は終わってませんからね！」

もう一人も異様な容姿なはず。まあ僕から見たらどうってことはないけど。

輝くような銀髪。それは白にも近く、腰近くまで降ろしている。綺麗だけど、整えてるわけでもなく、ただ伸ばしてるって感じなのかな？ そして左目に眼帯。医療用とかじゃなくて、軍隊で使いそうな黒い眼帯。右目は赤色だけど、でも冷たさしか感じない。髪といい、眼帯といい、冷徹な彼女にはよく似合ってるよ。

『ドイツの冷氷』。彼女はそう呼ばれていた。

「……………」

な、何か喋ろうよ。せめて名前をだけでもいいから。重い空気は嫌いだよ……。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

お母さんには素直だな。みんなビックリしてるよ。異国の敬礼

を向けられたお母さんはまた違う意味でめんどくさそうな顔をする。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」  
「了解しました」

そう答えるラウラは、ぴつと伸ばした手を身体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。　懐かしいな。ドイツの一年間はけっこう長かったね。

ある事情でお母さんは一年ほど、ドイツで軍隊教官として働いていたことがある。僕も付いて行ったよ。でその時にラウラに出会ったのか。あれが13歳の時だから一年たって、ドイツから日本に帰って来た時に束さんに会って　ガンダムと出会ったんだよね。いやゝ懐かしい。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」  
「……………」

クラスメイト達の沈黙。無口なのは相変わらずだけど、もうちょっと何か言えればいい…………んじゃない？

「あ、あの、以上…………ですか？」  
「以上だ」

空気に耐えれなくなった山田先生が精一杯の笑顔で訊くけど、返ってきたのは無慈悲な答えだけだった。うわゝ、これは気まずい…………。  
そんなことを考えているとラウラが夏兄に激しい敵意を向けていることに気付いた。

「！ 貴様が」

ラウラが夏兄の席に歩いている。まさか……！  
すぐさま僕は立ち上がり

パンッ

「……お前は」

ラウラが夏兄に平手打ちする前に立ち上がり、手首を掴んで阻止。  
いきなり暴力なんてダメだって！

「いきなり人を殴るなんて酷いよ」

「ふん、お前ごときに言われる筋合いはない。離せ」

激し過ぎる敵意を向けてくるけど、ここで逃げるわけにはいかな  
い。

「離さないよ。そしたらまた殴ろうとするんでしょ？ 家族を守る  
のは当然だから」

「……私は認めない。お前達二人があの人……！」

ラウラは無理やり僕の手を放し、席に向かっていく。ふう、何と  
かなった……。

こうして二人の転校生を迎えることになった。

「くう、負けるなんて……」

3人目の男子、デュノアくんが転校してきたことで女子の勢いも増してきた。やはり男子に飢えているこのIS学園、男子にとってはある意味危険だ。

そんな中、部屋割も変える必要があるらしく、じゃんけんの結果、夏兄とデュノアくんの相部屋。そして僕が一人部屋、という結果になった。今じゃ一人寂しく部屋で暇をもてあそんでるよ。

「開けておくれ」

どんどん、と扉を叩く音と声が聞こえる。大人数の女子が乱入しないように部屋の鍵は常に閉めるようにしている。まあ今回は一人だけっぽいね。

「その声は……のほとけ 布仏さん？」

「そのとおり！ てことで開けておくれ」

どんな理屈だよ。まあこの人なら大丈夫かな。  
扉を開けるとそこには

「やー、おりむー？。一緒に夕食しようよ」

寮にいるときは常にダボダボのパジャマを着ている、のほとけ ほんね 布仏本音さん。自分のサイズより2つぐらいはでかいナイトキャップがズリ落ちては、余っている手で直そうとする。

「うん、いいよ。てかその愛称は決定なの？ 普通に織斑でいいんだけど」

「決定なのだよ。普通じゃおもしろくないしね」

ちなみに夏兄は『おりむー？』。この人の考えてることはよく分



からない。センスがないに等しいと思う。

「まあいいや。行くなら夏兄達も誘っていいよ」

「えゝ、二人きりでいいよー」

布仏さんは僕の腕を無理やり掴み　けっこう力が強いぞ！  
りほどけないよ……　そのまま食堂に連れ去られました。　振

「疲れた……食べる時ぐらいゆつくりしたいのに」

食堂で夕食を取ったわけだけど、僕と布仏さんの周りに女子が集まり過ぎて潰されそうになった。一年はもちろん二、三年の先輩たちもいたわけで……けっこうな人だった。

「はああ、考えただけで疲れる。忘れよう……」

こんこん

なっ！？　またノックが！　一体誰だよ……。

「光輝、いるか？」

その声の主は篤さんだった。この人なら大丈夫……大丈夫なはずだ。

扉を開け、篤さんを迎え入れる。篤さんならまだ気が楽かな。

「珍しいね、篤さんが相談なんて。僕で力になれるならいいけど」  
「いや、光輝にしか言えないことだから……」

「そうなの？ で相談って何？」

「う、うむ。実はな」

篤さんの相談を聞いたけど、これはまた大胆な……。でも篤さん  
と言えば篤さんらしいのかな？ でもどうなることやら……。今日  
はいろいろなことがあったけど、最後の追い打ちと言ってもいい程  
だよ。

## 第十話　こんな一日（後書き）

見て分かるように作者は表現の仕方が不器用ですwww  
何かアドバイスがあれば……お願いします……！

## 第十一話 もう一人のガンダム（前書き）

今回は皆様を考えて下さったオリキャラの一人目を出します。  
こんな感じで大丈夫だろうか……。

## 第十一話 もう一人のガンダム

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解してないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応、分かっているつもりだったんだが……」

シャルルくんが転校してきて五日たった土曜日。シャルルくんとはすぐに仲良くなることが出来た。性格や見た目とは裏腹にISの腕は中々だったよ。

量産機である『ラファール・リヴァイヴ』をシャルルくん専用にした『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』がシャルルくんのISだ。

通常のリヴァイヴとは違い、背中に背負った一对の推進翼は中央部分から二つの翼に分かれ、より機動性と加速性が高くなっている。アーマー部分もシェイプアップされていて、大きなリアスカートがついている。そこにも小型の推進翼があつて、姿勢制御に使われているようだ。

他にも違いはあるが、最大の違いは武装の多さだろう。基本装備をいくつか外して、拡張領域を倍にしてある。故に武装を増やすことができ、カスタム？は二十もの装備があるという。

オルコットさんや凰さんにしても普通のISの武装数はだいたい五つぐらい。多くて八つぐらいです。ガンダムでも七つぐらいだよ。そう考えたら二十ってすごいよね。

「ふん。私がちゃんとアドバイスしてるだろうが」

「あんなにわかりやすく教えてあげたのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

シャルルくんは教えるのも上手い。この三人が教えるよりいいだろ

うね。実際に遠距離武装を使わせてみるのも一つの方法か。思いつかなかったなあ。

っ、この敵意はまた……

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代機だ」

「まだ本国でのトライアル段階って聞いたけど……」

敵意を感じたと同時にアリーナ内がざわつきはじめている。その方向に振り向くと

「……………」

もう一人の転校生　ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒさんがいた。

誰とも話そうともしないし、常に一人であろうとする。まさに『ドイツの冷氷』と呼ばれるだけはある。まさに孤高の女子ってね。

「織斑光輝、私と戦え」

ISのオープン・チャネルで声が届いてきた。この声は間違いなくボーデヴィツヒさんだね。いやゝ久しぶりの会話ですか。

「嫌だと言ったら？」

「ならば　戦わざるを得ないようにしてやる！」

ボーデヴィツヒさんは漆黒のISを戦闘状態にシフトする。刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いたと思ったら

ギョオオオオ！

いきなりボーデヴィツヒさん目掛けて極太のビームが放たれた。それを難なく避けるが、かなりの熱量なのかビームに近かった一部のISのアーマーが溶けかけている。

「いきなりゴメンね。光輝くんに用があるんだよ」

オープン・チャネルで話しかけるのはビームを放った人物だろうけど、誰なの？

ビームが放たれた方向から一機のISが近寄ってくる。

どこかしら ガンダムに似ているのは気のせいだろうか？ 額のVアンテナなんか似てるぞ、うん。右手には大きめのライフル砲門が2門あるのか。珍しいな 背中にはかなり大きいバックパックが……。

MSZ-010、ZZガンダムと断定。火力はサザビーと同等かそれ以上。その代わり機動性、運動性は従来のISに比べると少し低くなっている。額に装備されたハイメガキャノンは広範囲、至近距離ではあるがその熱量は凄まじく、回避しても絶対防御を超えて装甲が溶けかけてしまうことがあります。しかし、チャージに時間がかかる為、連射は不可能です。

さっきの極太ビームのことか。確かにボーデヴィツヒさんのISの一部が溶けかけてる。なんて威力だよ！ だけど驚くのはそこだけじゃない。

「君のISもガンダムって言うんだ。うゝん、ガンダムって何を意味するんだろ？」

ZZガンダムの少女はこちらを向いて質問する。確かにガンダムってどんな意味なんだろう？

「何しに来たのよ？ エリス」

「だから光輝くんに用があるの。ってことでちょっと着いてきてくれないかな、光輝くん？」

鳳さんがいう少女 エリスさんはどうも僕に用があるらしい。  
でもその前に……。

「貴様……！」

ボーデヴィツヒさんがお怒りだよ。それに気付いたのかエリスさんはボーデヴィツヒさんの方へ向く。

「何のつもりだ」

「何のつもりって、私は光輝くんに用があるってさっきから言ってるじゃない。てなわけでちょっと来て」

エリスさんは僕の手を掴んでアリーナから出ようとする。全員あつけを取られたのか追ってくる人は誰も居なかった。僕は一体どうなるのさ！？

「一体、用ってなんなの？」

あれからすぐに着替えて、エリスさんの部屋に連れ込まれていた。男女で二人きりなんて……うう。



「ん〜ちよつと話がしたいんだよ」

アメジストの瞳に肩まで伸びているオレンジの髪で羽根の髪止めをしている。優しそうな感じで初対面でも嫌な感じはしない。

「その前に自己紹介が遅れたね。私はエリス・リムスカヤって言います。一応、四組の専用機持ちの一人ってことになってるのかな？ よろしくね！ あと呼び方は「エリス」か「リム」でお願いします」

邪気の全くない笑顔で自己紹介を終えるエリスさん（こっちの方が呼びやすいな）。専用機っていうのはZZガンダムのことかな。

「えっと、織斑光輝……です。こんな容姿だけど男だから……よ、よろしく」

突然エリスさんが近付いてくる。え！？ 何なんだよ！

「ふ〜ん、噂通りの男の娘だね。顔も赤くなっちゃって、可愛いよ」  
噂通りって……可愛いだなんて……僕って一体……。

落胆しているとエリスさんが苦笑いしながらもつと顔を近づける。

「そう落ち込むことないよ。光輝くんは光輝くんでしょ？ 容姿がどうこうじゃなくてさ」

「え？ う、うん。ありがとう」

そんなこと言われたのは夏兄以来だよ。嬉しいな。  
エリスさんは離れて僕に質問をした。

「さっそくなんだけど、光輝くんの ガンダムってどこで手に入れたの？」

「そうなんだ。篠々乃博士が関係しているなんて」

「僕もよく分からないんだよ。どうやって開発したのかはね。でもエリスさんのZZガンダムも凄いよね。自然発生なんてさ」

あの質問をした後、お互いのISについて話し合っていた。エリスさんのZZガンダムはサザビーが乱入してきた次の日にいつの間にか持っていたものなんだってさ。

「私も驚いたよ。でも違和感はなかったんだよね。まるで始めから持っていたような感じだったの」

「うーん、謎だねえ。そういえばなんで僕のISが ガンダムだった分かったの？」

「さっきアリーナで反応したのもあったけど、鈴に教えてもらったからね。『織斑光輝つても確か ガンダムって名前だったわね。一体ガンダムって何よ』って」

へえ、凰さんか。エリスさんて顔が広いんだね。でも分かるかな。この明るくて人懐っこい性格だし、一緒にいて楽しいよ。

「でエリスさんはZZガンダムで模擬戦とかしたことあるの？」

「一回だけクラスの友達としたけど、制御が難しくて途中で止めたの。性能はかなり高いんだけど制御が難しいんだよね。だから今は調整中なんだよ。ISのOSを自分なりに調整してやっと今日まともに操作できるようになったんだよ。でもまだ一つ問題がある」

「問題って？」

「ハイメガキャノンの出力調整だよ。普通に打ったら避けても装甲が溶けるからさ、さすがにやばいなんて……あれでも一応リミッタはしてるんだけど」

「ってことは、まだ出力が上がるってこと！？ 避けただけで溶けるのに、あれ以上の威力ってどうなるんだ！？」

「でもあれってシールドエネルギーをかなり持っていかれそうだね……。いつそのこと使うの止めたら？」

「そうだよ。でもあの武器もZZの一部なんだからさ、使わないとダメだよ。いざって時にだけになるけどね」

エリスさんはいつぱいの笑顔で言う。ZZガンダムを大切にしているんだね。

不意にエリスさんが時計を見る。どうかしたのだろうか？

「そろそろルームメイトの子が戻ってくるから今日はこのくらいかな」

「え、そう……なんだ。じゃあ帰ろうかな」

「騒ぎになっていいのなら今日一日部屋に居てもいいよ？」

はい！？ 何を言ってる……！

「い、いいいい、いや！ 大丈夫だよ！」

「冗談だよ。いやゝ反応が可愛いね。また話そうね。今度はIS以外のことも……ね？」

エリスさんの笑顔って可愛いなあ。さっきまでからかわれてたのに、どうでもよくなってくるよ。

「うん、またね。手伝えることがあつたらなんでもするから！」

そう言つて僕はエリスさんの部屋を後にした。しかし、ガンダム  
つて一体どんな意味なんだろう？ 知つてそうな束さんにでも訊け  
たらいいな。

## 第十一話 もう一人のガンダム（後書き）

十河さまの考えて下さいましたオリキャラです。

Zガンダムについてはこちらの方で性能などはまた書くつもりです。ご協力ありがとうございました。

しかし、こんな感じいいか本当に不安です……。

もっと上手く表現が書けるようにしないと。

## 第十二話　止められなかった衝動（前書き）

さて更新しました。

展開をどうするか迷います……。

## 第十二話　止められなかった衝動

月曜日の朝、こんな噂が流れていた。

「学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際ができる」って噂だね。当の本人は知らないみたいだけどさ……。

今月の月末　つまり6月の終わりに学年別のトーナメントが開かれるんだ。お偉いさまとかが来て三年はスカウトがかかっているし、二年は一年間の成果を測るものかな。一年はあまり関係ないけど、もし優勝したらいろんなところからスカウトが来るだろうね。僕はあまりそういうのは好きじゃない。

で、こんな噂が流れているのは箒さんが原因に違いない。

「箒さん、ちょっと話が……」

「う、うむ……」

僕は教室にいた箒さんと呼んで、屋上へ移動した。屋上なら人気も少ないしね。

屋上に着くと、箒さんは大きなため息をついた。まあ仕方ないよね……。まさかあんな噂が流れてるんだから。

「告白の時の声が大き過ぎたんだよ。全部ではないけど、告白の一部が聞こえた生徒が早とちりして、こんな噂が流れたんだと思う」「そのようだな……はあ」

分かっている人は分かっていると思うけど、この前の箒さんの相談はこのことです。時は遡ってシャルルくんが転校した夜の事になるのかな。

「う、うむ実はな、一夏に告白したのだ……」

……？ 篤さんは何て言った？ 「一夏に告白したのだ」って？

「ほ、本当に！？ 夏兄の反応は！？」

「ま、待て！ 話を最後まで訊いてくれ……正確には今度の学年別トーナメントで私が優勝したら付き合ってもらう、と言ったんだ」

篤さんはリンゴみたいに顔が赤くなっている。なるほどね、篤さんらしいっちゃらしいのかな。

「言えただけでも凄いよ。さすが篤さん！」

「だ、だが一夏が気持ちに気付いてくれるかどうか心配なんだ……」

あゝ確かに。夏兄は恋愛には疎いからね。篤さんが心配するのも分かります。

「でもその気持ちをぶつけただけでも大きな一歩だと思うよ。付き合う付き合わないじゃなくてね」

「ありがとう、光輝。だが少し声が大きかったかもしれないのだ。もし誰かにでも聞かれたりしたら……」

これはあれなのか？ 二人だけの秘密の関係を望んでいるのか？ 十代乙女は純情ですなあ。

「その時はその時で対処するしかないよね。大丈夫と信じよう！」



回想終わり。

「でも篤さんが優勝したらなんの問題もないよ？　頑張らなきゃ！」

ここでチャイムが鳴る。授業に遅れたらお母さんに頭を叩かれる！　それだけはなんとか避けよう！

「光輝、ありがとう！　さて急ごうか！」

「うん！　さすがに叩かれたくないしね」

良かった。いつもの凜とした篤さんに戻ってくれた。それでこそ篤さん！　応援してるから頑張つてね！

「はー。この距離だけはどうにもならないよな……」

「仕方ないよ。本来は女子しかないんだからさ」

授業終了後、僕と夏兄はトイレを目指して中距離走をしていた。もともと女子高なこのES学園は男子トイレがほとんどない。まあ教員が使うぐらいで設置数は少ないのです。

もちろん、帰りも教室まで中距離走。けっこう疲れるんだよ……。体力不足なのかな？

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ……」

この声はボーデヴィツヒさんとお母さん？　曲がり角の先から二

人の声が聞こえる。夏兄も気になったのか僕達は二人の話を隠れて聞くことにした。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

ボーデヴィツヒさんが声を荒げるなんて珍しい。お母さんの今の仕事についての不満とかをぶつけてるようだった。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力の半分も生かせません」

「ほう……」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が低く、危険感到疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしてる。そのような程度の低いものたちに教官が時間が割かれるなど」

「そこまでにておけよ、小娘」

「っ……！」

お母さんの怒り一色の声色。ボーデヴィツヒさんもその覇気にすくんでしまったようだ。ここまで覇気を感じたのは久しぶりだ。正直、今のお母さんは怖い……。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは、恐れ入る」

「わ、私は……」

今、ボーデヴィツヒさんが感じてるのは恐怖でしかない。圧倒的

な力の差とかけがえのない　自分の恩人に嫌われるという恐怖に……。

「さて授業が始まるな。教室に戻れよ」

「……………」

ぱつと声色を戻したお母さんが急かして、ボーデヴィツヒさんは黙ったままその場を後にした。って僕達もそろそろ……。

「その兄弟。盗み聞きか？　以上性癖は感心しないぞ」

「な、なんでそうなるんだよ！　千冬ね（おかあさ）」

ばしーん！　ばしーん！

「学校では織斑先生だ。全く……」

「は、はい……」

僕達は出席簿で頭を叩かれた。しかも良い音だ。けど……痛いよ。

「さつさに行け。授業に遅れても知らんぞ。織斑弟ならまだいも織斑、今のままじゃトーナメント初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかってるって……」

「そうか。ならいい」

ニヤリと見せる笑みは今だけは家族として見ているようだった。そしてお母さんは僕達に背を向けこの場を後にした。

「自分の思いや信念を貫くのは難しい。だがそれで人は変わっていきける」

そんな声が聞こえた気がしたが、僕にしか聞こえてなさそうだった。一体何だろうか？ でも優しい感じがしていた。

「計算上では完璧なはずだから安心してよっ」

「でももし間違ってたら大変なことになるよ？ 前みたいに装甲が溶けるのはよろしくないしさ」

「大丈夫！ 大丈夫！ なんとかなる！」

時は変わって今日の放課後。エリスさんの頼みでアリーナに向かっている僕達。ZZガンダムのハイメガキャノンの調整が完璧（計算上は）になったらしく、その相手をして欲しいと頼まれたのである。正直……不安で堪らない。本当に大丈夫かな……。

そしてアリーナに着き、異変に気付く。どうも騒がしい。二日前にも騒がしかったけど今度は何なんだよ。

「鈴っ！」

一足先に観客席に着いたエリスさんがそう叫んだ。続けて僕も観客席からフィールドを見る。

セシリアさんと鳳さんのISがボロボロだ。しかもその状態でボーデヴィツヒさんのIS状態が二人を殴り続けていた。

「おおおおっ！」

別の場所から聞こえたのは夏兄の声だった。零落白夜を発動させ、フィールドを囲んでいるシールドを消滅させ戦いに介入する。

「エリスさん！ ハイメガキャノンを打って！ シールドを壊せる

「ぐらいの出力で！」

「わ、分かった！」

エリスさんはすぐにZZガンダムを起動させ、ハイメガキャノン  
を放つ。それがどのぐらいの出力か分からないけど、見事にシール  
ドを消滅させることが出来た。

「ありがとうエリスさん！ 行ってくる！」

「ちょ、ちよっと待って、光輝くん！」

僕は抑えきれない怒りを放ちながらフィールド内へ駆けていった。

「やめろおお！」

ボーデヴィツヒさんと動きを止められている夏兄の間にビームラ  
イフルを連射させ、間に入る。

「夏兄は下がって。この人と話したいから」

「光輝……分かった」

夏兄は素直に下がってくれた。シャルルくんも夏兄のところに行  
き、セシリアさんと凰さんの様子を見る。

「今度はお前が邪魔をするのか。で何の用だ？」

「何の用じゃない！ セシリアさんと凰さんをあそこまでする必  
要ないだろ！？ あれじゃあ、命が危なくなる！」

「ふん、そんな覚悟だから命がどうこういつのだ。ISを起動させ  
る以上、命を捨てる覚悟は常に持つておくものだ」

「平気で痛めつける奴に覚悟がどうこう言えるかつ。絶対に許さない！」

友達を　仲間をここまでボロボロにしてましてや、命さえ危なかったんだ！　絶対に潰してやる！

僕は怒りに身を任せてボーデヴィツヒさんに接近する。相手も応戦するために接近してくる。ボロボロにしてやるっ！

「止める！　憎しみの為だけの戦いは死人に引き込まれるぞ！」

また聞こえた謎の声も無視して僕はビームサーベルで切りつけ

ガギンッ！

激しく響く金属音に僕とボーデヴィツヒさんの武器が止められた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「お、お母さん！？」

そこにいたのは予想外の人物だった。170?ぐらいあるIS用近接ブレードを二つ持つお母さんだった。ISの補佐なしで軽々と扱っているなんて……凄過ぎる。

「模擬戦をするのは構わん。が、シールドが消滅する事態にまでなるなら別だ。この戦いの決着はトーナメントでするんだな」

「教官がそうおっしゃるなら」

「なんで……！」

仕方なく僕はISを解除させた。ボーデヴィツヒさんも同じく解除させ、光の粒子が飛び散る。

「織斑もデュノアもいいな？」

二人は「はい」と返事をする、お母さんはアリーナ内の全生徒に向かって言った。

「学年別トーナメントまでの私闘を一斉禁ずる！ 解散！」

お母さんが強く叩いた手はまるで銃声のようだった。

「織斑弟、私の部屋にすぐに来い」

そう言ってお母さんはアリーナを後にした。

## 第十二話　止められなかった衝動（後書き）

ここでお願いがあります。

どうかアドバイスをください……！

作者は文筆向上を目指しています。なにより皆様の意見は何よりの力になるからであります。

どうかお願いします！



### 第十三話　意味とパートナー（前書き）

やっと更新です。  
それではどうぞ。

### 第十三話　意味とパートナー

「怒りに我を忘れてラウラに挑むか。お前のことだ、オルコットと凰がボロボロなのを見て冷静さを失ったんだろ？」

「……………」

アリーナの事件が終わって織斑先生　お母さんの部屋に呼ばれた僕は一対一で部屋にいる。自分のやったことに後悔はしてないよ。許せなかったから。

「光輝、これを持って」

そう言われて手渡されたのは日本刀だった。以外にも重く、僕の手では片手で持つのは難しかった。でもなんでいきなり日本刀を？

「それが人を傷つけることに対する重みだ。お前ならこんなことしなくとも分かっていると思うんだが……」

お母さんはそれ以上なにも言わなかった。日本刀の刃の部分に僕の顔が写るが、その表情は歪んで見えた。

あのまま、ボーデヴィツヒさんと戦ってたら僕は唯の　戦闘狂になっってしまったのかもしれない。相手を瀕死に追い込むのが楽しみになって、何も感じなくなってしまうところだったのかもしれない……………。

考えているとお母さんは僕の持っていた日本刀を取り上げる。

「ゆっくり考えるんだな。そうそう、今度のトーナメントは二人組での参加が必須となるのだが、お前はリムスカヤと組め」

いきなり話題が変わったのは気にしないように。気にしたら負けなんだ、きつとそうだ！……話を戻しましょう。

二人組が必須か。しかもご指名ですか。

「なんでまたエリスさんと？」

「別に大した意味じゃないさ。あいつのISも『ガンダム』だろ？ それ繋がりだな」

「それなら夏兄か、シャルルくんが良かったな……」

「あの二人はもうパートナー同士だぞ？」

ま、まじか……！ まさかもうそこまで決まってるなんて。

「という予想だ」

「な、なんだ。それなら」

「でもリムスカヤと組んでもらう。少なくともリムスカヤはお前と組みたいようだがな」

エリスさんが？ うーん、どうしようかな……。お母さんを見ると心なしか笑ってるようにも見える。

「悩むくらいなら本人と話してみるんだな。せつかくお前と組みたいと言ってるんだ、話ぐらい聞いてみたらどうだ？」

「は、はい。そうしてみます。では……」

そう言っ僕は部屋を後にしようとするが

「おっと、気をつけろよ？ 一年の女子は今頃お前を探すのに必死なはずだからな」

「だ、大丈夫ですよ」

「とは言ったものの、さてどうしようか……」

部屋を後にして保健室を目指している僕に多大な障害に阻まれていた……！

今度のトーナメントが二人組なのが条件なのは話しました。障害であるこの女子達はどうか僕を探して見つけてパートナーにするというのを盗み聞きました。

お母さんの部屋を出て、感じたのは女子の異様なプレッシャーだった。欲望に取り込まれているというか……とりあえず、捕まったら終わってしまう気がしたのは言うまでもない。

障害さえなければすぐに保健室に行けるのに……、注意しながら遠回りして30分！この角を過ぎれば保健室だけど……。角に隠れながら様子を見る。

「保健室の前で女子が五人待ち伏せか。さてどうしよう……」

早くしないと、ここも危ない。くっ、何かいい手はないか！？

「お前達、何をしている？」

「お、織斑先生！？」

なんと別の場所から現れたのはお母さんだった。お見舞いかな？

「一体何の騒ぎだ？　うるさくて敵わんぞ」

「そ、それはですね……ええと……」

五人の一人が説明しようとするが、お母さんの覇気にやられてるらしく言葉が続かない。

「まったく、なんでもないならさつさと寮に戻れ。邪魔だ」

言葉にちよつと棘が入ってるなあ。イライラしてるのが分かります……。

「……し、失礼しました!」……」

五人は逃げるようにその場から立ち去った……。さすがお母さんだ、凄い……。

しかし、五人が居なくなってもお母さんは保健室に入ろうとしない。どうかしたのだろうか？

「光輝、さつさと行け」

そう言ってお母さんは何処かへ行ってしまった。まさか助けてくれたのか!? ありがとうお母さん! 助かりました! ダッシュで保健室に向かう。ここまで来れば大丈夫!

「あゝ、おりむー? だゝ」

その声の方向 後ろを向くと、仏布さんを含めた内のクラス全員がそこにいた……。

「さあさあ! 私と……!」

「光輝きゅん! 私と組んで!」

「私とやろっよ!」

なんか危ないこと言ってる人がいる! だが保健室まで一直線なんだ! 全力疾走ならいける……!

僕は全力で保健室を目指した。入ってしまったえばこっちのものだよ。ドアノブに手をかけ、保健室内に入る。はあ……はあ、息切れが激しいよ。でもこれで大丈夫だ！ 安心からか一気に疲れが出た僕は扉の前でへたり込んだ。

「また騒がしくなってるみたいだけど……って光輝くんっ！？ どうしたの？」

「クラス相手に、頑張ってきました……はあ、はあ、はあ」

こっちの様子に気付いたのが、夏兄、シャルルくん、ベットで起き上がっているセシリアさんと鳳さん。そしてパートナーになりたいたと言っている本人 エリスさんがそこには居た。

ドカンッ！！！！

「観念だよーおりむー？」

「光輝きゅんーここ開けてえ」

「なんで逃げるのよ！ 私とやるのは嫌なの！？」

もたれかかった保健室の扉がへこんだ……。その衝撃で僕は数メートル飛ばされてしまった。これがクラスの女子が団結した力だつていうのか……！

怖くなった僕は咄嗟にベットの下に隠れた。

「夏兄、助けてよ」

「わ、分かった。なんとかしてみるぜ……！」

そう言っただけで夏兄は扉の前に立つ。今もなお扉に衝撃が加えられている。

「みんな、ここは保健室なんだから静かにしろよな！ それに光輝は窓から逃げたぜ」

扉越しに声をかける夏兄。それを聞いて納得したのか衝撃は止まり、移動していく足音が聞こえる。た、助かったあゝ。

「やっぱり夏兄は凄いなあ。一言でみんなを止めるんだもん」

「正直、自信なかったけどやってみるもんだな。ってもう出てきても大丈夫だろ」

「そ、そうだね。ふう助かったゝ」

ベットの下から出た僕は改めてことの収束したことに安堵を感じた。

そしてベットにいる怪我人の二人に声をかける。

「二人とも今度のトーナメントは大丈夫なの？」

あれほどの損傷なら修理にかなり時間がかかるはず。トーナメントに間に合えばいいけど……。

「さっき山田先生が来て、二人の損傷レベルがCまでいってたから今後を考えて今回のトーナメントは出場禁止なんだよ」

そう言ったのはシャルルくんだ。そんなことって……。余計なことを聞いてしまったな。

「ごめん二人とも。何も知らずに聞いて」

「私たちなら大丈夫ですわ！ この雪辱は必ず晴らしてみせますから！」

「次は負けないわよ！」

悔しさと復讐を感じる。でも復讐なんてやったら……。

「またいつか挑むのはいいと思うよ。でも、復讐に取りつかれちゃダメだよ。周りが見えなくなってしまうから」

一気に空気が重くなってしまいうけど、これは言っておかないといけないことだから。

「分かりました。肝に命じておきますわ」

「けっこう、難しい話ね……。まあ覚えておくわよ」

おお、あの二人が真剣に話を聞いてくれたよ。セシリアさんなんか心なしが顔が赤いし、どうかしたのだろうか？

「それはそうと光輝、今度のトーナメントは誰と組むんだ？ 俺はシャルルと組むことになったんだけど」

ッ！ お母さんは預言者なのか！？ 本当に組んでたよこの二人……。  
でも僕はもう決めてるから大丈夫さ。

「そのことなんだけどね、エリスさんと組もうかと思ってるんだよ」  
「わ、わたし！？」

「うん。なぜか知らないけど、織斑先生に直接頼んだんでしょ？  
組むのは良いんだけど理由が知りたいと言っか……」

エリスって大胆ねえ、と凰さん。そして顔を赤くさせるエリスさんと憤慨しているセシリアさん。三人の違う表情を見ると面白いと思う自分がいます。



「はあく光輝。そういうのは聞かないのが優しさってもんだよ?」  
「え? そうなの? うーん、シャルルくんがそういうなら……」

突然シャルルくんに注意されてしまった。よく意味が分からないけど、聞かない方がいいなら止めておこう。無理やり聞いて相手を傷つけたくないし。

「エリスさん、今度のトーナメント僕と組んでくれますか? 嫌ならそう言ってもらっても構わないから」

「私が頼みたいくらいなのに……。是非、私と組んでください!」

最初の方はよく聞こえなかったけど、僕と組んでくれるようだ。パートナーが見つかって良かったよ。

「じゃあ優勝目指して頑張ろうか! でもその前にハイメガキャノンの調整を完璧にしてくちゃね」

「あはは、そ、そうだね。まずはそこからだね」

こうして今度のトーナメントのパートナーはエリスさんに決まった。

しかし、さっきからセシリアさんがこちらをすごい形相で睨みつけている。

「織斑兄弟はなぜこうも鈍感な方々なんでしょう……」

それってどういう意味だよセシリアさん!?

### 第十三話　意味とパートナー（後書き）

うーん、光輝×エリスでしょうかね。  
まああと一人ぐらいは立てますか。

## 第十四話 二人を結ぶ羽（前書き）

遅れました、十四話目です。それではどうぞ。

## 第十四話　二人を結ぶ羽

時は進み、トーナメント一週間前の放課後。僕とエリスさんは第三アリーナで模擬戦の準備をしていた。ハイメガキャノンの調整も完璧になり　アリーナのシールドエネルギーを消滅させるのを100%とすると、今は30%程度。装甲を溶かすのが60%の出力でした　絶対防御を発生させるかどうかの瀬戸際だ。それでもダメージは大きいけどね。まあ溶かすよりかはいいでしょう……。

今このアリーナにいるのはISを纏った僕達だけだ。ハイメガキャノンの調子が狂った時のことを考えて他の生徒は怖がって入ってこないらしい。確かにハイメガキャノンの威力を知ってる人からしたらそうなるのかな。

「エリスさん、準備はいい？」

「大丈夫だよ。いつでもどうぞ！」

そう言っ僕達は身構える。いつも明るいイメージのエリスさんだけど戦闘時にはかなりの気迫を感じる。その静かな環境を先に破ったのはエリスさんだった。

バックパックに2つ装備してある21連装ミサイルランチャーを発射してきた。僕はそれを素早く回避しつつ頭部バルカン砲でミサイルを破壊する。このミサイルはホーミング力が高いから避けるのが辛い。こうしてバルカンで破壊できるけど何個かは壊せずに当たってしまう。ホーミング力の高さもあるけど、大部分は反応はできるけど身体が追いつかないというのは本音です……。

更にエリスさんはもう片方のミサイルランチャーを発射し、2連

装ビームライフルまで撃ってくる。エリスさんの射撃精度はそこそこだ。でも今はビームライフルではさんでミサイルの命中を狙っているのが見え見えだ。なら……。

「行つて、フィンファンネル！」

5基のフィンファンネルは反応して僕を中心にピラミッド型のビームバリアを形成する。これならビームライフルはもちろん、ミサイルも防ぐことが出来る。制限はだいたい1分ぐらいなのでミサイルの猛攻には耐えられるはず。

エリスさんは接近戦にするのか背中に装備してあるハイパービームサーベルを抜き、こちらに接近してくる。ZZガンダムのビームサーベルはガンダムのもより出力が上なのだ。でも接近ならこっちに部がある。ZZガンダムのは少し大きめなので大振りになつてしまうがガンダムは比べて小さく、適切な場面でビームの刃も出るので小回りがよく効くのだ。まあエリスさんは接近より射撃が向いているのもあるかな。

僕はビームバリアを解除してサーベルを抜き、エリスさんを待つ。これはエリスさんの太刀筋を見極めると共に大きな隙を見つけて、カウンターを放つという作戦だ。箒さんや夏兄のように見極めれてもカウンターが難しい人もいる。相手によつては危険な行為とも言える。

そんなことを考えている内にエリスさんが僕に切りかかる。僕はそれをギリギリの距離で避ける。エリスさんは手を休めることもなくどんどん切りかかってくるが僕はそれを避け続ける。

だんだんイライラしてきたのかエリスさんの太刀筋が荒いものに

なってきた。そろそろ見えてくるかな……。

「あたれええ！」

気合の入った切りつけだけど、今までで大きな隙だ！ 僕はその攻撃を避け、姿勢を低くしてサーベルを切り上げる。案の定、エリスさんはそれを避けることが出来ずにシールドエネルギーで守られるがダメージを負う。距離を置くと思ったが、エリスさんはサーベルを持った僕の手を掴む。

「ゼロ距離なら当たるはず……！」

「まさか……ちよつと待った！ この距離でハイメガキャノンは止めて！ さずがにISが持たない！」

「止めないよ。私だって光輝くんに勝ちたいんだもん！」

「負けを認めるから止めて！ どっちにせよゼロ距離のハイメガキャノンを受けたらエネルギーが0になるのはわかってることだしさ！」

エリスさんは考え込む。なにやら小声で喋っているが何を言っているかは分からない。一体僕はどうなるんだ……。

「やっぱり私の負けでいいよ。模擬戦でここまでする私が馬鹿だったんだ。ごめんね」

そう言っただけでエリスさんは手を放すと同時にISを解除する。いきなりどうしたんだよ？ 僕は何か酷いことでも言ってしまったのか？

「いや、そこまで気にしなくていいから！ だから元気出して！」

「うん……。あのね、今から私の部屋に来てくれないかな？」

「別にいいけど、相方の人は大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。今日は遅くなるって言うてたから」

何をするのかよく分からないけど、僕にも非があるしエリスさんが元気になってくれるなら行こう。

「分かった。模擬戦はここまでにしようか。他の人も待つてるし、ZZガンダムの調子もバッチシだしね。さて着替えますか」

そう言っ僕達はアリーナを後にした。この後悪夢があることも知らずに……。

「うーん。光輝くんて才能あるね」

「……」

「本当に男性なのが信じれませんわ」

場所は変わってエリスさんの部屋にて。なぜかセシリアさんもあるがこの際どうでもいいよ。この二人が元気なってくれるなら僕は嬉しい。でも……。

「だからって女子の制服を着る僕って一体……」

「だからそんなに悲観しなくていいって。すっごく似合ってるよ！ そうだよねセシリア？」

「そうですね。でも少し嫉妬します。男性なのに女性の私達より綺麗なんて……！」

「それはそうかもね。もしかして本当は女とか……！」

僕にじりじりと向かってくる遠距離が得意なお二人様。いやいや！僕はちゃんとした男だよ！

後ずさりしているとベツトに躓き、倒れてしまった。地味にかかとが痛い……。そんなことを考えてたら二人がすぐ目の前に！ 万事休すなのか！？ 誰か助けてくれー！

「よし！ このままの恰好でご飯食べに行こうか！ いいよねセシリア？」

「もちろんですわ！ 今日可愛い光輝さんをしっかり拝みましよう！」

「ちよつと待つて……このままの恰好はさすがにダメだつて！ 絶対いろいろと勘違いされちゃうよ！」

ああ……お願いだからそれはやめてくれー！ 二人から異様なプレッシャーを感じるし、後ろに不気味なオーラが見えるぞ！ これが女子の本当の姿なのか！？

抵抗も空しく、僕は二人の女子にこの姿のまま食堂へと連れ去られたのだった。悲惨だったことは言うまでもない。そして二度と思い出したくもないし、その話をするのも嫌だ！

あの女装事件が終わって食堂から部屋に帰ってきた僕はシャワーを浴びてベツトでのんびりしていた もとい、のびていた。

「つ、疲れた……もう嫌だ」

あの惨劇は夢に出てきそうで怖い。まあ終わったことは気にしないように……。うん、大丈夫なはず！



自己暗示をしているとノック音が聞こえてきた。この感じは……さっきの事件の首謀者の一人である、エリス・リムスカヤさんその人だ。今度は一体何だ！？

僕はドアの前まで移動して立ち止り、「何？」と尋ねる。警戒しなければ何をされるか分かったもんじゃないよ。

「あのさ、渡したいものがあるんだけどいいかな？」

「……今度は変なことしないでって約束できますか？ あの惨撃を繰り返さないで約束できますか？」

「だ、大丈夫だよ。さっきのは反省してます……。セシリアも私も調子に乗り過ぎたから。本当にごめん」

真剣な口調で謝罪するエリスさん。警戒する必要はないみたいだね。僕はドアを開けてエリスさんの中に入れる。

「お詫びの印って訳じゃないけど、これしてほしいなって思ってたさ」

そう言っただけ制服のポケットから取り出したのは羽の髪止めだった。エリスさんが前髪にしているものと同じものらしい。

「へえ、エリスさんとおそろいの髪止めか。ちょっと恥ずかしいけど早速止めようかな」

「ほんとに！？ ありがと光輝くん。えっとさ、私が止めてもいいかな？」

僕自身、どこに止めていいか分からないしここはエリスさんにおまかせしよう。

「うん、エリスさんにおまかせします」

「じゃあ目を瞑って。すぐに終わるから」

そう言われ僕は目を瞑る。しかし、エリスさんと同じ髪止めか。恥ずかしいけど嬉しいな。

「はい。開けていいよ。私は左に付けてるから光輝くんは右に付けてみたけどどうかな？ 私は淒く似合ってる思うよ」

差し出された手鏡で自分の前髪を見る。うん、違和感もないし前が見えやすくなった気がする。

「ありがとうエリスさん。さすがに寝るときは外すけど明日から付けていくね」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。じゃあ私はそろそろ帰ります。また明日！」

嬉しそうなエリスさんを見送りながら僕はこの髪止めに夢中になっていた。

#### 第十四話　二人を結ぶ羽（後書き）

お願いがあるのですが、どなたか光輝とエリスの絵を書いていた  
だけないでしょうか？ 作者は絵を書く時間がありませんというか、  
小説を書くのが精一杯なのです。

無理にとは言いません。どなたでもいいのでお願いします。

## 第十五話 闇あるところに光あり（前書き）

やっと更新できた W W W  
ではどうぞ。

## 第十五話　闇あるところに光あり

さて月曜日の今日から一週間は例の学年別トーナメント一色に変わります。第一回戦が始まる前の今でも全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導をしていた。

それから解放された人達はすぐに各アリーナの更衣室へ走る。僕達、男子三人組はこのただっ広い更衣室をさんにん占めなのだ。今頃ここ以外の更衣室は人が多くて困っているんだろうな。エリスさん、大丈夫だろうか……。

「しかし、すごいなこりゃ……」

夏兄がそう思うのも当然かな。各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、そんな人たちが諸々来ているのだから。まあ僕はこんな人たちはみんな嫌いだけどね。

「スカウトやらなんやらで来ている人がほとんどなんだろうね。まあ僕達には関係のないことだよ」

「ふーん、ご苦労なこった」

「今の一夏はボーデヴィツヒさんしか見えてないんだね」

シャルルくんの言う通りだ。今の夏兄にはセシリアさんと凰さんのトーナメント出場禁止の元であるボーデヴィツヒさんとの対戦しか考えていない。一年生は実力試しなのだけど、それも出来ないとなると代表候補生である二人の立場も悪くなる。

「自分の力を試せもしないっていうのは、正直辛いだろ」

夏兄は例の事件を思い出したのか自然と左手を握りしめている。し

かしシャルルくんの差し出す手がそれをほぐす。まるで何かを庇うように。

「感情的にならないでね。彼女はおそらく光輝に並ぶ実力を持っているよ」

「悔しいけどシャルルくんの言う通りかな。ボーデヴィツヒさんの実力は高い。でも決定的に欠けているものがあるから、そこを付けば大丈夫だよ」

「お、おう。しかし光輝、チームでもないのに特訓に付き合わせちゃってごめんな。こっちは万全だけど、そっちは大丈夫か？」

そう、ラスト一週間は僕とエリスさんはこの二人と一緒に特訓していた。敵同士とかは関係ないさ。僕達も良い特訓になったしね。模擬戦なんか何回したのだろうか？ 一日、3回ぐらいしてたのかな。全部勝ったけど、この二人のチームワークは抜群で僕達もなかなか苦労したよ。

「大丈夫だよ。お礼を言いたいのはこっちなんだよ。ありがとう夏兄、シャルルくん！」

「こっちこそありがとな！ お互い頑張ろうぜ光輝！」

僕と夏兄は拳をかちあわせた。こういうのはなんかいいよねっ。こっぴどい情熱的なものを感じるよ。

「シャルルくんもやるっ」

「えっ、僕も？」

シャルルくんは戸惑いながらも拳をかちあわせてくれた。そんなにビックリしなくてもいいじゃん……。

「さて僕はそろそろエリスさんと合流するから行くね。お互い頑張ろうね！」

「うん、模擬戦のようにはいかないからね！」

「今度こそ勝ってみせるぞ！ またフィールドでな」

夏兄とシャルルくんの宣戦布告を聞きながら僕は更衣室を後にした。こっちだつて負ける気はないからね！

と、更衣室をでて羽の髪止めに触れる。

「友達から貰った大切なもの。これを付けてたらなぜか勇気が出てくるのは気のせいかもしれないけど、安心感があるよ……」

僕は貰った本人に感謝しながら道を進んでいく。ありがとうエリスさん……！

僕とエリスさんはあの後合流し、アリーナの観客席で試合を見ている。しかも一回戦目から……。

「まさか夏兄、シャルルくん達の相手がボーデヴィツヒさんと箒さんペアだなんて、なんて偶然だよ……」

「確かにそうだね。でもあの二人のコンビネーションはすごいよね。それに比べてあの二人は……」

たぶんボーデヴィツヒさんと箒さんは抽選で決まってしまったのだろうけど、元々協調性のかけらもないボーデヴィツヒさんと組んだのは厳しい部分があると思う。そんなことを考えている内に箒さんがシャルルくんにやられてしまっていた。

「さすがに量産機と専用機じゃ性能の差があるからしかたないよね。四人中三人が専用機なだけですごいのに」

確かにエリスさんの言う通りだ。箒さんとシャルルくんはISの性能差が大き過ぎる。更にシャルルくんの得意技『ラビット・スウィッチ高速切替』で箒さんを圧倒できるはず。

ラファール・リヴァイブ・カスタム？は武装数が多いとはいえ、瞬時に武器の切り替えなんて簡単にできるもんじゃない。でもシャルルくんは持ち前の器用さでそれを可能としている。あれには僕達も苦戦したよ。

「これで二対一、ボーデヴィツヒさんが不利になっただけど油断は禁物かな。二人とも、気をつけて……！」

ここから聞こえるわけがないのだけど、そう言わずにはいれなかった。なにか嫌な予感がしてならないんだ。

「あ、あれって……」  
「……っ！」

私の隣で試合を見ていた光輝くんも驚いている。一夏くとシャルルのコンビネーションでラウラを倒して決着が着いたと思ったら、突然ラウラのISから激しい電撃が流れてISが変形していった。さっきまでの装甲はドロドロに溶けて、漆黒の闇がラウラの全身を飲み込んでいった。

そして現れたのは、黒い全身装甲のISだった。ボディラインはラ



ウラのままであつて、最小限のアーマーが腕と脚につけられている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の個所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしている。

「行かなきゃ、助けに行かなきゃ！」

光輝くんはそう言つて走つて何処かに行つてしまう。

「ちょっと、待つてよ光輝くん！ まさか一夏くん達のところに……」

「そつだよ。助けにいかないと夏兄達が危ないんだよ」

やつぱりそつか。光輝くんらしいや。

「私も行くよ。パートナーとして自分自身の意志でさ。大切な人たちが危ない目にあつてるのに何もしないのは嫌だもんね！」

「エリスさん……！ ありがとう！ それじゃあ、行こう！」

光輝くんの掛け声で私達はISを起動させる。こんなときにも光輝くんはおそろいの髪止めをしている。ありがとね、光輝くんっ！

あれ？ 光輝くんの身体から緑の光が出ていたようなような……？ 気のせいかな？

「どけよ、箒！ 邪魔するならお前も」  
「っ！ いい加減にしろ！」

バシーン！ と頬を引つ叩く音がフィールド内に響く。一夏の身体は飛び出そうとしていた姿勢からか横向きに転ぶ。頭に血が上っていた一夏だが込み上げてくる怒りを鎮めれた。

「二人とも！ 大丈夫！？」

「なっ！ 光輝にエリス！？ どうしてここに！？」

箒と一夏、シャルルの後ろからISを装備した光輝とエリスが現れる。意外な人物の登場に二人は驚きを隠せない。いや、光輝がくるのは多少の予想が出来たか。

「夏兄、あれってまさかとは思うけど、お母さんのデータを使ってる！？」

「そうだけ。あれは千冬姉のデータだ。千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

黒いISはフィールドの中央から微動だにしない。自分を攻撃してくるものだけを反撃するようだ。ラウラの意志ではなく、訳の分からない力に振り回されている。

「わけのわからねえ力に振り回されてるラウラも気にいらねえ。ラウラとIS、両方を一発ぶん殴ってやらねえと気がすまねえ」

「だが白式のエネルギーもないのにどうやって戦う気だ？ それに先生方がもうじき駆けつけてケリが着く。お前がやらなくとも自体の収集は着く。違うか？」

確かに箒の意見は正しい。だが

「確かに箒さんは正しいよ。でも自分の意志で行動することに意味があると思う。だから、ここは夏兄に、ね？ 夏兄もそうしたいん

だよな？」

「光輝……その通りだよ。箒、これは『俺がやりたいからやる』んだ」

二人の兄弟に圧倒されたのか、箒は押し黙るが問題はまだある。

「だがエネルギーはどうするんだ！？ もう」

「僕のリヴァイブならエネルギーを移すことが出来るよ」

「本当か！？ だったら頼む！ 今すぐに」

「ただし！ 約束して。絶対に負けないって」

シャルルがびしつと一夏に指を指して言う。その言葉は強い意志の籠った言葉だった。

「もちろんだ！ 必ず勝ってくるさ」

「約束だからね。さっそく始めるよ。エネルギー流出を許可。

よし、一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜は使えるはずだから」

「おう、わかった」

リヴァイブから伸びたケーブルは籠手状態の白式に繋がれ、エネルギーが流れ込んでくるのが分かる。それは一夏が初めてISを起動した感覚だった。

「完了。リヴァイブのエネルギーは全部渡したよ」

言葉通り、シャルルの身体からリヴァイブが光の粒子となって消える。

それに合わせて白式は一夏の右腕部分と雪片式型だけを構築した。

同時に零落白夜も発動させ、蒼白の刃が発現する。

「これだけで充分だ。この零落白夜で一撃で仕留める！」

「夏兄……！」

「こ、光輝くんっ！？ ISが……」

突然、光輝のISから緑の光が溢れ出していた。光輝がサイコバーストを発動しているわけでもない。ISの意志か、それともここにいる人間の意志が集中し過ぎているのか原因は分からない。

「光輝、大丈夫なのかよ!？」

「うん、なぜか恐怖は感じないよ。むしろ暖かくて安心するんだ。それにこの感じは」

光輝が言いかけたところで、光が一夏の握る雪片二型に纏わりつく。蒼白の刃が緑の鮮やかな色に輝く。

「綺麗だな。まるで虹の架け橋みたいな感じだ」

光輝と一夏を繋ぐ光は筭の言う通りまるで虹の架け橋のような美しさを連想させる。

「早く彼女を助けたすんだ。闇の中で一人でいるのは一番辛いんだからね」

「……!？ 今のは？」

専用機持ち全員に聞こえたであろう謎の声。光輝が時々聞こえる声そのものだ。

「あなたは一体誰！？ それに助けるって!？」

「そのままの意味だよ。一夏君、あのISから彼女を助けるんだ」

「え？ は、はい！ みんな絶対勝ってくるから待っててくれ」

そう言つて一夏は漆黒のISへ近づく。

「行くぜ白式」

一筋の光を細かく、鋭く、尖らせる。その集中が最大にまで達した時、零落白夜のエネルギー刃は強大なエネルギーを、ただ解放するだけではなくなった。それは日本刀の形に集約した。

「ありがとな白式。じゃあ行くぜ……！」

## 第十五話 闇あるところに光あり（後書き）

次ぐらいで二巻は終わりかな？

作者は頭の発想が悪いので、なかなかこの小説もおもしろくないものだと思いますが、読んでいただけたらとても嬉しいです。

第十六話　乙女の決心と怒り　（前書き）

なんかいろいろ違う気がするけど見逃してくれませんか？

## 第十六話　乙女の決心と怒り

私　　ラウラ・ボーデヴィツヒは漆黒の闇の中にいた。強さを求めるあまり、自分が分からなくなってしまう。そもそも強さとはなんだ？　相手を圧倒できる力か？

考えていると、突然声が聞こえてきた。聞いたこともない男の声だ。その声の方向を向けばそこは鮮やかな緑の光でその部分だけを照らしていた。

「いろいろあるけど、強さっていうのは人を信じることだと思ってる」

「信じることですか？」

「そうだよ。ただ相手を妬んだり恨んだりするんじゃないで、相手を受け入れることが大切なんだよ」

「私には……その資格があるのでしょいか？」

私は織斑教官に憧れていた。凜々しく、堂々とし、自らを信じる姿に焦がれた。しかしそんな教官を壊す人間がいた。それが織斑兄弟だ。

教官が二人の話をする度に、教官は優しく笑み、気恥ずかしそうな表情になる。それは私が憧れる教官ではなくなってしまうようで怖かった。

当時、教官と居た光輝にもかなり酷いことをしてしまった。だが今考えてみると恨みで光輝を傷つけたのではなく、あいつに嫉妬をしてしまったからか。あの親子のような優しい雰囲気にも。



ただの嫉妬で人を傷つけた私にそんな資格が本当にあるのだろうか？

「あるさ。自分の過ちに気付いてそこからまたやり直せばいい。君は一人じゃない。いつも隣には誰かが居るんだから」

「はい……！」

いきなり光が私を包んでいく。だが怖くない。暖かい、ただそれだけなんだ。

「この光は一体……？」

「人の心の光だよ。そして光輝君の暖かみでもある」

「光輝……の？」

「そうだよ。あの子はこの暖かみを伝えるのが目標なんだ。まあ今回は僕が勝手にやったがこうして君に伝えることが出来た。光輝君にお礼を言っておきなよ？」

「分かりました……！ あの後にお名前を教えて頂けませんか？」

この光みたいに、光輝みたいに暖かみを伝えたい。その前にこの光の声の名前だけでも知っておきたい。

「名前……ね。また今度に教えるよ。また会えるから」

「そう……ですか……」

名前が聞けないのは残念だが、でもこれを機に私は変われる気がする。この光が、教えてくれたから。

「さて、そろそろ目覚めようか。君を待ってる人たちが居るからね」

そうして私の意識は現実に戻されていく。この暖かみは決して忘

れない……！

「うーん、緊張するなあ……」

トーナメントでの事件は夏兄のおかげで解決することができた。あの漆黒ISのからボーデヴィツヒさんを助けることが出来たのだ。それと同時に光は消えて、ガンダムも強制的に解除されたのだ。理由は分からないけど、結果オーライだよ。肝心のトーナメントは今日は中止。明日からどうなるか分からないけど一回戦だけでもしたいよね。

そして今、ボーデヴィツヒさんのお見舞いに保健室の前まで来ているのだけど、お母さんとボーデヴィツヒさんがなにやら重い話をしているらしく入りにくい。ああ、どうしよう……。

「さつきからそこで盗み聞きしている奴、さつさと入ってこい」

ひうつ！？ 突然呼ばれて身体が強張ってしまう。

勇気を振り絞って入ればお母さんと来訪者に驚いているボーデヴィツヒさんがいた。ボーデヴィツヒさんは治療のためか左目の眼帯を外していて、左右で違う瞳で僕を見つめてくる。

「じゃあ私は仕事があるから戻るぞ。織斑弟も今日は早く休めよ」

お母さんはそう言って保健室を出ていった。今、保健室にいるのは僕とボーデヴィツヒさんの二人だけ。なんというか、気まずいよ。

「身体の調子はどうなの？」

ずっと黙っているわけにもいかず、調子を聞いてみた。なにかしらの病気にでもなっていたらと思うと心配だったからね。

「筋肉疲労と全身打撲だからしばらくは動けそうにない。さっき起き上がるのにも全身が痛かったしな」

「そうなんだ……でも良かった、命に関わるとかだったら嫌だから」

そこからまた沈黙タイムへ。ああこの間がすごく長く気まずいよ。どうしよう……何か話題はないものか。

「光輝、いろいろすまなかったな……」

「ん？ 何のこと？」

沈黙を破ったのはボーデヴィツヒさんだった。彼女から話しかけるのは珍しいけど一体なんだろうか？

「ドイツにいた時は寝込みを襲って殺しそうになったりしただろ？ この学園内だって挑発もしたし、友も傷つけた。すまなかった」

俯いてしまうボーデヴィツヒさん。あゝ確かにそういうことが何回もあったな。まあ他にもいろいろあった気がするけどほとんど覚えてないや。

「別にいいよ。もう過去の話だし、それに今この学園にいる間だけでも仲良くしたいから。ダメ……かな？ 嫌なら嫌って言うてもいいからね」

ボーデヴィツヒさんはキョトンとした表情で僕を見つめてくる。

そんなに見つめられると恥ずかしいなあ……。僕は思わず顔を背けてしまった。

「嫌じゃない。あの光に触れて、お前のことを完全に信頼出来たぞ」

「光？ ああ、緑の光の事ね。サイコバーストを発動したわけでもないのに、いきなり溢れ出すからビックリしたよ」

「それは光が勝手に出たと言ってたぞ」

うん？ 言ってたぞ？

「もしかしてあの光と話したの？」

「ああ。あの光自体に意志があるようだが一体誰なんだ？」

「僕にもさっぱり……。でも暖かくて好きだよ」

確かにあの光には意志があった。じゃあそれは一体何者なんだろうか？ ガンダムと何か関係があるのかな？ うう、分からないことだらけで頭が痛くなるよ……。

「光輝、すまないがもつと近くまで来てくれないか？」

「え？ ううん。分かったよ」

突然そう言われて僕はボーデヴィツヒさんの真横まで来て屈んだ。こう見てみるとボーデヴィツヒさんの瞳が明るくなってる気がする。良いことだ！

「目を瞑ってくれ」

ボーデヴィツヒさんのお願いに僕は素直に従った。一体何をするんだろう。心臓がドクドクいってるよ！ ああ、緊張するなあ。

「ラウラ〜、元気〜？」

この声はエリスさんか。やけにテンションが高いのは気のせいかな？

「つむぐ！」

目を瞑ってるから周りが見える訳じゃないけど、唇に柔らかい感触が……。

「さ〜て、元気が……なっ！？ 二人で何やってんの！？ こ、こんなところで……！」

まさか、感触といいエリスさんの反応といいやつぱり……。

「ぶはっ、私は嫁とキスしてただけだが、なにか問題があるか？」

「「よ、嫁！？」」

いきなりなんてことを言うんだこの人は！？ 僕は咄嗟に離れようとしたが目の前にはエリスさんが鬼の形相で僕を睨みつけている。ひ、ひいいい！

「光輝くん？ これはどういうことなのかな？」

「いや、僕だつていきなりだったんだよ！ しかもボーデヴィツヒさん！ 嫁ってどういう意味なの！？」

「日本では気にいった相手を『嫁にする』というのを聞いてな、それでお前は今から私の嫁だ」

「まさか……そんな間違ったことを教えたのはクラリッサさん？」

「そつだ。あいつが教えてくれたんだ。それと私のことはラウラと呼べ」

ああやつぱり……。あの人がたつたか。まあラウラさんって呼ぶのはいいけどまさか嫁ときたか……。

「光輝くん？ 覚悟はいい？ 最期に自分の嫁を拝めて良かった？」

エリスさんはいつの間にかハイメガキャノンの部分だけ装着しておりチャージ中のようなだった。まさかここで発射する気じゃ！？

「待つて！ 僕はそんな気はないんだ！ 全部無理やりなんだよ！ 信じてエリスさん！」

「……じゃあちよつと外に行こうか？ じゃあねラウラ、また来るよ」

僕はエリスさんに腕を掴まれ無理やり引つ張られる。自分で歩けるからせめて立たせて！

僕はそれからハイメガキャノンで死ぬ寸前まで追い詰められて、やっと許して貰えました。

「光輝くんて無理やられるのがいいんだ。よし、覚えておこう！」

そんな不吉なことを言っていました……。正直これからどうなるか凄く怖いです。

## 第十六話　乙女の決心と怒り　（後書き）

なにか批判でも良いので感想とかお願いします。作者の力になりますんで！

第十七話 可能性を信じる者 (前書き)

今回からはあの人がです！ みなさんが予想しているあの人が……



## 第十七話　可能性を信じる者

トーナメントが終わって数日　あるいはシャルルくんがシャルロツトさんだったと分かった日から　今日の朝のSHRで臨海学校の知らせがあった。

三日間の日程の内、初日はずっと自由なのだ。臨海学校というぐらだから海は当然であって……。女子のテンションが上がりっぱなしなのですよ。

あんまり泳ぐのが好きじゃないし買わないようにしてたんだけど、エリスさんに相談したら

「寝言は寝て言おうね。今度一緒に買いに行こう！　そうしよう！」

とまあこんな感じで週末に水着を買いに行くことになってしまったのです……。まあ水着になって海を眺めるぐらいにしようか。

「ではSHRを終わる。今日もしっかり勉学に励めよ。それと織斑弟、昼に私の部屋に來い」

そう言ってお母さんは教室を出ていく。どうしたのだろうか？　呼ぶくらいだから大切な話だと思うけど。

「実はな今度の臨海学校に束が来るらしい　　というか来る。その時に　ガンダムについて話すらしい」

時は飛んであ母さんの部屋にて。まさか今度の臨海学校に来るとは、大丈夫なのだろうか？ 世界的な指名手配にされてるのによくもまあ来る気になるよ……。でも、

「そうなんだ。これでやっと ガンダムの事が分かるのか」

「だが会話の最後で「もしかしたら私が来る前に分かるかもね」とか言っていたが、どう思う？」

「どう思っつて、まさか！」

僕のその反応が分かったのかお母さんは首を縦に小さく振る。

「そうだ。もしかしたら ガンダム 光輝のいう人の心の光と会話が出来るかもしれないってことだろうな」

「あの光と会話が……」

「まあどちらにせよ臨界学校の時点で分かるのは明白だが光と話せるかは分らん。だがこれで光輝の疑問も解決できるわけだ。良かったな」

お母さんはそう言いながら頭を撫でてくれた。久しぶりだからちょよっと恥ずかしいな……でも嬉しいや。

「うん！ もしかの光と話せることが出来たら、僕は変われそうな気がするんだ」

お母さんがギュッと抱きしめてくれた。突然の出来事で混乱するけど、すぐに落ち着くことができた。ああ、お母さんの暖かみはあの光のように癒されるよ。

「そうか。でも遠くには行かないでくれ。大切な家族だからな」

「うん……。大丈夫だよ。僕は離れないから安心してね」

僕は夏兄にお母さん、いつかちゃんとした形でお礼をしなきゃね。

「じゃあ明日の朝、迎えに行くからちゃんと準備しててね！ おやすみなさい！」

金曜日の夜    あの話から三日程過ぎ    食堂から帰ってきた僕とエリスさんは明日の時間などを打ち合わせして途中で別れた。

「さて、今日は早めに寝ようかな。ん？」

僕の部屋の扉にもたれかかっている。誰かと思えば僕を嫁と呼ぶラウラさんだった。

あの事件の後、いろいろ和解して今では普通に話すようになった。でも嫁と呼ぶのは止めてほしいと言っているのにこれだけは止めてくれないのが辛かったりするのです。

「やっと来たか。遅いぞ、一体どこで油をうつていたのだ？」

「食堂に行ってたの。で、なにか用でもあるの？」

「嫁が寂しがらないようにわざわざ話し相手に来たのだぞ？ そんな態度はないだろう」

「なんでそんな上から目線なのさ……。まあ少しだけならいいよ。どうぞ」

僕は扉を開けてラウラさんの中に入るように促す。

「あまり珍しいものもないし、つまらないと思うけど。なにか飲み

物がいる？」

「そうだな……コーヒーを貰おうか」

ポットに水を入れ湯を沸かす。それまで時間があるけど……。

「ちょうど光輝君もラウラさんもいるし、ちょっとだけ話に付き合ってくれるかな？」

何処となく聞こえる謎の声。突然の事態に戸惑ってしまう。

「一体どこから声が……！？」

「どうやらお前のISからのようだな。それにその声はあの光……か」

ラウラさんの言葉にビックリする僕だが首に架けている待機状態のガンダムを見ると、わずかに光っている。その光に見惚れてみると光に声をかけられた。

「ビックリさせて悪かったね。でもこれからはちゃんと君達とも話せるよ」

「じゃあ……早速なんですが貴方は何者なんですか？」

「ああ、自己紹介は必要だよな。僕はアムロ・レイ。このガンダムの搭乗者だったものだ」

僕とラウラさんはアムロさんから驚愕の話をされ、ただ聞くことしかできなかった。

アムロさんはこの世界の人間ではない、元の世界ではMSと呼ば

れる18m級のロボットを操る人だった。宇宙への進出も果たして  
いて、その点ではISを上回ってる。その中でいろいろな戦争  
一年戦争、グリプス戦役、第一次、第二次ネオジオン抗争　が行  
われていたことも知った。

アムロさんは第二次ネオジオン抗争時に大気圏内に入った、アク  
シズと呼ばれる小惑星基地を　ガンダムで押し返そうとしたところ  
で意識が無くなり気付いたら束さんの隠れ家に来ていたと言う。人  
間の姿ではなく　IS「ガンダム」として。その理由はアムロ  
さんもよく分からないらしいが、まさか人がISになるなんて……。

またガンダムというのは一年戦争時に開発されアムロさんが初め  
て搭乗したMSらしい。コストを度外視して作られただけに当時の  
性能としてはトップクラスなんだとか。その後もガンダムタイプが  
開発され、種類はたくさんあるらしい。特徴としては額のVアンテ  
ナとか。

「なんか凄過ぎて頭が理解しきれない……」

「確かに。だが全部真実だ。アムロ殿が嘘をつくような人ではな  
いのはお前も分かるだろう？」

「う、うん。それにしてもそっちの世界は争いが絶えないんですね  
……」

「ああ。だが僕は人の可能性を信じている。この世界はISのせい  
で女尊男卑になってしまっているが、それでも人の心の光が世界を  
包むと信じて……」

アムロさんは僕と同じように人の心の光　人の暖かみを伝えよ  
うとしている。世界は違えど人の心の光が大切なのは同じなんだ。

「そういえばアムロさんはなんで今日から話せるようになったんで

す？」

「それは、光輝君。君という人を知りたかったからさ」

「僕という人間を？」

「そうさ。君が僕　　ガンダムを持ったその時から君を見ていた。けど君はやっぱり才能がある。人を思いやる強い心を持った才能を。君がきっかけを作ったからセシリアさんだって変わったし、君の人を助けたいという心が一夏君達を助けた。そしてそこにいるラウラさんだって君が変われるきっかけを作ったからこうしてここにいるのだから。そうだね、ラウラさん？」

「はい！　あの闇の中、貴方や光輝の暖かみがあつたからこそ私はこうやって自分を確立していくことができていると思っています」

ラウラさんは真剣な表情で言った。前の彼女とは違い真剣さの中にも暖かさを感じる。

「僕は人に変わって欲しいとかそういうのじゃなくて、人の暖かみがあれば人は強くなれる、勇気を持てるって知って貰いたかったから、僕は伝えたいんです。お母さんが僕を助けてくれたように僕も人を助けたいって思ってたんです」

「その想いで充分だよ。その純粋な気持ちが君の強さだ。いつまでも忘れないようにね」

「はい……！」

アムロさんの言葉には力がある。人を元気づけることが出来るような力が。でも、こう言われるのは初めてだからちよつと照れるなあ……。

ふと時計を見ると、20時前になっていた。ああ！　明日の準備しなくちゃ！　朝遅れたらエリスさんに何て言われるか……。

「ラウラさん悪いんだけど、明日の準備をしなくちゃいけないんだ。だから今日はもう部屋に帰ってもらえると助かるんだけど……」  
「む、そうなのか？　なら私は自分の部屋に帰ろう。嫁の迷惑にはなりたくないしな。じゃあ、また明日な」

そう言ってラウラさんは部屋をあとにした。さてお風呂に入ったりしないし寝る時間が遅くなってしまふ。寝坊だけはしたくないしちやっちやと終わらそう。

「そういえば明日、水着を買いに行くと行っていたな。光輝君も大変なんだな」

「そうでもありませんよ。誘ってくれたのは嬉しいですし、良い気分転換になれば良いんですよ」

「一つアドバイスをおこつ。女の子との買い物は大変ということだけは言っておくよ」

「大丈夫ですよ。なんとかかります」

アムロさんになにか意味深なことを言われてしまったが唯の買い物なんだし大丈夫だろう、とこの時は思っていた……。

## 第十七話 可能性を信じる者 (後書き)

まあ口調とか考えとか自己解釈が多いかもしれませんがどうでしょうかね？

作者はこの人が好きなので必ず出したい！ って思っていましたw  
w



## 第十八話　ちょっとしたからかい　（前書き）

光輝とアムロとの会話で「　、や」　は、頭で意志疎通をしている状態での会話ですので……。まさにニュータイプってやつですね。

## 第十八話　ちょっとしたからかい

「光輝くんっ、おはよー！　ちゃんと準備してる？」

「はい！　すぐに行くから待ってて！」

次の日の朝、昨日の話を聞いて中々寝つけることができなかった僕は少し寝坊をしてしまった。しかし準備はすんなりと終わり、なんとか遅れることもなくちょうど良かった。

「あまり女の子に待たせるのは感心しないな」

「分かってますけどなっちゃったものは仕方ありません……。おつとこれを着けなきゃ」

机に置いてある羽の髪飾りを手に取りいつもの場所に着ける。うん、今日も大丈夫だね！

「よしっ！　行きましようか」

最後のチェックをして僕は部屋を出る。その目の前では頬を膨らませているエリスさんが立っていた。ちょっと遅かったからおこってるのか？

「むう、準備してって昨日言ったのに……。まあいいやつ。早くいこっ！」

「あ、ちょ、ちよっと……！」

エリスさんが僕の手を掴んで走り出す。時折、つまずきそうになるがそれをなんとか耐えて僕もつられて走る。自分で歩くことぐらい出来るから放してよ！

一時間ぐらいして僕達はショッピングモール「レゾナantz」に着いていた。此処は本当に大規模で、ここで欲しいものが見つからなかったら他には無い、と言われるほどだ。

僕も今日初めて来てビックリした。とにかく広い。単純な感想だけど本当にそれしか思えないくらいなのだ。確かにここならなんでもあるような感覚に陥ってしまう。

「ねえエリスさん？ 僕の水着決めてくれないかな？」

「えっ！？ いいの？」

「うん。あんまりファッションとか分からないしさ、ダメかな？」

「光輝くんがいいなら私が決めるよ？ ちょっとしたリクエストがあるならそれに沿って選ぶけど」

「ちょっとした……ね。うん、どうしようか。あんまり派手なのは嫌だし……。」

「なら黒を基調にした感じのがいいかな……」

「黒ね……分かった！ じゃあ行こうかっ」

僕はエリスさんに引つ張られるように行くと、程なく水着売り場に着く。それにしてもホントに水着だらけだ。売り場なものもあるけど量が凄い。思わず目移りしてしまう。

「これなんかどう？」

早速エリスさんが見つ付けてくれたらしい。黒にサイドが赤線一本

というシンプルなデザインだ。いろんな色が混ざってないから僕は好きかな。

「これに……しようかな。あまり派手じゃないし、ごちゃごちゃしてないから好きかな」

「ん、じゃあこれにしようかつ。光輝くんはあまり派手な色は好きじゃないの？」

「そうだね。たぶん派手な色にしたら水着の部分だけが目立ち過ぎてしまうから。そういうのは好きじゃないんだ」

そう言つとエリスさんの表情が暗くなる。どうかしたのだろうか？ 僕は何か余計なことを言ったのか！？

「そ、そう暗くならないでよ。……そうだ！ 臨海学校の時さ、一緒に泳ごうよ。二人でちょっと遠くまで行つて帰るぐらいでさ」  
「うんっ！ 私、泳ぎはあまり得意じゃないけどそれでいいなら私はいいよ！」

僕だつてあまり得意な方じゃない。運動は好きな方だけど、水泳だけは好きにはなれない。泳げない訳じゃないんだけどね……。

さて僕の水着は決まつたけど、エリスさんはどうするんだろ？ さすがに自分で決めるとは思ふけど、その間どうしようかな。

「光輝くん、私の水着……決めて欲しいんだけど……いいかな？」  
「へ！？」

思わず声が裏返ってしまった。自分でも変な声を出したと思う。まさか……ね。

「別にいいけど、僕はこういうセンスがないからどうなっても知らないよ？」

「いいの！ 光輝くんが決めてくれただけで……」

最後の方は小声で聞こえなかったけどまあいいか。さて、頑張つて決めようか！

「ふう、これで全部かな。いや〜こういうとこに来たら結構買っちゃうんだよね。光輝くん大丈夫？」

「だ、大丈夫……」

水着を買い終わった後 あの時のエリスさん、無邪気で可愛かったな 何かいるものはないか、ということではいるんなお店に周っているんなものを買ってしまった。まあほとんどがエリスさんのものなんだけど……そこは気にしないようにしよう。

僕とエリスさんは両手に買い物袋を持った状態で、しかも重い。まさかアムロさんが言ってたのはこのことなのだろうか？ 買い物が高いし荷物が重いし……疲れるよ。

「お、光輝にエリスじゃん」

後ろを振り向いてみれば夏兄とシャルロットさんがいた。シャルロットさんはなぜかそわそわしているが、まさかこの子も夏兄のことか？

「二人ともデート？ 一緒の部屋だったのは伊達じゃないね〜」  
「ち、違うよ！ 今日は」

「シャルに水着を買いに行こうって言われたから着いてきたんだよ。光輝も誘おうとしたんだけど、部屋に居なかったからさ」

からかわれるシャルロットさんだがそこに夏兄が入る。夏兄の言葉につくりしているシャルロットさんだけど、この反応は間違いないね。

「シャルロットさん、ライバルが多いけど頑張ってね。エリスさん行こう。じゃあね二人とも」

「おう、じゃあな。光輝、エリス」

二人に別れを告げ、僕達は後にする。最後のシャルロットさんのあの顔！完全にビンゴだ。どうやら三人が夏兄を狙ってるみたいだね。それに気付かない夏兄もある意味凄いけど……。

「光輝くん、あんまりそういうことでからかうものじゃないぞ」  
「すいません……つい反応が見たかったんで」

歩きながら直接、頭にアムロさんの声が響く。出かけるときはこうやって話すようにしている。ISと話しているっていうのが世間に知られたら政府に追われてしまう可能性が出てしまうからだ。だってISと会話なんて前代未聞だもん。

だったら話さなきゃいいじゃんってなるけど、それはそれで寂しいんだよ。僕のこの能力があるおかげでアムロさんと話せている。ということはアムロさんも僕と同じ？ まあ今度聞いてみようか。

「さて後は臨海学校まで頑張るだけ！ そろえるものは揃えたし、早く来ないかなあ」

エリスさんは臨海学校しか見えてないらしい。まあ初日が自由な  
んで確かに楽しみだね。それは言えるけど、

「怪我をしないように気をつけないとね」

「って！ 台詞を取らないで下さい！」

「そんなに怖い顔してどうしたの。光輝くん？」

「え？ な、なんでもないよ！ さあ帰ろうよ！」

## 第十八話　ちょっとしたからかい　（後書き）

一応、頑張って分かりやすく書いてるつもりですが、読者様から見たらどうなのですかね？



## アンケート その二

現在、臨海学校編を書いているわけですが、これが終わったらオリジナルのストーリーを書く予定なのですが、大まかな内容を皆さんに決めて頂きたいのです。

ストーリーと言っても、本編とはあまり関係のない短編にしようと思っています。なんでもいいのでお願いします。

作者が考えるべきなのかもしれませんが、今月の後半から仕事はかなり忙しくなるとのことで、本編に沿って書くのがやっとなります。さすがに本編ばかりでもつまらないという方もいらっしゃるかと思いますので、大体のストーリーの内容を決めて頂きたいのです。

そんなに細かくする必要はありませんのでご協力お願いします。

例に挙げれば、あるキャラクターから見た一日とか、光輝の性格が変わってしまう、とか簡単なもので結構です。

皆さんが考えて下さったストーリーの中から一つを採用して書くうと思っています。

期限は臨海学校編が終わるまでです。その時は前書きなどでお知らせいたしますので……。

気が向いたらよろしくお願いします。

## 第十九話 臨海学校へ！（前書き）

アンケートの件ですが、神夜晶さまのような感じでOKですので。

## 第十九話　臨海学校へ！

さてやってきました臨海学校。バスの中から綺麗な海が見える。日差しが反射していて、揺らぐ水面は穏やかな感じた。

「周りのテンションが激しい……。でも着いたらもっと激しくなるんだろうなあ」

そう、バスに乗った時点でクラスの女子達のテンションが上がりっぱなしだ。更に海が見えたことで、またテンションが上がる。そして……うるさい……！　確かに嬉しいのは分かるけど、これは……。

「　恐ろしい風景だな……人はここまではしゃげるものなのか」

アムロさんですら驚愕する程のクラスのテンションは上がっている。頂上の見えない山を登るように無限に上がり続けるこの密室で僕は大丈夫なのか……？

「はあ、早くこの密室から出たい……」

「何から出たいですって？」

僕のため息に反応したのは隣に座っているセリアさんだ。ここ最近、どうも機嫌が悪いのだが原因が分からないのです。今も鬼のようなオーラを発しているのが見えてしまう。

「まあいいですわ。光輝さん、海に着いたらサンオイルを塗っていただけませんか？」

「……え？　なんでまた僕に！？」

「そ、そんなに嫌な反応しなくても……いいじゃないですかあ」

いきなり泣きそうになるセシリアさん。ちょ、ちょっと！　こんなところで泣かない！　誤解されそうだ！

「分かったから、そんな顔するのは止めて！」

「本当ですわね？」

「ほ、本当だよ。僕で良いなら塗るよ」

その言葉を言った途端、セシリアさんの顔が笑顔になる。なんにも知らない無邪気で純粋な子供みたい……。最近、こんな感じのトブルが多い気がする。突然、通路を挟んでの席から異様なプレッシャーを感じてその方向へ向く。

そこにはものすごい形相でこちらを睨みつけるラウラさんがいた。いつも冷静な彼女だがこうも感情をあらわにするのは珍しい。

「くっ、私がそこに居るはずだったのに……！」

「あら、ラウラさん。抜け駆けしようとした罰ですわ！

この二人から火花が見えるのは気のせい？　ってかこの二人は僕の隣の席に座る為に争っていたのか！？　僕の隣に来てても面白くもなんともないよ。バスぐらいいは静かにしたいものだ。海に着いたら体力をかなり使いそうだし……。

「そろそろ旅館に着く。静かにしている！」

お母さんの怒声一発で全員席に着き、静かになった……。わお、さすがお母さん。あれだけうるさかったバス内がエンジン音しか聞こえなくなった。

「相変わらず千冬の指揮能力は凄いな。しかしこの雰囲気は違和感を感じてしまう」

「そりゃそうでしょ。あれだけ騒がしかったのにいきなり静かになったんですから」

アムロさんと話せるようになって数日後に心の光と会話ができるようになったとお母さんに報告しに行った。さすがに驚いてたよ。ISが意志を持って喋るんだからさ。でもこれが公になれば政府からガンダムを出せと問い詰められ、一生帰ってくることはないだろうと話していた。外では完全に喋らずに会話 意志疎通で会話をしろということだ。

しばらくして無事、旅館に着くことが出来た。女将さんに全員であいさつをして部屋に行くのだが

「織斑兄弟は私と同じ部屋だ。そうでもしないと就寝時間を破ってお前らの部屋に女子が群がるからな」

という訳で僕と夏兄はお母さんと一緒の部屋になったのだ。まさか家族が部屋のメンバーだなんて思いもしなかった。この方が気が楽にできていいや。

しかしお母さんはあくまで教員なので基本的に敬語だ。まあ仕方がないか……。

一通り説明を受けた僕と夏兄は荷物を置いて海に行くことにした。さてこれからが一番疲れる所になってしまうのだろうか。

「自由だがあまり羽目を外し過ぎないようにな。怪我をされては困

る」

「分かってます。じゃあ光輝、海行こうぜ」

夏兄の後ろに着いて更衣室に向かう。女子更衣室の前を通ると、中が凄くうるさかったのはいうまでもない。

「織斑君たちだ！」

「えっ！？ 水着変じゃないよね！？」

「一夏君も光輝君も水着似あってるなあ」

更衣室で着替えてちょうど隣の更衣室から出てきた女子と出会った。けっこう露出度が高いんじゃないか？ あんまり直視しているところちが照れるっ！

砂浜の砂が7月の日差しに照らされていて、とても暑そうだ……。あっ、夏兄が行った！

「あちちちっ」

おうっ！？ やっぱ暑いのか！ だがここで勇気を出さなければ……！ 勇気を振り絞って砂浜へ一步を出す。

「……あれ？ そこまで熱くないぞ。良かった……」

あそこまで脅えてた自分が恥ずかしい……！ あうう。

「さて体操して泳ごうぜ光輝」

「そ、そうだね……」

泳いでる最中に足とか攣りたくないしね。アキレス腱伸ばして、背筋伸ばして、屈伸して。と後ろから凄い勢いで足音が聞こえる。

振り向けば鈴さんが夏兄に向ってダッシュしており、ジャンプ。夏兄に飛び乗ったのである。突然の重さに驚いた夏兄だけどすぐに体勢を整える。

「そんな歳になって体操なんかしてんの？ さつさと終わらせて泳ぐわよ！」

そう言いながら鈴さんはあつという間に夏兄に肩車をしてもらっている状態になった。動きに無駄がない……！ 慣れているなっ！

「お前のちゃんと準備体操しとけよ。溺れても知らないぞ」  
「あたしが溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね」

人魚って……空想上の生き物じゃないか。そんなことを心の中で突っ込んでいると後ろから声をかけられた。

「光輝さん」

「ん？ ああセシリアさん。どうしたの？ そんなに荷物を持って？」

セシリアさんだった。手には簡単なビーチパラソルとシート。それにサンオイルを持っている。

「もう、先ほどのバスの中で約束したではありませんか！ サンオイルを塗ってくれると！」

「そついやそんなこと言つたね……」

僕達は程なく準備を終え、さあ塗ろうとするが……。

「どうしましたの？ 早く塗って下さいまし」

「う、うん……」

そう言われても……女子の肌に直接触るのはどうかと思つてしまふ。青のパレオを脱ぐと下の露出度が高い……更に背中に塗る訳だから、首の後ろで結んでいたブラも解いたわけで……正直、直視できない。今のセシリアさんはいつも以上にセクシーな気がする……。

約束したのに塗らない訳にもいかず、サンオイルを手に出して両手で少し温めて……、織斑光輝、行きますっ！

「んっ、光輝さん、お上手ですわ」

「そ、そう？ 後、変な声出さないでよね……。すっごく恥ずかしいんだから……」

ううう、多方向からの視線が痛い……。この状況、誰か助けて！

「あつ、光輝くんになにしてるのさせシリア！」

この声はエリスさん！ 救世主だ！

塗ってる最中にその方向へ向くと、手が止まってしまった。今のエリスさんは、オレンジのビキニにオレンジのパレオ つまりレゾナンツに行った時に決めた水着を着ている。その姿が凄く似合つてて つい見惚れてしまう。



「あらエリスさん、私と同じタイプの水着なんて、花が無いですね！」

「でもでも、この水着は……光輝くんが決めてくれたんだもん！それだけで……」

セシリアさんの表情が固まる。そりや僕が決めたけど本人に似会ってるかなんて分らないし、でもエリスさんはオレンジが似合うイメージだからそういう水着にただだけで……でも今、言えることは一つ！今のエリスさんは可愛い！

「光輝さん！手が止まっていますわよ！」

「わ！ごめんなさい！」

「セシリア！そんな言い方はないでしょ！？いい光輝くん？サンオイルなんてこう塗ればいいのよ！」

と言いながらエリスさんはサンオイルを僕の手から奪い、激しい勢いで塗りつけていく。

「エ、エリスさん！そんな手つきで塗らないで下さい！」

いきなりセシリアさんが立つ。……うわああっ！慌てて眼を隠すがわずかに見えてしまった。セシリアさんの……はううう。

セシリアさんは悲鳴を上げ、旅館に戻ったと言う。うああああ……ごめんなさいセシリアさん……。

「はあ、つ、疲れた……」

「まだ一日目だぜ。明日からが本当じゃないか」

時は進んで夕食後の部屋にて。今日はいろんなことがあった。セシリアさんパニックにピーチバレーの乱、夕食戦争……こんなことで明日から大丈夫なのかな？　ちよつと休んだら夜の海辺を散歩しに行こう。

「お前らだけか……女の一人も連れ込めないようじゃまだまだだな」  
襖から出てきたのはお母さん。てかその発言は教師としていいのでしょうか！？

「そつだ、織斑先生。エリスさん呼んでもいいですか？」  
「別にかまわんが、どうせならいつものメンバー全員呼んで来い。就寝時間には帰ってもらうがな」  
「分かりました。それじゃあ行ってきますね」

「それにしても今日は疲れました。でもたまにはいいのかもしれませんね」

「そつだな。僕はこう見ることで出来ないが、悪くはない」  
いつものメンバーを呼びに行った後、僕はそのままアムロさんと話しながら夜の浜辺を散歩していた。波の音が大きく聞こえる。昼の様子と比べるとギャップの激しささえ感じてしまう。

「この世界は平和だね。でもISによる差別は健在中なのが気にいらないな。ISが女性しか使えないにしても使わなければ男性も女性も平等だということを分かっているのだろうか？」

確かに女性がISを使わなければただの人間だ。それが分かってない女性がほとんどののは確かだと思う。

「人の知恵はどんな苦難だって乗り越えられると信じてる。人は生きていく限り可能性は無限にある。それを潰すような行為は許せない」

「アムロさん……」

一段と波の音が大きく聞こえる。アムロさんのいつもの優しい声とは違い、真剣で少し怒りに満ちた声だった。

「さあそろそろ戻ろうよ。明日の為に今日は早めに休んだ方がいい」

僕はその言葉に従い、部屋に戻るようにする。その刹那、あれに似たプレッシャーを感じた。まさか……ね。

## 第十九話　臨海学校へ！（後書き）

まさにあれが出てくる感じですね。次回は千冬VSいつものメン  
バーの会話を載せる予定です。

## 第二十話　乙女の密会（前書き）

これが忙しくなる前の最後の更新です……。なんかグダグダだと思  
いますが見てやってください……。

## 第二十話　乙女の密会

「へえ、これがいつものメンバーって奴なんだ。てか、私以外は一組じゃん！ あ、鈴は二組か」  
「……………」

今、織斑家族の部屋に居るのは千冬、原作ヒロイン、エリスの7人だ。一夏は風呂に光輝は散歩に行っている。エリスはどうも思っていないが原作ヒロインズは緊張しまくりだ。

「おいおい、こんな辛気臭いのはなんだ？　いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

「いや、なんというか……………」

「織斑先生とこんな感じで話すのは」

「初めてですし……………」

「はあ、そんなことか。じゃあ私から話をしよう」

そう言つて千冬は缶ビールを冷蔵庫から取り出し、プシュッ！景気のいい音を立ててしぶきと泡が飛び出す。そのままゴクゴクと喉を鳴らす。

「お前ら、一夏と光輝のどこがいいんだ？」

「……………っ！……………」

機嫌のいい声で尋ねると、ヒロインズの顔が一瞬で赤くなった。いきなり確信ついた質問をされれば誰だってそうなるだろう。

「私から見たら、篠ノ乃、凰、デュノアは一夏。オルコット、ボーデヴィツヒ、リムスカヤは光輝といったところか……………」

「「「「「………っ！！！！」「」「」「」

この先生は心が読めるのか！ 全員がそう思ってるはずだ。さあここから乙女たちはどするのでしょうか？

「い、一夏の剣術が昔より落ちてるのが腹立たしいだけですの……」

と篤。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

と鈴。

「分かった。一夏にはそう伝えておくでしょう」

真顔で言う千冬に二人は詰め寄る。

「「伝えなくていいです！」「」

二人のその様子をはっはっはっ和一蹴して、ビールを口につける。実に楽しそうだ。

「で、デュノアはどうなんだ？」

「ぼ、僕 いや、私は一夏の優しいところが……」

「なるほどな。しかしなあゝあいつは誰にでも優しいぞ？」

「そ、そうですね。そこがちょっと悔しいかなあ」

あははと照れ笑いをしながら、熱くなった頬を扇ぐシャルロット。その様子が羨ましいのか前述の二人は黙ってシャルロットを見つめ

る。

「さて次は光輝に惚れてる三人か……まずはオルコットからいこうか」

「わ、わたくしは……光輝さんといると落ち着くんです。それに……」

それからセシリアは顔を真っ赤に染めて黙り込んでしまった。恥ずかしいながらの勇気だったのだろう。千冬はその様子を真剣に見ていた。

「なるほどな……言いたいことは分かった。後の二人もそんな感じだろう？ それと、あの光と一緒に伝えたい、か？」

「な、なぜ分かるのですか！？」

「さすが家族ということですか……！？」

反応を見ると三人は同じだったようで、その様子を千冬は、やっぱりかという感じで見ている。

「あの子は、心の傷を持っている。誰にも理解できないような深い傷が。初めてあの子に会った時の目は今でも忘れない」

「は、初めてあったって……光輝くんと先生ってどういう関係なんですか？」

「もちろん家族だ。だが血は繋がってないがな。数年前、私はたまぼロボロだった男の子を保護した。食べ物もろくに食べてなかったのか衰弱していたな」

全員、真剣な眼差しで話を聞いていた。ここまで千冬が語ること自体が珍しいが、光輝のことを知る、貴重な話でもあったからだ。



「あの子は自分が捨てられたことが当たり前のように思っていた。『普通じゃないから』と言って自分で無理やり納得させてる感じだった。頭にきた私は本当の気持ちを聞いたんだ。そしたら思いっきり泣きながら『お父さんやお母さんと一緒に居たかった』って叫んでたな。それから私があの子の母親になることにした。それで少しでも助けれるのならと思っただけ」

今の光輝があるのは千冬が存在があつたらこそ、だと全員納得していた。光輝は自分たち以上に苦しみを味わっている。千冬に拾われる前は分からないが、心が傷ついたのだらう。それも深く深く、一生治らないところまで……。

「教官から見て、今の光輝はどうですか……？」

「昔に比べたらかなり明るくなったぞ。お前らの存在も大きいな」

千冬は笑顔になる。それをみたヒロインズは呆氣にとられてしまふ。こんな千冬を見たことがないからだ。それほど嬉しいということだ。

「だが最近、心の光と話せるようになってますます明るくなった気がするな」

「……心の光!?」「……」

「なんだ? 知らなかったのか?」

驚いてる中ラウラだけは何も反応はない。それはそうだ。その様子を不思議に思ったシャルロットは尋ねる。

「ラウラは知ってたの?」

「ああ。たまたま光輝の部屋に行った時に話した」

箒、シャルロット、エリスは驚いているがセシリアと鈴は何のこ  
とが全く分かっていない。

「あ、あの心の光ってなんですか？」

「光輝のISからでる光だよ。ラウラのISが暴走した時に光輝の  
ISから出て、一夏の零落白夜に纏ったんだよ」

「しかし、あの光は綺麗だったな……。虹みたいで、まさに人と人  
の心を繋ぐ橋見たいだった」

「そうなんだ。一回見てみたいわね……」

始めの方の雰囲気比べたら軽くなったのか口調が柔らかくなっ  
てきている。

「またいつか話せる時が来るさ。その時はいろいろと聞いてみると  
いい。彼は歴戦の英雄だからな」

## 第二十話　乙女の密会（後書き）

さて、当分更新は止まってしまいます。しかし、ちよつとづつ書いていくつもりではいます。後、感想とかアドヴァイスとかは常に大歓迎です！

それがもし否定的でも自分の力になりますから。

後、アンケートに関して分からないことがあればいつでも質問どうぞ。

## 第二十一話　銀の暴走と赤き残光（前書き）

忙しいとか言いながらそうでもありませんでしたwww

今回はいつもより長いです。まあ原作をけっこう使ったからかな？

## 第二十一話　銀の暴走と赤き残光

臨海学校の二日目の朝、専用機持ち＋箒さんはお母さんに言われ岩場に来ていた。

二日目は一日中、ISの装備試験とデータ取りに追われる。特に専用機は専用のパーツテストがあるんだけど、これも量が多くて大変そうだ。僕と夏兄とエリスさんはそんなパーツは無いんだけどね。白式はどんな装備も拒むし、僕とエリスさんは作れる人がいない。どうも従来のISの装備では対応できないらしい。まあ、ガンダムといいZZガンダムといい、このままでも十分強いのですよ。さすがガンダム！

しかし、専用機持ちではない箒さんがいるのだろうか？　何かあるのだろうか……。

「今日から篠ノ之も専　」

「ちーちゃ~~~~ん!!」

ずどどどどど……！　と何かが走ってくる音がする。どうもあの崖からようだけど、声で分かる。あの人しかない……！

「……束」

影が崖をジャンプしてお母さんに飛ぶ込もうとする。が！　お母さんはそれを最低限の動きでかわしながらアイアンクローをかます。ああ痛そうだ……。

「やあやあ！　会いたかったよ！　ちーちゃん！　さあ、ハグハグ

しよう！ 愛を確かめ      って痛い！ 痛いよー！」

お母さんの指に更に力が入っていく。ああ、自分の幼馴染にも容赦がないのがお母さんらしい……。

「うるさいぞ束」

「ぐぬぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

アイアンクローからの拘束を抜ける束さん。あなたも只者ではないのがよく分かります、はい……。

そして向いたのは実の妹の篝さんだった。何年ぶりの再開なんだろう？ 篝さんは束さんのこと嫌いなようだけど……。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなったね、篝ちゃん。特におっぱいが」

どんっ！ 実の姉を日本刀の鞘で突いた篝さん。でも分かる気がする。さっきの発言はよくないでしょうよ……。

「殴りますよ」

「な。殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で突いた！ ひどい！ 篝ちゃん！ ひどい！」

お腹を押さえながら涙目になって訴える束さん。そんな二人のやり取りを、一同は、ぽかんとして眺めていた。

「いやー、こーくんも久しぶりだねー。それにレイちゃんも」

「東さんはいつもテンション高いですね。それとレイちゃんって誰です？」

「僕のことだ。全く、その呼び方は止めてほしいと言ってきたのだ……」

アムロ・レイだからレイちゃんか……。これじゃ男じゃなくて女子になってしまいますよ。

「光輝？ 今のが、あんたのISの声なの？」

「そうだよ。ってなんで知ってるのさ？ まだラウラさんと織斑先生しか知らないはずだけど」

「私が教えたからな。こいつらなら信用できると思ってな」

まさかお母さんが教えていたとは……。でもこのメンバーなら大丈夫かな。

「どっちにせよ、いつかは話さなければならぬ日が来るんだ。僕は構わない」

「僕もいいですよ。アムロさんの言う通りですし、このメンバーなら信頼できます」

「そうか。という訳だ。オルコット、凰。これで分かっただろう？」

そうか。この二人はトーナメントの事件の時には居なかったからか。まあ今度ゆっくりみんなとアムロさんと話せることができればいいなあ。

「まあいい、束。自己紹介ぐらいしろ。こいつらが困ってる」

「えゝ、めんどくさいなあゝ。……私が天才科学者の束さんだよ、はろゝ。おわりゝ」

そう言っ、くるり、と回ってみせる。ぽかんとしていたメンバーが、やっとここで目の前に居る人がISの開発者にして天才科学者の篠ノ之束さんだと気付いたらしく、少し騒がしくなる。

「まさかこの人があのISの開発者……」

「しかしなんでまたこんなところにいますの!？」

「す、凄い……!」

ISの開発、基礎理論を開発した束さんだが、政府から世界的指名手配中であり、逃亡中の身である。なのになんでまた臨海学校に現れたんだろう？

「さあ大空をご覧あれっ!」

びしつと直上を指さす束さん。その言葉に従って僕を含めた全員が空を見上げる。何か来る!？

ズズーン!

「うあ!」

近づいてきたのは分かったけど、早過ぎてか反応が出来なかった……。激しい衝撃を伴って金属の塊が落下していた。

銀色をしたクリスタル型の何かは、壁が倒れてその中身を表す。

「じゃじゃーん! これぞ第ちゃん専用機こと『あかつばき紅椿』! 全スペックが現行のISを上回る束さんお手製のISだよ!」

ぜ、全スペックが現行のISを超えるだって!? 最新鋭機で最



強の機体じゃないか！

「さあ箒ちゃん！ 今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん」

「……お願いします」

「堅いよ」。実の姉妹なんだし、こうもつとキャッチーな呼び方で

「はやく始めましょう」

「ん、じゃあ、はじめようか」

箒さんは束さんが嫌いらしいからなあ……。 凄い無愛想だよ。

「箒ちゃんのデータはあらかじめ入れているから後は更新データだけだね。箒ちゃんの好きな近接戦闘を基に万能型にしているISだからすぐに馴染むと思うよ！」

「それは、どうも」

うわ、なんか気まずい雰囲気だ。この二人の間にはとてつもない亀裂がある。本当は仲のいい姉妹だったかもしれないのに……。 どうしてこんな……。

「 光輝くん……それでも人は分かりあえるさ。絶対に」

「 アムロさん……」

僕の考えが伝わったのか、暗い夜に引きずりこまれそうなところをアムロさんに助けられた。そうさ、人は分かりあえる！

「まあ後は自動処理に任せればいいかな。さていつくんにこーくん！ 二人のISを見せて。束さんは興味深々なのだよ」

「わ、分かりました」

「え、あ。はい」

僕と夏兄はISを展開させる。白式と ガンダム こう並んでみると白が目立つなあとか思ったりする。束さんは宙にディスプレイを出し、白式と ガンダムのデータを見ている。

「ほほ、見たこともないデータだね。二人が男の子だからかな？」  
「束さん、俺達がISを使える要因ってなんですか？」

夏兄が拝見中の束さんに尋ねる。確かにそれはそうだ。僕の場合は僕の特別な脳波が反応したって言ってたけど、夏兄の場合はどうなんだろう？

「それがわからないんだよね。謎なのだよっ！ でもISを装着したいくつかの中々だね」  
「ど、どうも……」

「照れるいっくんもいいねえ。さて」  
「お、織斑先生！」

そう言っ駆けてくるのは山田先生だ。すごい慌てているがなにかあったのだろうか？ 山田先生がお母さんの耳元で話していると、お母さんの顔色が変わった！ な、なにがあったの！？

「山田先生は生徒達に至急、旅館で待機させるように指示を。専用機持ちは私に着いてこい！ もちろん、篠ノ之もだ」  
「は、はい！」

なにか大きな事件でも起こったのだろうか？ だとすれば一体……！？

「では現状を説明する」

旅館の奥にある宴会用の部屋に専用機持ちとお母さん、山田先生が集合している。照明を落とされた薄暗い室内に、大型のディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、試験稼働していた、アメリカ・イスラエル共同開発の第三世代軍用IS「銀の福音」シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れ暴走。衛星による結果、福音は此处から2キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして2時間後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態を対処することになった」

まさかの事態に全員、驚きを隠せない。まさかISが暴走するとは……。それほどの性能を持ったISと考えられるね。なにかいい作戦はないものか。

「教員は訓練機を使って周囲の海域を封鎖している。故に本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

当然と言えば当然か。封鎖しないと被害が広がるだけだ。さて、どうする？

「それでは作戦会議に入る。なにかいい作戦がある者は挙手を」  
「はい」

僕はすかさず手を上げた。

「福音の詳細な性能を知りたいのですが」

「分かった。ただし、これらは二力国の際重要軍事機密だ。情報が漏れた場合、裁判にかけられるか、最低二年の監視がつけられる」  
「分かりました」

開示されたデータを全員で見る。それを元に的確な作戦を立てよう。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしや光輝さんのISと同じオールレンジ攻撃が出来ますわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。やっかいだわ。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回っているから相手の方が有利……」

「この特殊装備ってというのが曲者な感じだね。リヴァイヴ専用の防御パッケージでも連続での防御は難しい気がする」

「しかもこのデータでは格闘能力が未知数だ。偵察は行えないのですか？」

セシリアさん、鈴さん、シャルロットさん、ラウラさんの四人は真剣に意見を出し合っているが、箒さん、夏兄、エリスさんは追いつけてない様子だ。かく言う僕も、ギリギリ追いついている感じだ。

「無理だな。このISは現在も超音速移動している。最高速度は時速、二四五〇キロを超えるとある。一回のアプローチが限界だ」

「一回きりのチャンス。ここは一撃必殺の威力を持つ機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に全員が夏兄の方へ向く。確かにここは夏兄の出番だよね。

「え……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね……問題はありますが」

「お、俺がいくのか？」

「……当然！」「……」

わお。四人の声が重なった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら無理強いはいしない」

確かにこれは命にかかわることだ。無理をして欲しくない……。夏兄、どうするの？

「やります。俺が、やってみせます」

「よしそれでは」

「すまない。僕と光輝くんは別行動をとらせてもらう」

そういったのはアムロさんだ。一気に全員がこちらを見る。なんでもた別　っ！　この感覚は！　まさか！？

「なぜです？　なにか問題でもありましたか？」

「そうじゃないさ。奴が近付いてる」

「お、織斑先生！　赤い何かがこちらに近づいてきます！」

「なに！？」

モニターを切り替え、ここから三キロ先、福音が通過するポイントの真反対からあの深紅に染まった赤いISが近付いてきている。

前の時より、全長が低くなった感じた。体勢も前傾姿勢で、肩と腰

のアーマー、脚部が巨大化している。前に見た時より人型というイメージが無くなっている。

見た目はあの時より違うがこの感覚は忘れられないんだよ。間違いない。

「ああ間違いない。このプレッシャー、赤い彗星　シャア・アズナブルと呼ばれる男だ」

その言葉に、あの事件を知る人は全員、息を飲んだ……。

## 第二十一話　銀の暴走と赤き残光（後書き）

また現れましたシャア。機体はナイチンゲール……なのですが表現出来てますかね？

## 第二十二話 決戦準備（前書き）

今回は出撃前ですが説明文がほとんどですかね……。



## 第二十二話　決戦準備

作戦会議は決まった。銀シルバリオ・ゴスベルの福音は夏兄と篤さんが撃墜するように決まった。

あの後、乱入してきた束さんのアドヴァイスにより超音速移動している福音を運ぶ役を篤さんに決まったのだ。

赤椿はどうかやら第四世代のISだと言う。各国でやっとな第三世代が出来たというのに、束さんの技術はすごい。さすが、ISの産みの親というべきなのだろうか。

ISの各世代の概要はこうだ。

第一世代がISの完成。第二世代は、後付け武装による多様化。そして第三世代は、操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装。例えば、ブルーティアーズのBT兵器、シユヴァルツェア・レーゲンのAICかな。

赤椿の第四世代は、パッケージ換装を必要としない万能型。これは白式の雪片式型にも仕様されているとか……。それを考えたら白式も第四世代のISになる。各国がやっとな第三世代を開発したのにも関わらず、目の前に居る天才科学者、篠ノ之束さんは第四世代を作り上げてしまった。

アムロさん曰く「赤椿は戦いの火種を生む」と言っていたが、確かにそうなりかねない……。第三世代の競争が無意味なものになってしまうのだから。赤椿の存在を知った国々は即赤椿を渡すように要求してくるだろう。それが火種に発展するってことだね。

話を戻しましょう。つまり赤椿は攻撃・防御・機動と用途に応じた切り替えが可能。束さんが機動性を重視するように調整すれば福音の近くまで連れていけるということだ。

作戦開始まで残り一時間。篝さんは赤椿の肩慣らし中である。それにしても今の篝さんは心配だ。力を手に入れたからか凄く浮わっているし、心配でならない。

「束さん、あとどれくらい掛かります？」

「そうだねえ……三十分ぐらいかな　大丈夫だよ。必ず終わらすからね」

部屋に残っているのは僕、エリスさん、お母さん、束さんの四人だ。他の人は夏兄と篝さんの準備を手伝っている。

赤い彗星の相手は僕とアムロさんになった。アムロさんもあの機体は初めて見るらしいけどサザビーの発展型っぽいという。確かにサザビーの面影があるからそうなのかも。束さんの意見としてはもしかしたら二次移行したISかもしれないと……。

セカンド・シフト

「二次移行したISってどのくらい戦闘能力が上がるんですか？」  
「ん、分かんない　でも今の　ガンダムじゃ勝てないんじゃないかな。だからこうやって全体的な性能を上げてるのさ　さあ、あと少し！」

というわけで今の　ガンダムでは勝てないということで、束さんにガンダムの性能を上げてもらっている。上がった分、身体の負担も上がるということだけど、今は仕方ない。

それにしてもさつきからエリスさんの表情が優れないようだけど、大丈夫だろうか？

「エリスさん？ さつきから顔色が悪いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫。ただ……さつきから嫌な予感がするんだよ。はつきりとは分からないけど……」

そう言っただけでまたエリスさんはまた俯いてしまった。すぐにでも泣いてしまいそうな顔だ。しかしここまで暗いエリスさんを見るのは初めてだ。彼女は今、何を感じているのだろうか？

「大丈夫だよ、エリスさん。そんな予感があっても必ずそれが起きるわけじゃない。もしかしたらいい予感かもしれない！ そんな顔は似合わないよ。いつもの元気なエリスさんが一番いいよ！」

僕の言葉を聞いた瞬間、ゆっくりと顔をあげる。耳まで赤く僕と目を合わせてくれない。僕は変なことでも言ったのか？

「光輝くん……そう言ってくれて嬉しいんだけどね……そういうことは二人っきりの時に言ってくれなかつたな……」

「え？ ご、ごめん……」

「こーくんも鈍感だね。もっと乙女心を勉強しないと」

「き、聞いているこっちが恥ずかしいです……」

「全く。光輝、場所をわきまえろ。お前はそう言う意味で言ったんじゃないかもしれないが聞いているこっちが勘違いしそうだ」

え？ 僕はみんなからそんなことを言われるようなことを言っただけ？ みんなの目を見ると、呆れたり、照れてたり、笑ってたり、一体何なんだあー！

「よし、行くよアムロさん」

そう言つと僕の身体を緑の光が取り巻き、やがて消える。外見は変わったことはないけど、センサーで性能を見ると前より50%ぐらい上がってる。けっこうなパワーアップだね。

作戦開始まで二分前。僕、夏兄、箒さんは海岸に出ていた。ガンダムの強化も無事に終わった。後で束さんにお礼をしないと。

三人ともISを装着しており、いつでも出撃できる体勢だ。

「三人とも、これは実践だ。命の危険とも隣合わせだということを忘れるな」

センサーからお母さんの声が聞こえる。心配してくれているのか声が少し震えている。

「よし、箒、光輝。絶対この作戦、お互い成功させるぜ！」

「うん！二人も気をつけてね！」

「分かっている！私と一夏なら大丈夫だ！」

二人とも気合十分だね。

「だが、箒さんが浮ついているな。千冬なら注意させると思うが……」

確かに箒さんは、力をてにいれたからか凄く浮ついている。なにか失敗するかもしれない……。でも大丈夫！箒さんなら力の意味が

分かってるしね。

「それでは……作戦開始！」

お母さんの掛け声と共に僕たち三人は、反対同士の場所へ向かった。

会議室で見守るメンバーだが、エリスはずっと不安を抱えたままだった。

（絶対、絶対生きて帰ってきてね光輝くんっ！）

手を組んで必死に祈ることしか今のエリスには出来ることがなかった。それが光輝に届くと信じて……

## 第二十二話〈決戦準備（後書き）〉

次からは光輝<sup>アムロ</sup>VSシャアです！

此処は気合をいつも以上にいれて書いていこうと思います！

第二十三話　光、消え去り……（前書き）

ダメだあゝ。戦闘描写が難しい……。

## 第二十三話　光、消え去り……

相手はどうやら止まってこちらが来るのを待っているようだ。近づけば近づくほど強くなるプレッシャー。でもやられるわけにはいかない！

海上を飛んで探しているとほどなく見つけた。血のように赤く染まった機体で、全体的に重そうなイメージがあるけど意外なほど早いんだろうね。この効果はサイコフレームというMS用の構造部材のおかげらしい。

機体の基本性能を飛躍的に上げる物で、未知の部分が多いが「人の思惟を受信させる」ということだけはアムロさんの体験で分かったと言っていた。

MSN-04？ ナイチンゲールと判定。サザビーが二次移行したもので、武装はサザビーと変わりませんがスカートアーマー内には隠し腕があり、接近戦闘能力が上昇しています。どの武装も出力が上がり、危険度は増しています。また見た目に関わらず機動性、運動性も高いです。

「来たか……。久しぶりだな、アムロ。それに織斑光輝」

「シャア……！」

ハイパーセンサーの解説を見ているとナイチンゲール　シャア・アズナブルが話しかけてきた。彼から感じるのは今までに感じたことのないプレッシャーだがその中に、悲しみと狂気がある。一体なにが彼を襲ったのだろうか……。



「シャア、もう俺達が争う意味もないはずだ！　なのになぜ！？」  
「アムロ、私はもう人を信じれない……。あの光を見ても人は変わらなかった！　変わろうとしなかった！　もう人の可能性などもういない！」

「そんなことはない！　人は変わっていきける！　この世界に来てよく分かったんだ。誰かがそのきっかけを作れば変われると……！」  
「だが、この世界でもISという存在が人の可能性を潰している。それでもまだ信じるとうのか！？」

人は変わらなかった……。アムロさん達の世界では絶え間なく人が争い続けている。僕達の世界だってISという存在が火種になってそうなる可能性もあり得なくはない……。

「だけど、それでも僕は人を信じます！　貴方やアムロさんの世界がどんなものだったか詳しくは知りません。でも絶望の中、人の暖かみがどれほどの勇気を与えてくれるか、どれほどの優しさを与えてくれるか！　それがあれば人は人を信じることができる、分かり合えることが出来ます！」

僕はそれに救われた。だから今の僕がいるんだ。

「確かに君のその純粋な気持ちの人が変えていくんだろうな。しかし、もう人はそれにすら気付かなくなっている！」

「そんなことはないです！　少しずつ、少しずつその輪を広げていけば必ず成し遂げれます！」

「……いいだろう。その覚悟見せてもらう。いいな？」

「光輝君！」

「分かってます！　彼に人の心の光を見せてみせます！」

「いくぞ、この世界のニュータイプ！　君の覚悟を見せてもらう！」

僕とシャアさんはビームサーベルを抜き、互いに接近して鍔迫り合いになる。二次移行しただけの事はあって相手の出力の方が上だ！

っ！

危険を感じると同時にスカートアーマーからの隠し腕ビームサーベルで攻撃したところを離れて避ける。それを読んでか、ビームシヨットライフルで狙ってくる。

それを身体全体で避けながらビームライフルで応戦する。相手は拡散と収束を織り交ぜていて、避けるのが難しいがなんとかなる！

「ファンネル！」

「行つて！ フィンファンネル！」

同時にファンネルを展開したが相手のファンネルは10基。こちららは6基。数では不利だけど、必ず……！

ここで一気に攻めよう！ 僕はビームライフルとビームキャノンで牽制しつつ接近して一気に勝負を決めようとする。相手はそれを読んだのか僕の射撃を避けながら接近してくる。どれも最低限の動きで避け、隙が少ない。

接近するたびにビームサーベルとビームトマホークの光が交錯し、ファンネルの撃墜したりされたりしている。交錯する度に互いのエネルギーを削り合う。そして再び、鍔迫り合いになる。ビームトマホークの出力が高過ぎてすぐに弾かれ、お腹を蹴られぶっ飛んでしまふ。

「っ、強い……。こっちも性能をあげたのに、二次移行したISは

ここまで性能があがるのか……」

「それだけじゃない。前よりもシャアの反応が良くなっている。長期戦は不利になるぞ」

「そうですね……。だったらサイコバーストを使います。これならなんとかなるかもしれません」

「だが君の精神を蝕むんだぞ？　僕にも原因が分からないから対処のしようがない」

「大丈夫ですよ。どのみちここでシャアさんを止めないといけないんです！」

「……分かった。だが無理はするな！」

「はい！　行くぞ、サイコバースト！」

その言葉に反応して身体から緑の光　人の心の光が溢れ出す。残されたファンネルは2基。これならっ！

フィンファンネルを本体だけに集中させ、ビームライフルでナイチンゲールのファンネルを落としていく。

「ファンネルが落とされたか……。やるなっ」

サイコバースト状態のフィンファンネルを避け続けるの！？　なんて運動性なんだよ！

瞬間加速で一気に近付き、後ろから切りかかる。当たった！　と思ったが攻撃していたフィンファンネルが破壊され、紙一重で回避され、サーベルを持っている右腕を掴まれた。

「その状態の性能はさすがの私も反応ができるかできないぐらいのものだが、まだまだだな」

よく見るとナイチンゲールの周りから黒いオーラが見える……。これは……人の意志か？ 気持ち悪い……。

「気づいたようだ。これは私達の世界の戦いの中で死んだ者の意志だ。憎悪を感じるのだろうか？ 所詮、人間はそんなものだ」

恨み、妬み、憎悪が渦巻いて叫んでいる。それを力にしているのか！？ こんなに気持ち悪い感覚は初めてだ……。その負の意志が僕の中に入り込んできた。

「うあああつ！ いやだあ！ 怖い、やめて……もうやめてええ！」

僕は隠し腕で何回も殴られながら、その感覚に囚われそうだった。底の見えない闇を歩いているような感じで、考えるのがどうでもよくなってくる。

「光輝君！ しっかりしろ！」

アムロさんの声が遠のいていく。もう……どうでもいいや。このまま楽になりたいよ。このままどんどん闇に落ちていくけど気にしない。どうせ心の光を見せるなんて無理な話なんだ。

最後に見たナイチンゲールはモノアイが妖しく光っていて　そこで意識は途絶えた。

第二十三話　光、消え去り……（後書き）

なんかもう……むちゃくちゃだWWW

心の光に対して心の闇、見たいな感じにしてみたんですが……うん、どうなんだろう？

## 第二十四話、気づけた大切な事と覚悟の戦い（前書き）

けっこう強引な所ありますが、どうとらえるかは任せます。

## 第二十四話、気づけた大切な事と覚悟の戦い

旅館の一室、私は光輝くんの看病をしている。戦闘中に意識を失った光輝くんを連れて帰って一時間。今は旅館で寝ているけどいつ起きるか分からない。

一夏くんと箒の作戦も失敗に終わった。一夏くんは背中にもひどい火傷を負ったし、IS自体もかなりのダメージで修復中。箒は一夏くんの寝ている部屋でずっと正座していた。精神的にダメージが多いのかやつれていた。

「エリスさん、ありがとう。あのまま海に落ちていたら光輝君は死んでいた……」

「私は嫌な予感がしていただけです。見事に当たってしまったけど……でも助けることが出来て嬉しいです」

モニターで赤い彗星との戦闘を見ていた私達は、奮闘する光輝くんを静かに応援しながら見ていて、光輝くんがサイコバーストを発動した時に嫌な感じがしたんだ。私は急いでISを起動させて駆けつけた。

着いた時には光輝くんが宙から落下していて、瞬間加速で助けることが出来た。あのISはモノアイでずっとこちらを睨みつけ、こう言った。

「彼はもう戦えない。私の気の変わらない内に逃げるんだな」

光輝くんの仇打ちをしようとしたけど、圧倒的な実力差を感じてそのまま逃げだしてしまった……。

「アムロさん、光輝くんはなんで気を失っていたんです？」

「赤い彗星　シャアを取り巻く人の心の闇を直接喰らったんだ。恨みや憎悪を受けた光輝くんは精神的にかなりのダメージを受けたんだ。ただでさえ、純粋な少年だからその傷は計り知れない……」

「そんな……」

「うああああっ！」

寝てる光輝くんがうなされてる。大きな声だったので少しビックリしてしまった。

「大丈夫、光輝くん!？」

「怖いっ。光が消えてく……!　誰もいない……孤独はもう嫌なんだ!」

そう叫んで泣いている……。

「大丈夫だよ!　私やアムロさん、みんながここには居るんだから!　光輝くんは一人じゃないよ!」

「誰か……たす……けてよ」

そう言つて光輝くんは糸の切れたマリオネットのように静かになった。誰の声も届かなくなるまで君の心は傷ついてしまったの? 私には何もできないの……?

「……みんなを集めてくれないか？」

「え?　でも今は箒がショックで来るかどうか……」

「なら先に箒さんの所に行こう。すまないが僕を連れってくれ」

私は　ガンダムの待機状態であるT字の首飾りを首に架け、部屋



を後にした。光輝くんが心配だけど今は……。それにしてもアムロさんは一体何をするつもりなんだろう？

山田先生に光輝くんの看病を頼んで、私達は一夏くんの部屋に来ていた。箒はまだ俯いたままで見ているこっちが辛かった。

「君の失敗は何だと思う？」

「……………」

箒は黙ったままだ。箒のことだから本当は分かっているだと思っ

「力を手に入れたから嬉しいのは分かる。君は一夏君の隣で戦ったのだらう？」

「………… 貴方に何が分かるっ！ 私は！ 私は…………！」

その叫びには憤りと悲しみを感じる……。箒はどんな思いで一夏くんの隣に居たかったのだらう？

「………… 私はもう、ISを使いません。もうこれ以上は…………！」

「甘ったれるな！」

アムロさんの怒声が飛ぶ。いつも優しい口調だけにちょっとビツクリした。

「自分の可能性を潰すんじゃない。君なら分かるはずだ。力の意味を、それでどうするのかを」

「私の、すべきこと………… 私は戦う！ 今度こそ福音を墮とす！」

「それでいい。君達の歳でふさぎこむのはよくないからな…………」

優しい、包み込むような優しさがアムロさんにはある。それは一番の力、人と人を繋いでいく思いなのかな？

「全く、やっとその気になったわね」

振り返ればそこには専用機持ち全員がいた。誰しもが筈の復活を待ち望んでいた。仲間がいればどんな困難も乗り越えることが出来る。その絆はなものよりも強く、堅い。

「ちょうど良かった。みんな、光輝君を助けるのを手伝ってほしい。あの子に心の光で、命の輝きで助ける」

僕は暗闇に居た。何も見えない。聞こえない。感じない。いくら歩いても何処にも着かなくて、怖くなった僕はそこに座りこんだ。

『うあああつ！』

『こんな所で死にたくない！』

また聞こえてくる。人の死ぬ間際の叫び声。無理やり戦いに出せれて、そして命を散らす。心の光が消えていく……。死んでしまえば光は消え、永遠の闇に囚われる。

「人は争うことしかできない。そうすることしか分かり合えないのが人なの？　じゃあ僕のやっていることは全部無駄なの！？」

争うことが前提でしか分かり合えない？　でもそうやって必ず分かりあえるとも言っの？　じゃあどうすれば……。

「確かに人はそうしないと分かり合えないのかもしれない。でも、諦めてしまったらそこで終わる」

声をかけられ顔を上げると前から人が近づいてくる。この闇の中で不自然な程の輝きをだしている。年齢は20歳後半だろうか？初対面のはずなのに、なぜか安心できる。この人は一体？

「この姿で話すのは初めてだね。君を助けに来たんだ」

「その声、アムロ……さん？ どうしてここに？」

「君を助きたい人達がいるから。だから君のところに来た。さあここで立ち止まっては何もできないよ」

「……もう僕には光なんてありません。あるのは悲しみや妬み、憎悪なんかの闇の部分だけです。光なんてすぐに消えてしまうものなんです……」

「光は絶対に消えないんだよ。今は眠っているだけで君の光は消えていない」

「……………」

「人の心に闇はある。でもそれを拒絶しちゃいけない。それを受け入れた時、初めて人の心の光を見せることができる」

受け入れる？ この苦しみを……？ でも、

「怖いんです。それを受け入れた時に僕が僕で無くなってしまいそうで……」

「大丈夫。少しずつでいいから一歩ずつ前に進めばいいんだ。焦ることはないよ」

「一歩ずつ……一歩ずつ前に……」

僕は立ち上がって一歩進む。この一歩が早いとか遅いとか関係は

無い。この一步を出せることに意味があるんだ。

「一步出せたことの勇気が人を更に強くする。光を強くする。それに君はみんなが居るじゃないか」

「みんな……！ 声が聞こえる。僕を呼ぶ声が！ こんな暗闇でも僕は一人じゃない！」

僕は今まで人に助けられてきた。僕はその人達に光を見せたい！  
それが僕にできることだから！

「それでいいんだ。そうやって強くなるんだ！ さあみんなが待ってる。行こう！」

僕はアムロさんの声に僕は走る。僕は憎しみや悲しみを拒否しない。確かに激し過ぎる負はいけないけど、でもそれも人の心の一部なんだ！ だから僕が光を見せて勇気を……！

「ん、うう」

「やっと起きたか」

この声はお母さんか。身体を起こそうとするけど、身体が痛いのがのって…… ガンダムの負担なのかな、これは……。なんとか起き上がったけど、ここまで至るのに身体中が悲鳴を……。

「織斑先生、此処に居て大丈夫なんですか？ それに作戦は？」

「慌てるな。順を追って話す」

僕はあの後の事をさらっと聞いた。夏兄は意識不明の重体で危な

かったがなんとか持ち直して今は大丈夫そうだ。

「じゃあ福音は今も待機中なんですか？」

「ああ。あのまま逃げてしまおうかと思っただが、ずっと待機している。たぶん、自己修復だろうな。それに赤いIS　ナイチンゲールはこの空域から離脱した」

「でもまた来ますよ、彼は。その時はまた僕が抑えます」

「だが」

その時、襖を慌ただしく開けられる。来訪者は山田先生だが一体どうしたんですか？

「お、織斑先生！　専用機持ちのみんなが無断で福音の撃墜に！」

「なんだと！　なぜ止めなかった！」

「私には全員は止められませんよ……」

涙目になる山田先生。確かに専用機6人を教員一人で止めるのは無理な話だ。でもなんでそんな無謀な……！

「山田先生、すぐに作戦室に戻ってくれ。私もすぐに行く！」

「は、はい！」

「さて、織斑弟。立てるか？」

「だ、大丈夫です……」

痛みを堪えてなんとか立つが、歩こうとすると身体中に激痛が走る。

「くうう、痛い……」

「全く……世話の掛かる奴だ」

そう言つと、お母さんは僕をおんぶしてくれた。かなり恥ずかしいけど、懐かしい気がする。なんでだろ？

「お前をこうしたのは、あの時以来だがやっぱり成長してるな」

「あの時って？」

「お前が倒れているのを私の部屋まで運んだ時のことだ。覚えてないか？」

「……覚えてないです……」

「それはそうか。気絶してたからな」

そんな会話をしながら僕は作戦室に着いた。モニターの正面に来るようにお母さんは僕を背中から降ろしてくれた。もうちょっとだけ、あの暖かい背中になにかあったな……。

「千冬、あの子たちを止めないのか？」

「……止めたくても止めれませんよ。今はあいつらに任せましょう」

福音に対して6人。それでも互角に戦う福音は異常な戦闘能力だ。ナイチンゲールも福音も多人数との戦闘が得意か？

「あれ？ ZZガンダムの姿が変わってる気が……それだけじゃない！ あのでかいライフルはなに！？」

ZZガンダムの上半身にアーマーを加えて、更にはZZの全長を少し超えそうぐらいの長砲のライフルが装備してある。エリスさんはみんなより後ろに下がって援護している形だけど、あの装備だったら当然か。

「あれはフルアーマーZZ。束がリムスカヤの為に創ったZZ専用の強化パックだ」

束さんが？ 珍しいな……あの他人嫌いの束さんがエリスさんの為に創ったなんて。

「理由は分かんが、あいつにしては珍しい。アーマーを装備したことによって、火力も機動も防御も上がったが、細かい動きが難しく接近が不利なるらしい」

「いい強化じゃないか。エリスさんは射撃の方が得意そうだから良かったんじゃないかな」「確かにそうかもしれないませんが……で、あの長いライフルは？」

「ハイパーメガカノンという名前で、ZZのハイメガキャノンより威力は何倍も高いが、一発だけしか撃てないからな。チャンスを見ているのだろっ」

……火力が上がり過ぎでしょ！？ まさに動く武器庫じゃないか！ しかし、こう見ているだけだなんて、僕は耐えれない！

なんとか立とうとするが激痛が僕を襲う。でも行かなきゃ……僕は暗闇の中、みんなに助けられた。だから今度は僕がみんなを助けに行く！

「光輝くん、行つてはダメだ」

「っ！ どうしてです！？」

僕のだした声に教員二人が振り向く。

「あの子たちはあの子たちの戦いをしている。それを邪魔してはいけない」

「でも、だからって……！」

「ちゃんと見届けるんだ。彼女たちの戦いを……覚悟を！」

「覚悟……分かりました。悔しいけど今はみんなが勝てるように祈ります……」

福音は強い。でもみんななら大丈夫！ だから絶対生きて帰って来て！

僕は必死に祈った。今はこれしか出来ることがないけど、この祈りが届くように……！



## 第二十四話、気づけた大切な事と覚悟の戦い（後書き）

アンケートの件ですが、今のところ2件あります。期限はまだまだなのでご協力お願いします。

アドヴァイスや苦情も随時受け付けてますんでなにかあればお願いします。

## 第二十五話 覚醒への戸惑い（前書き）

パソコンの調子も元に戻り更新できました。

アンケートはまだまだ行うのでよろしくお願いします！

## 第二十五話　覚醒への戸惑い

「そこっ！」

私は福音に向けて肩部ミサイルランチャーを発射させた。しかし、回避されつつここに接近してくる。左手でハイパービームサーベルを引き抜いて応戦する。脚とサーベルの鏝迫り合いになるけど、出力はこっちの方が高く、弾きかえすことができた。

「任せろ！」

そこに箒がやって来て、赤椿専用武器　あまつぎ からわれ 雨月と空裂の二つの刀で押していく。

福音自体は天使見たいな感じでその名の通り銀色だけど、性能は馬鹿みたいに高いんだよ！ 反応がいいのか回避運動が尋常じゃない。遠距離攻撃なんかほとんど当たらないんだもん。

「箒、どけて！」

その声に箒は福音から離れ、私はサーベルで片方の羽に切りかかる。それも後ろに宙返りしながら回避されとび蹴りを喰らう。

「！」

「甘いね。このアーマーの防御力と重さならへっちゃらさ！ これならっ」

喰らったけど吹っ飛ばなかったよ。戸惑いで一瞬の反応が遅れたのを見逃さず、再び翼に切りかかる。見事、左の翼を切り落とせた

けど一気に距離を取られてしまう。

「エリスさん！ 大丈夫ですか！？」

「大丈夫！ この調子でもう片方も無くせば墜ちる！」

福音の翼は推進の役割だから速度も落ちるはずだけど、そんな素振りを全く見せず複数の弾幕を回避していく。

「でやああああっ！」

鈴が拡散衝撃砲を撃ちながら福音に接近していく。福音も片翼の砲門を開いて光弾を発射する。銀の鐘シルバー・ベルの弾幕を受けながらも双天牙月の斬撃を止めない。

「こいつ！……ぐっ！」

斬撃が福音に命中するが、福音も回し蹴りを叩きこむ。脚部スラストで加速されたそれは鈴の腕部アーマーを一撃で破壊して、海に墜とした。

「鈴っ！ よくも鈴を！」

ZZの追加アーマーをパージし、サーベルを抜いて瞬間加速で一気に接近する。

「片翼もらったよ！」

直線的な斬撃だったからか、ひらりと回避されてしまい後ろからとび蹴りを喰らった。海に落下せずなんとか姿勢を戻すことが出来たが、すぐに銀の鐘による光弾が迫っていた。

「こんなことだったらパージするんじゃないかった！」

両腕のバインダーで防御しつつ後悔していた。撃ち続けている福音に箒が切りかかろうとする。

撃ち続けていたせいか反応が遅れた福音の右肩へと刃が食い込んだ。

しかし福音は左右の刃を手のひらで握りしめた。刀からのエネルギーでダメージを受けるはずなのに福音は気にしていない。そのまま福音は両腕を最大にまで広げる。

「くっ、しまった！」

刀に引っ張れ箒も両腕を広げて無防備な状態になってしまふ。あの状態じゃライフルも撃てない……！

福音はもう片方の翼の砲門を開放している。

「箒！ 武器を捨てて離脱しろ！」

翼から光が溢れる。それは一斉に放たれる。

「私はもう 負けない！」

エネルギー弾が触れる直前に、ぐるんと赤椿は一回転する。その瞬間、爪先の展開装甲からエネルギー刃を発生させ、かかと落としのような格好で翼に斬撃が決まる。

両方の翼を失った福音は崩れるように海に墜ちていった。

「はあ、はあ、はあ……」

「大丈夫か!？」

慌てているラウラの声は聞きながら、箒は呼吸を落ち着かせていく。

「私は大丈夫だ。福音は？」

「墜ちたぞ。私たちの勝ちだ」

っ！ この感覚は!？

「まだ終わってない！ みんな離れて！ ハイパーメガカノンを使うから！」

嫌な予感がした。あの時みたいな感覚が！ 私はすぐに全員に離れるように言って、福音が墜ちていった海面へハイパーメガカノンを放つ。

凄まじい音を出しながら極太ビームが海面へと伸びていくが、海面から突如現れた青い円型のシールドによって遮断せれてしまった。徐々に空に上がって来て、その中心には福音がいた。

「まずい！ あれは二次移行だ！」

そうラウラが叫ぶ中、福音はビーム状の翼を生やした。顔全体を覆っているバイザーからは操縦者の表情が見えないけど、私には死の天使にしかみえない。それにしてもハイパーメガカノンに耐えるなんて……！

『キアアアアア……!!』

まるで獣の咆哮を発しながら、福音がラウラに飛びかかる。

「なっ！ この速さは!?!」

とてつもなく速いスピードで反応が出来なかったラウラは脚を掴まれる。

「ラウラを離せえっ!」

近接ブレードを装備してラウラを助けようとするシャルロットだけど

「ダメだシャルロット！ 近付いちゃいけないっ!」

そう叫んだけど遅かった。シャルロットは超加速された福音の蹴りで海面に墜ち、ラウラは近距離での銀の鐘を受けて墜ちていく。

「な、なんですの!?! 軍用といつても、異常な……!」

セシリアは射撃でダメージを与えようとするが福音に接近されしかも福音は両手両足の4か所の瞬間加速で爆発的な加速だった。

セシリアはその爆発的な加速の打撃攻撃を受けて、蒼海に墜ちていく。もう私は怖くて動くことが出来なかった……。

「どうしたエリス!? 二人で福音を墜とすぞ!」

「ダ、ダメ! 性能が違い過ぎるよ! これじゃあ勝てるわけない

よ……」

「何を言ってるんだ！　しっかりしろ！」

「ダメだったら！　このままだとみんな殺されちゃうよ！」

「……っ。私だけでも戦う！」

そう言って箒は急加速で接近して福音と格闘戦を始めた。ギリギリの攻撃と回避を繰り返していく。徐々に出力を上げていく赤椿に福音は押され始めている。

「す、凄い。第四世代はここまでやれるの？　二次移行したISと互角以上に……」

だが突然、赤椿のエネルギー刃が消える。まさか……エネルギー切れ！？

「こんな時に！　ぐあっ！」

福音はその隙を見逃さずに、翼から光弾を連続で放つ。

「エ、リス……」

そう言っただけで箒は海面に落ちていく。私が、私のせいで……！　でも……怖い。今の福音には嫌な感じしかないんだ。こんな感覚は今まで感じたことなかったのに。

「でも、やるしかないのかな……」

福音は私の存在に気づき、頭上にエネルギー状の球体を作り出す。そこから極太のビームを発射させる。



私も慌てて額のハイメガキャノンを発射して押し合いになる。でも相手の方が出力が高いのか徐々に押され始めている。リミッター状態の100%じゃ駄目なの!?

私はそのまま相手のビームの直撃を受けてしまった。もしかしたら逃げれたのかもしれない。でもそうしたって無駄な程の差を感じてしまったのだから……私はここで死んじゃうのかな……。

落ちていく中、そんなことを考え、そのまま意識を失った……。最期ぐらい、光輝ちゃんと話したかったな……。

「エリスさん！ エリスさん！」

戦場になった海域より少し離れたで僕は気絶しているエリスさんを起こしていた。福音が二次移行したあと、僕はすぐさま戦場へ駆けつけた。身体が痛いにも関わらず、僕はISを起動してエリスさんを助けた。

「ん、うう……光輝、くん？」

「エリスさん、良かった！ 大丈夫!？」

良かった……本当に良かった！ しかし、座り込んでいるエリスさんの目がおかしい。いつものいきいきとしたエリスさんじゃない。僕もエリスさんの前に座った時、エリスさんは言った。

「光輝くん、怖いよ。この嫌な感覚はなに？ 福音から凄いものを感じるんだ。口では表せないような、重いなにかを……」

まさかエリスさんは……僕と同じものを感じている？ 確かに今の福音からはナイチンゲールにも劣らない程のプレッシャーを感じる……！ エリスさんはプレッシャーのことを言ってると思うけど、なんで感じるようになったんだ？

「今のエリスが感じているのは確かに君と同じものだろう。その感じ方は間違いなくニュータイプそのものだ。一体なぜ？」  
「ニュータイプって この感覚は！？」

これは夏兄だ！ その感覚の方へ向けば夏兄が福音と戦っている。けっこんな重症って聞いたけどもう戦えるようになるまで回復したの！？

「これは何かを護ろうとする意志？ それにあの姿は……」  
「白式が二次移行した姿か！」

ウイングスラスターが四つに増えて、左手には新しい武器があるようだけど……身体が持つのか？ あの怪我がすぐに治るわけがないのに……。夏兄に一体何があつたというんだ！？

「エリスさん、ここで待ってて。福音を止めに行ってくる。でもこれだけは覚えてて。エリスさんは一人じゃないから……」

僕は立ち上がり夏兄の方へ向かった。身体が痛さで悲鳴を上げているけど何とかなるはず！

「アムロさん、まだ戦えるよね？」  
「ああ。だが君の身体が耐えられるかだ。ISには保護機能があるとはいえ油断はできない。無理はするなよ？」  
「大丈夫です。みんなでやれば必ず福音を止めれます！」

「そうだな……絶対に止めよう！」

エリスさん、確かに今の福音は僕も怖いよ。でも一人じゃなくてみんなとなら乗り越えられるんだよ。だから見てて！

「行け、フィンファンネル！」

## 第二十五話　覚醒への戸惑い（後書き）

どうも上手く書けていませんね……うーん、難しい。  
何かあれば感想のほうにお願いします。

## 第二十六話、新たな白と光の覚悟（前書き）

さて福音戦、決着です。

## 第二十六話　新たな白と光の覚悟

福音に対峙するのは二次移行し新装備『雪羅』を手にした一夏、箒の二人だ。他はまだ回復に時間がかかるだろう。

「大丈夫か、箒？」

「ああ、まだ大丈夫だ。早く福音を倒そう！」

箒がこうも気合が入っているのは傷ついた一夏がこうしてやって来てくれたこと、また共闘できるということだろう。しかし一回目の福音戦とは違い、浮かれているのではなくしっかりとした意志が詰まっている。

『敵情報を更新。危険レベル最大』

その福音の機械音を機に一夏が零落白夜を片手で持ち、切りかかるが福音はのけぞってひらりとかわす。しかし一夏は雪羅で追った。

雪羅は操縦者の意志で攻撃、防御、機動の各タイプに切り替えることが出来る。まさに第四世代の武器と言える。一夏のイメージに応えるように左の指先から1m以上のエネルギー刃のクローが出現する。

「逃がさねえぜ！」

クローが福音の装甲に当たった。シールドエネルギーに阻まれたが確実にダメージは与えている。だが問題が一つ

福音はエネルギー状の翼を広げて光弾による集中掃射が始まった。

雪羅による防御を行おうとした一夏だが、

「そのまま動かないで！」

その叫びとともに一夏の前にビームバリアが展開されている。よくみるとそれはフィンファンネル3基による三角形型のバリアだった。掃射が止まったと同時に福音の真横から瞬間加速で近づくISが一機。

だが福音は読んでいたかのように高速で切り抜けしようとしたISの斬撃を回避し、距離と取った。

「奇襲作戦のつもりが失敗か。それにしてもあの回避性能と反応速度は尋常じゃないな」

「そうですね……軍用だから元の性能も高いはずですし、しかも二次移行したISとなると……化け物じゃないですか！」

そんな会話をしながら一夏達の方へ近づいてくるのは光輝だった。IS自体のダメージは回復しているが身体のダメージが酷く、戦うのすら難しい状態だ。もうここまできると精神的な問題なのだろうか。

「こ、光輝！？ 顔色が悪く見えるけど大丈夫なのか！？」

「だ、大丈夫！ それはそうと夏兄？ その新しい武器は零落白夜と同じエネルギーだよ？ だからあんまり使い過ぎてたらずくにエネルギー切れになっちゃうよ」

そう、雪羅を装備した白式は戦闘の幅は広がったものの、そのエネルギーは零落白夜のものだ。ということはエネルギーの消費が前より上がったということだ。ここが最大の弱点とも言える。

「お、おう。気をつけないといけないな……」

「なんとか僕達がチャンスを作るからそこを狙ってくれればいいさ。大丈夫かな光輝？」

「大丈夫です！ 箒さんもいけるよね？」

「もちろんだ！」

アムロは箒のその声を聞き、ほっとしていた。

「箒、今の君の目は凜としている。それを忘れちゃいけないよ？」

「は、はい！」

アムロにそんなことを言われて戸惑ったのか、つい声がうわずってしまふ箒。そんなやりとりが心地よく思える光輝と一夏。

「さあ、三人とも福音を止めよう！ 力を合わせれば必ずできる！」

「……はいっ！」「……」

（一夏が駆けつけてくれた！）

それは暗い闇を照らす程の希望の光。

心が飛び跳ねて熱を持つ。それはもう嬉しいを超えていた。

そして戦う一夏を見て、何よりも強く願った。

（私は共に戦いたい！ あの背中を護りたい！）



強く、純粹にそう願った。それは人を強くする意志であり、周りを照らす光となる。

その願いに応えるように赤椿の展開装甲から赤い光に交じって、黄金の光が溢れてくる。

「この光は一体……！」

ハイパーセンサーからの情報で赤椿のシールドエネルギーが急激に回復していく。

『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築完了。

それは単一仕様発動の文字だった。  
ワンオフ・アビリティ

（まだ戦えるのだな赤椿？ だったら！）

力の使い方を今度こそ間違えないように      この力で！

（行くぞ赤椿！ あの子弟を、一夏を護る！）

赤い光に黄金の光を纏った赤椿は、全てを照らし闇を切り裂く一筋の光のように駆けていく。

「ぜらあああー！」

零落白夜の光刃が福音のエネルギー翼を断ち切るが、すぐに新し

い翼が生えてくる。片方の翼を切っても、もう片方の翼を切る事が出来ず新しく構築されていく。その瞬間に光弾による無慈悲な射撃が始まる。

「フィンファンネル！」

その度にフィンファンネルによるバリアで防いでいるが、零落白夜を使っている以上、エネルギーの消費は避けられない。光輝も身体の限界が近付いているのか射撃での援護が精一杯である。

「白式のエネルギーはあとどれくらい？」

「二十%を切ったところかな。三分が限界らしいけど、やるしかない……！」

「その気持ちで負けたら終わりだぞ！ 諦めるな！」

追い詰められていく二人だが眼差しは未だに輝いている。と、その時

「一夏！ 光輝！」

「箒！？ ダメージは」

「それはいい！ 二人とも、これを受取れ！」

箒の 赤椿の手が二人の手に触れる。

その瞬間、二人に黄金の光が纏い、白式と ガンダムのシールド エネルギーが全回復した。

「エネルギーが回復？ 箒さん、これって一体！？」

「今は考えるな！ 行くぞ二人とも！」

「お、おう！」

「分かったよ！」

身体が包まれるような感覚に戸惑う二人だが、再び戦闘に集中する。

「この感覚はなんだ？ 力がみなぎってくるような感じた。光輝、やれるな？」

「はい！ この感じならいけます。フィンファンネル！」

6基のフィンファンネルを射出し、福音へと向ける。その動きは今までの動きとは段違いで、福音の放つ光弾を回避しながらビームを当てていく。福音は逃れようとするがフィンファンネルはその速度を超えている。

「福音の動きが見える！ そこだっ」

光輝はフィンファンネルを収納すると、ハイパーバズーカを全弾発射させる。光輝の予測射撃で弾道が全部、福音の回避位置に行き全弾命中する。ガンダムの中ではトップクラスの威力を立て続けに受けた福音は大きく仰け反る。そこを箒が追撃する。

「はあああああ！」

気合の入った掛け声と共に雨月と空裂で連続的に切りつける。その剣撃には憎しみなどが無く箒の信念を映したかのような綺麗さが見える。

「一夏、今だ！」

「今度こそ逃がさねええ！」

一夏は雪羅から最大出力まで高めたクローを出現させながら、二重瞬間加速で接近し、その勢いで福音の腹部に突き刺す。さすがにシールドに阻まれるがそのまま海岸の浜辺まで福音を押し倒す。

福音は最後の力を振り絞って一夏の首元に手を伸ばすが エネルギーが完全に切れ活動を停止した福音は、支えを無くなった人形のように、だらんと腕が落ちた。

「あ、危なかったぜ……でもこれで、終わったんだよな」

「夏兄！ やったねっ！」

「一夏、無事か！？」

駆けつけた光輝と箒に笑顔を向けながら

「おう！ 苦労したけどなんとか終わったぜ！」

三人とも今まで緊張していたせいか顔がほころび、笑顔になる。これで一件落着 になるのかな？

「この感覚は！？ エリスさんの近くに……？」

「やはり来たか……。福音を倒したばかりだというのに」

「光輝？ まさかまたなのか？」

「……うん。ごめん、二人とも。他のみんなの事を頼むよ。エリスさんを助けて決着をつけてくるから」

「だったら俺たちも行く！ 複数なら、福音のように」

「ダメ。これは僕とアムロさんの問題だから。それにみんなを巻き込みたくないんだ」

それが光輝の想い。ある意味、自己犠牲とでもいうか。

「だが」

「ダメって言ったらダメだよ！」

光輝の悲痛なる願い。せめてみんなを巻き込まないこと。自分の事なのに大切な人が傷つくのは嫌だ。それだけのことだが、光輝にとっては精一杯の願いなのだ。

「本当にごめんね。じゃあ……行ってくる！」

一夏と箒に背を向け、光輝はエリスのいる方向へ向かって行つた。夕日に照らされて見るその姿は、どこか寂しさを醸し出していた。

「いいのかい？」

「いいんです。みんなを巻き込んで傷つくのは見たくありません…

…」

「君らしいな。でもなんでも一人で抑え込もうとしたらー」

「分かってます……みんなにも感謝してます。でも、だからこそ僕自身が決着をつけないといけないって思ってます」

## 第二十六話 新たな白と光の覚悟（後書き）

次回はついに！ あれを出します！ 分かりますかな！？

## アンケートについて

パソコンの調子も上々でこうして書くことができるようになりました。

アンケートの件ですが整理しようと思います。

サブストーリーのアンケート

今のところ

「光輝の女装」と「アムロがISの世界に出てくる」という二件です。

このアンケートの期限は今月の20日までとします。

宇宙世紀の中で出てきてほしいガンダムタイプの機体

これは

Z、ユニコーン、F91、クロスボーンX-1、V2アサルトバスターです。

この期限はまだまだ先とします。決まり次第、お知らせいたします。

他の作品と比べるとアンケートが多いのですが、それでも力を貸していただけたら嬉しいです。アンケート、感想は随時受け付けていますので、どんどんお願いします！

アンケートの全部を反映させることはできませんが、できるだけ要望に応えるように頑張ります。使おうと思った意見はご本人にメールにて再確認をいたしますので。

## 第二十七話、対話の果てに（前書き）

ちよつと無理やり……かもしれせん。



## 第二十七話　対話の果てに

ずっと座り込んでいる私の目の前にはあの深紅のIS　ナイチンゲールがいる。福音の感覚はなくなったから倒したと思うけど、このISからは叫び声が聞こえてくる。無理やり戦場にだされて亡くなった人たち。忠誠を誓った人の為に亡くなった人たち。そんな命の光を無残にも散らしてしまった人の叫びが頭に響いてくる。

怖い。死んだ人の、憎しみや妬み。人の心を闇に連れ込むほど深い深い闇。このISはそれらを背負って此処にいると思うと、さらに恐怖を感じてしまう。

「君のその感じ方、カミ　ユヤクエスに　織斑光輝にも似ている。もう可能性など……！」

「光輝……くん？　可能性？」

とにかく逃げたいのに足が竦んで動けない。一体何を言ってるの……？

「君や光輝は純粹だ。だからこそ言う。一人で溜め込むな」

「そ、それってどういう　」

「エリスさんっ！」

その声にハツとして振り向けば　ガンダムを纏った光輝くんがこっちに向かって来ていた。でもいつものような元氣を感じられない。身体の限界がきているのか、それともなにかあったの？

「大丈夫、エリスさん？」

そう言いながら私の隣に降り立った。

「私はいいの。問題は光輝くんだよ……」

「僕なら大丈夫。だから心配しないで。ね？」

「だ、ダメ！」

私は足が竦んだ状態で精一杯光輝くんの足にしがみ付いた。そんな状態でいっただらダメだよ……。

「私、感じるんだ。光輝くんが無理してるのを……。ここから逃げよう？ 無理に戦う必要なんてないから……」

「そうだね。無理に戦う必要なんてないさ。僕は話に来たんだ」  
「え？」

戦うのではなく、話し合いに？ 相手はちゃんと応じてくれるの？

「話し合いか。そもそも心の闇を真っ向に受けて、よく立ち直れたものだ」

「それはみんなが助けてくれたからです。暗闇の中、光も届かない場所でのいろんな人の叫びを聞いて、絶望して、死にそうだった僕の心に光が現れました。人は戦うことでしか分かり合えない。戦ったとしても確実に分かりあえると言う訳じゃない。だから僕は一度、光を拒絶しました」

私はしがみついていた足をゆっくり離れた。やっぱり、闇は怖いものだよ。光輝くんですら屈服したんだから……。

「でも僕は光に助けられました。人の心の光、人の心の闇。この二つを受け入れること。そして……僕はみんなの声を聞きました。闇の中で受け入れることも拒んでいただけ、僕は一人じゃないって。

みんなが居てくれるって分かったから。それだけで嬉しかった。その想いが光も闇も受け入れるようになる。すぐには無理だけど、少しずつなら……」

光輝くんの声が震えている。自分はもう一人じゃないという嬉しさに泣いている。仲間いてくれるからが強くなれる。闇をも受け入れることが出来る勇気をくれる。その声に私の胸が高鳴る。

「私も　私も勇気が欲しい。闇の部分も受け入れる勇気が……」  
「大丈夫だよ。人は生きてる限り一人じゃない。仲間がいればどんなものにも立ち向かえる勇気が湧いてくるよ」

アムロさんの言う通りだ。私にはクラスメイトのみんなや他の組の友達がいる！　何より、好きな人が、光輝くんがいるから！

「私、頑張って受け入れるよ。すぐには無理でも少しずつなら……」  
「……！」

「うん。それでこそエリスさんだね」

光輝くんは今までで一番の笑顔を見せてくれた。夕日の光がまるで光輝くんを優しく包み込んでいるようで、その姿は凄くカッコよかった。

「それならカミ　ユミたいになることはないか……。だが、光を見せても人は変わらないさ」

「シャア、貴方は急ぎ過ぎてるんだ。この二人のように少しずつその輪を広げていけば　」

「いくら暖かみを感じても人は変わらない……。それをわかるんだよ

！」

シャアの哀しみを光輝とエリスは感じていた。シャア自身、暖かみを感じて人を信じていたのに、人が変わることはなかった……。

「そんなことない！」

二人と一機から離れた所からそう叫ぶ声が一つと影が五つ。光輝エリスがその方向に向けば

「私はあの光の　暖かみのおかげで自分を見つけることが出来た！」

「あの光は凄く綺麗で、心が安らいだんだよ」

「光輝は悲しみも優しさも人の想いも分かっている！」

「私に本当の強さを教えてくれた光輝さんはあなたなんかには負けませんわ！」

「あの虹の架け橋は人と人を繋ぐ光。それは並大抵じゃ立ち切ることはできない！」

専用機持ち五人のヒロインズが夕日に照らされ、機体の色と混ざり合う。そして。夕日の色に染まっているISが一機。純白の白は何者も受け入れる……。

「零落白夜にあの光が纏った時に感じた暖かみはいつまでも忘れることのできない……いろんな人の暖かみを感じたんだ。それを受ければ誰とだって分かりあえるんだよ！」

専用機全員がここに集い、それぞれの想いをシャアにぶつける。

「君達の瞳は純粹だな。光輝君から渡った心の光をちゃんと理解し

ている。だが人間がみんな分かりあえるなど、ありえないさ」

「シャア、まだそんなことを言うか！ この子たちの内なる可能性を信じる！ この世界はISの影響で女尊男卑になっているが、この子たちのような気持ちを持つものが増えれば世界は 人は変わっていきける！」

「だったら私に見せてみせろ！ 人の心の光を！ この闇を打ち破れるかな？」

ナイチンゲール シャアの周りに黒いオーラが溢れている。人の心の闇を具現化していて、それは一夏たちにも見えていた。

「あれがああISの闇なのか？ アムロさん、一体どうするんだよ！？」

「大丈夫だ、一夏。光輝、分かるね？」

「はい！ シャアさんに僕達の想いを！」

ガンダムを纏った光輝からも緑の光が溢れている。ガンダムもナイチンゲールもそれぞれから緊迫した空気が流れている。他の七人はそれを見届けることしかできない。これは光輝の覚悟でもあるからだ。

二機は同時に瞬間加速を行い、ガシンン！ という音を立て、お互いに手を押し合う形になった。同時に緑と黒のオーラが周りに拡散する。

「貴方にだって分かっているはずです……この想いがあれば人と人は分かりあっていきけると！」

「だが君のような暖かみを持ったとしても、人はお互いを傷つける。それを分かるんだよ！ 光輝！」

「分かってます！ だから」

「だからこそ」

「世界に人の心の光を見せなけりやならないんでしょ（だろ）！？」

「……っ！」

オーラは二人を中心に広がっているが光が闇を包み込んでいく。無闇に消すのではなく、闇をも受け入れる強さを……。光輝は今まさに人の心の闇すら受け入れている。

「あの悲しみの籠った叫びが消えていく……？ それに光が……」  
「闇が……消えていく。それに暖かな光が、包んでいく？」

光が周辺の領域を包み込み、またたく間に周辺は心の光でいっぱいになる。まるでアクシズ・ショックにも似ている。

二人は自然と押し合いを止め、静止している。光輝や専用機組は驚きから周りを見渡している。

「これはまるで……」

「アクシズを包んだ時と同じじゃないか……」

「アクシズって うわっ！ な、にこれ……」

突然、光輝が光の繭に包まれる。しかし光輝は不思議と恐怖は感じずに安らぎを感じ、そして徐々に意識を失っていった……。

「ここは宇宙、なの？」

目が覚めてここが宇宙なのだとすぐに分かった。だって地球が見

えるんだもん。

「青くて綺麗だね。でも地球を包んでいるあの光ってまさか……」

そう。地球の周りにあの光　人の心の光が漂っているのだ。アムロさんの話していたアクシズを押し返した時のことだろうか。地球を包むかのような光は鮮やかなカーテンみたいだ。見惚れていると後ろから声をかけられた。

「あれが全部、サイコフレームのおかげだとは思いたくないな」

振り返ればそこにはアムロさんがいた。軍の制服らしきものを着ていて、如何にも軍人って感じがするけど、あまり似合っていない……と思う。

「サイコフレーム？」

「簡単に言えば機体の性能を上げるものだよ。でもまだ謎の部分が多くてね、なぜか人の意志を共鳴して未知のエネルギーを発するんだ。現に君も体験したはずだよ。あの暖かみを具現化できたのもサイコフレームの力だが……全部が全部そうは思いたくないね」

「確かにそうですね……。でもそう想う心があったからこそ反応してくれたんじゃないですか？」

「確かにそうかもしれないな。それは人の力だね」

「シャアさんにも見せたかった……人は力を合わせば、どんなことだって乗り越えられるって」

「さっきシャアに会ってな、また人を信じれるかもしれない。そのきっかけを作ってくれた光輝君にお礼を伝えてくれ、と言われたよ」

あのシャアさんが……？　そっか、僕達は分かりあえたってことなのかな？　それが嬉しくて僕は自然と顔が弛んでしまった。

「その純粋な君の気持ちが人を照らしていく。そして君の強さでもある。君なら力の使い方を分かっているはずだから、これを授ける。光と闇を受け入れて、本当の意味を知った君なら……」

そのアムロさんの声とともに周りがバツと光る。眩し過ぎて眼を開けられないけど

「ニュータイプは戦いの道具ではないことを忘れないでね」

そう言う女性の声を聞き、僕は

繭に包まれてから数分。未だに変化はなく、エリス以外は心配していた。光輝はどうなってしまったのか？　そしてナイチンゲールも動かない。攻撃するべきなのか？

「エリス！　光輝はどうなってるんだ！？」

「わ、分からないよ。ただ、無事なのは確かだよ。あの繭から凄く暖かみを感じるから。それにあのISは待っているようだよ？」

「待ってるって何を！？」

「分からない……っ！　光輝くんっ！」

そうエリスが叫んだ瞬間、繭が解かれていく。その中からでてきたものに全員が驚愕した。

まず目につくのは翼のようなものが背中に着いているが良く見ればフィンファンネルで、左右のフィンネルラックに装備されている。背中の中央にスタビレーター、その下にスラスター、プロペラタン



クが装備されている。青と白の二色の装飾はシンプルで綺麗だ。天使のようなその姿は見たものを魅了するほどのものがある。

「それは……二次移行、か」

「そうです。ガンダムが二次移行した姿、HI・ガンダムです！」

## 第二十七話、対話の果てに（後書き）

ついに登場しましたH I - です！ 本当はミノフスキードライ  
ブとか装備させる予定だったんですが、やめました。

作者は ガンダム系統は好きだったりします。

HI - ガンダムについて（随時更新……かな？）

名称

ハイニユー

HI - ガンダム

世代

正確には分からないが第四世代の域にはあるだろう。てか普通にそれ以上か？

待機状態

ガンダム状態と同じ、T字をした首のアクセサリ

概要

光輝が人の心の光と闇を受け入れアムロから授かった新たな力であり、光輝の中に現れた新たな想いの象徴でもある。

見た目は光輝の腕、足にアーマーがついて、背中にはHI - 専用のファンネルラックとフィンファンネル、プロペラタンク、スタビレーターがついた感じ。決して完全装甲ではない。ちょっとしたところを変更・追加する予定。

サイコバースト時には、蒼色をしたところが緑に変化する。さらにダブルオーライザーのトランザムバーストみたいなこともできる。発動させても負荷は掛からないため安全性が高まった。

武装

基本 ガンダムと変わらないがいくつかの変更点がある。

- ・ライフルやキャノン、サーベルのビームの色が青に。でもフィンファンネルのビームはピンクと変わらず。サイコバースト時にはビーム系は緑に変化する。

- ・ビームサーベルがファンネルラックの左右一つずつに装備されるようになった。

- ・全体的に武装の威力が上がっている。もちろん運動性や防御力もです。

- ・2つ程新装備が

### 腕部マシンガン

頭部マシンガンと同じく牽制用の武器。しかし頭部マシンガンは少しは威力が上がっている。それでも牽制は牽制である。

### ハイパーメガバズーカランチャー

ＨＩ－ガンダムの中では一番の威力を誇るが、発射するたびにシールドエネルギーをもっていられる。その代わり、これに使うシールドエネルギーを増やすことで威力を上げること可能。チャージが必要なので連射は不可能。もし、できたとしてもすぐにシールドエネルギーが切れてしまう。

### フィンファンネルの変更点

ＨＩ－のフィンファンネルは収納している状態で、射出している状態にすることもでき、ビームが発射されるところがバーニアにもなり、その場合は機動力が上がる。

また、フィンファンネルを射出している時もファンネルラックがバーニアになり機動力が上がる。

攻撃、防御、機動に分けれるため完全に第四世代の武装となった。

H I ・ ガンダムについて（随時更新……かな？）（後書き）

まあこんなところでしょうか。何かご質問があればお答えしますの  
でお願いします。

## 第二十八話　赤の最期とそれぞれの思念（前書き）

臨海学校編は今回が最後です。 帰りのバスとかは書きませんから W  
W

## 第二十八話　赤の最期とそれぞれの思念

僕とアムロさんはシャアさんと対峙して話をしていた。二次移行したからと言って、僕自身は戦う気はなかった。それはシャアさんも同じだった。

「もう、戦う必要はない。君達の輪が少しでも多くの人間に伝えられるを願っているよ」

「あ、ありがとうございます……。これから貴方はどうするんです？」

さっきまで敵だった相手にそう言われるのはちょっと不自然な気もしたけど、気にしないようにしよう。

いきなりナイチンゲールは光となって消え、中から人が出てきた。金髪の髪をオールバックにしてマントに濃いめの赤の……軍服？

にしては派手な気がするけど、けっこう上の人だったのかな？　まさか、この人がシャアさん？　にしても派手だ。

「私は消えるだろうな。心の闇のおかげで姿を保っていたんだから。でもこれは呪縛でもあった。それを解いてくれたんだ。感謝する」

「シャア……」

「はい……でもせっかく分かり合えたのに、すぐに消えてしまっただけ……」

「そう悲しむことはない。私はラアアの元へ行くだけだ。そこで君たちを見守っていいこうと思う」

ラアアって誰？　そう聞こうとしたけど



「光輝、悪いがラアの事についてはいずれ話す。その時まで待ってくれるかな？」

「え、ええ。良いですけど……」

と断られてしまいました。この様子だとけっこう隠してることもありそうだね。いつか絶対話して貰いますから！

「そう言うことだ。時に光輝君？ 握手をしてくれないかな？」

「握手ぐらいなら何回でもいいですよ」

そう言い、ISを解除してシャアさんの手を握る。その手はとても温かく大きいものだった。優しさに溢れた大きな手で安心を覚えるよ。

「君の手は小さいが、私には大きく感じるよ。優しさと慈愛を併せ持ったこの手なら誰だって助けられるし、導くこともできるだろう」

意外な答えにちょっと照れてしまう。そう言われたのは初めてだなあ。

って！ シャアさんの手が消えてく……！！

「もう消えてしまうか……。アムロ、この子たちを頼んだぞ？」

「任せてくれ、シャア。またいつか会える日を願うよ」

「君とはゆっくり話がしたかったな。専用機持ちのみんなもその力を誤った方向に持っていくなよ？ そうすればおのずと自分の為すべきことが見えてくるはずだ」

僕以外の全員も戸惑いが隠せないがその言葉の重みを知り、全員頷く。この間にもシャアさんの身体が消えていく。

「さて光輝君。君やエリスのような能力を持つものがまた現れるよ  
うだが、絶対に争ってはいけない。絶対に分かり合うんだ。良いな  
？」

「大丈夫です！ だから見ていてください！ 人は変わりますから  
！」

「それでこそその君だ。さて ー」

シャアさんの身体が完全に消える前に

「今行くよ……ララァ」

そう言い残して赤い彗星 シャア・アズナブルは光となって消  
えていった……。

その日の夜、夕飯も済ましお風呂も入ってゆっくりしているとエ  
リスさんからの連絡で浜辺に来ていた。二人きりで話したいとのこ  
とでアムロさんは部屋に置いてきた。

夕方の戦闘から帰って来た時は無断出撃でお母さんに凄く怒られ  
たけど、どこか安心した声で僕達の帰りを迎えてくれた。ガンダ  
ムが二次移行したことはまだ話していないけど、まあ良いと思う。  
てか戦闘をモニターで見てたと思うし知ってるのかな？

「まあいいか。しかし恐ろしく長い一日だった……」

束さんの登場、箒さんの専用機「赤椿」、銀の福音の暴走、そし

て赤い彗星　　シャアさんとの二度目の戦い、対話。こんなことが  
今日一日での出来事なんて思い返してみると疲れがふつと出てくる。  
せつかくお風呂に入ったのに。

「でも、なんか不自然な気がする……」

束さんが篝さんへ赤椿をあげた直後に福音の暴走。これって本当に偶然なの？　束さんの目的って一体……。

止めようか。当の束さんもいつの間にか居なくなつたようだし、  
いつかまた会つた時に聞きだそう。凄く不自然過ぎる……。

「こ、光輝くん？」

夜の風を浴びながら砂浜に座つて考えていると後ろから聞き覚え  
のある声がする。振り向けばなぜか水着姿のエリスさんが顔を赤く  
して僕を見ていた。うん、やっぱりいつ見ても似会つてるよね。

「僕も水着で着るべきだったの？　泳ぐわけでもないし浴衣できち  
やつたけど」

「そこは気にしないでっ！　私が勝手に着てきただけだから……」  
「なるほど、できるだけ気にしないようにするよ」

僕がそう言うのとエリスさんは何か決心したのか、僕の横に座つて  
くれた。なんか緊張してるようだけど大丈夫なのかな？

それから数分は二人ともだんまりだった。僕は夜空や海の音を楽  
しみながら座っていたけど、常に顔は赤いし、髪を指にクルクル巻  
いたり、手を無意味に動かしたり、なんか不安定？　って言ったら  
失礼だけどそんな感じた。

「さつきから」

「あ、あのさ！」

いきなりの声にちよつとビックリしてしまう。今のエリスさんおかしいよ……。

「光輝くんは、す、好きな人って……いる、の？」

これは異性がつて意味なのかな？　しかし、どこか脅えているような声。原因は分らない……。

「そうだね……。そういうこと聞かれること自体が初めてだから戸惑うけど、そういう人は居ないよ。僕は友達がいてくれるだけでいい。でも、もし僕を好きでいてくれる人がいるなら僕はその人を一生好きで居続けたい」

だって途中で別れるなんて寂しいんだもん。だったらずっと一生に居たいよ。僕は一人が怖いから……。

「そう、なんだ……。えっとね、わたしは　ひゃっ」

そうエリスさんが続けようとした時、どこからか激しいプレッシャーを感じた僕は岩陰に隠れるが、エリスさん押し倒すような格好になってしまった。しかもお互いの鼻が付きそうなぐらいの近距離だった。

「エリスさん、ご、誤解しないでね。激しいプレッシャーを感じたから咄嗟にこうしただけで……」

「うん、分かってるけど、光輝くんにならこうやって、ご、強引に

「さえてもいいよ?」

エリスさんは目を閉じ、何かを待っているような感じだ。これは……引き込まれそうだ。そのまま僕はエリスさんの唇に

ガシャン

……その音が僕を現実に戻してくれた。この音はまさか……

顔を上げるとISを装備したセシリアさんにスターライトMark?、ラウラさんが右肩のレールカノンで僕を捕捉していた。しかも結構な近距離で……。激しいプレッシャーはこの二人からだけどこまでの怒りは……。僕はここでやられてしまうのか!?

「あら、光輝さん。こんなところでなにを! してらっしゃいますの?」

「ふん、夜に抜け出して何かと思えば……お前はそういう奴だったのか?」

「ち、違つよ! 二人とも落ち着いて! エリスさんも何か言つてよ!」

「二人とも……これで私が一步リード? じゃないかな?」

その言葉に二人がキレた。あ、死んだな僕。

「光輝、立て」

「さあ光輝さん? あちらでゆっくりお話を聞かせて下さいな?」

僕は背中から二人にホールドアップされ、歩いて移動した。こんなことならISを持つてくるべきだった……!

僕はセシリアさんとラウラさんに事情聴取と言う名の拷問を一時  
間程受け、解放された。終わってからエリスさんが来てくれて、途  
中まで一緒に帰った。ホント、こういうトラブルが多いというか、  
災難だ。

「ごめんね光輝くん。助けることが出来なくて……」

「だ、大丈夫だよ。それより、今度一緒にこの能力の事を聞かない  
？ アムロさんなら何か知ってるようだし、気になるからさ」

「いいよ。何か知ってるのなら是非とも聞きたいよ」

そんな会話をしながら僕達はそれぞれの帰路についた。さて、あ  
の拷問のせいで疲れ過ぎて眠くないよ……。ちゃんと寝れるかな？

光輝がエリスに呼ばれた同時刻、篠ノ之東は岬の柵に腰を掛けてい  
た。目の前には海が広がっており、高さ30mはあるというのに足  
をブラブラさせている。

「赤椿の稼働率は絢爛<sup>けんらんぶとう</sup>舞踏を含めて42%かあ。まあこんなところ  
かな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がったデータを見ながら無邪  
気に微笑む。

子供のような頬笑みだが、どこか意味深な頬笑みでもあった。

鼻歌を歌いながら別のディスプレイを出す。それは白式の二次移  
行したときの戦闘映像だった。

「それにしても白式には驚かされるなあ。操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで」

「まるで『白騎士』のようだな。コアナンバー001にして初の実験機投入機、お前が心血注いだ一番目の機体に、な」

束の後ろの森から出てきたのは漆黒のスーツを着た千冬だった。音もなく近づき、まるで環境に一体化しているようだ。

「やあ、ちーちゃん」  
「おう」

二人は互いの方を向かず、千冬は木に身を預け、束はまた足をブラブラさせている。顔を見なくてもどんな表情かは分かる。この二人にはそのぐらいの信頼がある。

「いやあ、白式も凄いいけど ガンダムもナイチンゲールも凄いいよね。私でもあそこまでのISは今の私には無理かな」

そう言ってまた別のディスプレイを出す。それは ガンダムとナイチンゲールの戦闘映像に人の心の光が周辺を包み込んだ映像がながされている。この光を見て、束はどう思ったのか？

「綺麗だよな。これを見たら人と人が分かり合えるって……ふふっ、面白いね」

「……綺麗だな。だがこれを見たら心が暖かくなる。これがあの子の力か」

「でも、所詮は綺麗事だね。こーくんも甘いよ」

さっきまで明るかった束とは違い、暗い声で喋る束。極度の他人嫌いの束には光は届いてないようだ。束にとって、光輝も信頼でき

る数少ない人物だが今の束は光輝を否定している。

「だがその純粋な気持ちがあの子の最大の強さだ。お前なんかには分からないだろうがな」

「分からないね。まあ貴重なデータが取れただけでも良しとしよう」

「……………」

千冬は何も喋らない。この時の千冬は怒りに満ちていたか？ それとも

「今日は有意義な一日だったよ。いろんなものも見れたし、何より、大好きなちーちゃんにも会えたしね」

「最後のは余計だ、馬鹿」

「相変わらずだね。さて、最後に天才の束さんからのメッセージ！ガンダムはまだまだ現れるから死なないようにね。でも全部が全部、敵じゃないかな？」

強い風が吹き、刹那 束は消えた。

「全く……変わらないな」

そう言ってほほ笑む千冬。だが千冬にも束の行おうとしていることまでは分からなかった。

「光輝、いつか束を救ってやってくれ……」

千冬はその場を後にした。この数分後、光輝への拷問が始まったのである。千冬はそれに気付かった。



## 第二十八話　赤の最期とそれぞれの思念（後書き）

ここで皆様に質問なのですが、アムロに専用気持ちのメンバーに自分の過去を話させようと思うのですがどうですかね？

すいませんが応えていただけませんか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8475s/>

---

IS《インフィニット・ストラトス》 駆け抜ける光

2011年11月27日22時47分発行